

488
9

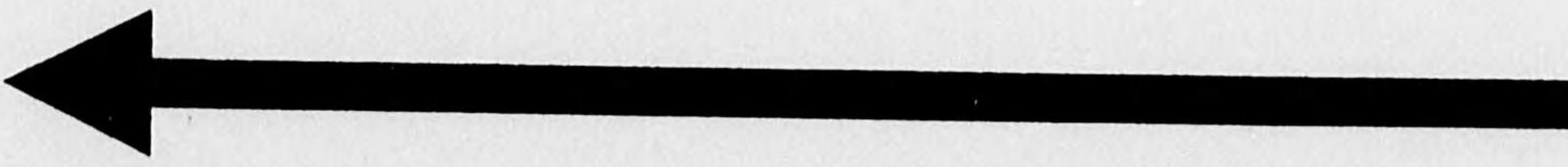
488-H89-2ウ



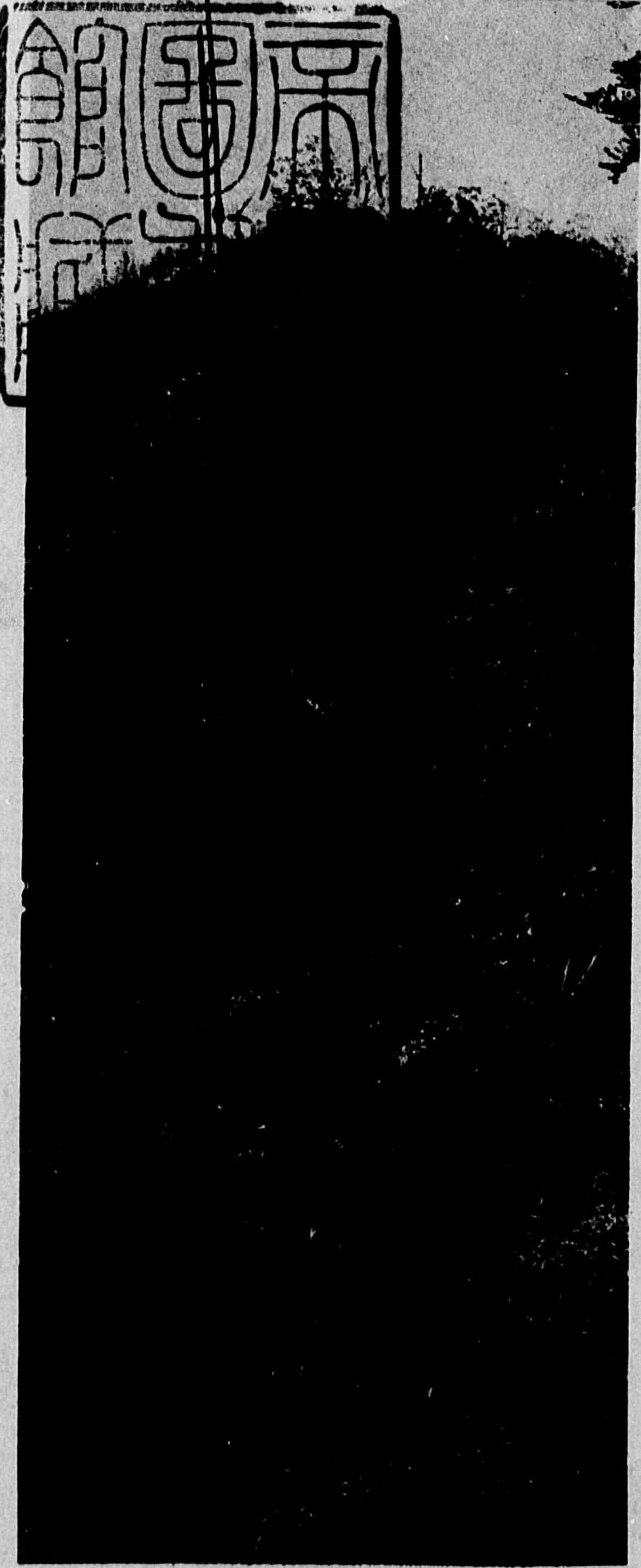
1200500743719



始



26.127.



公爵 鷹司信輔序

堀内 讚位著

鳥獸の習性

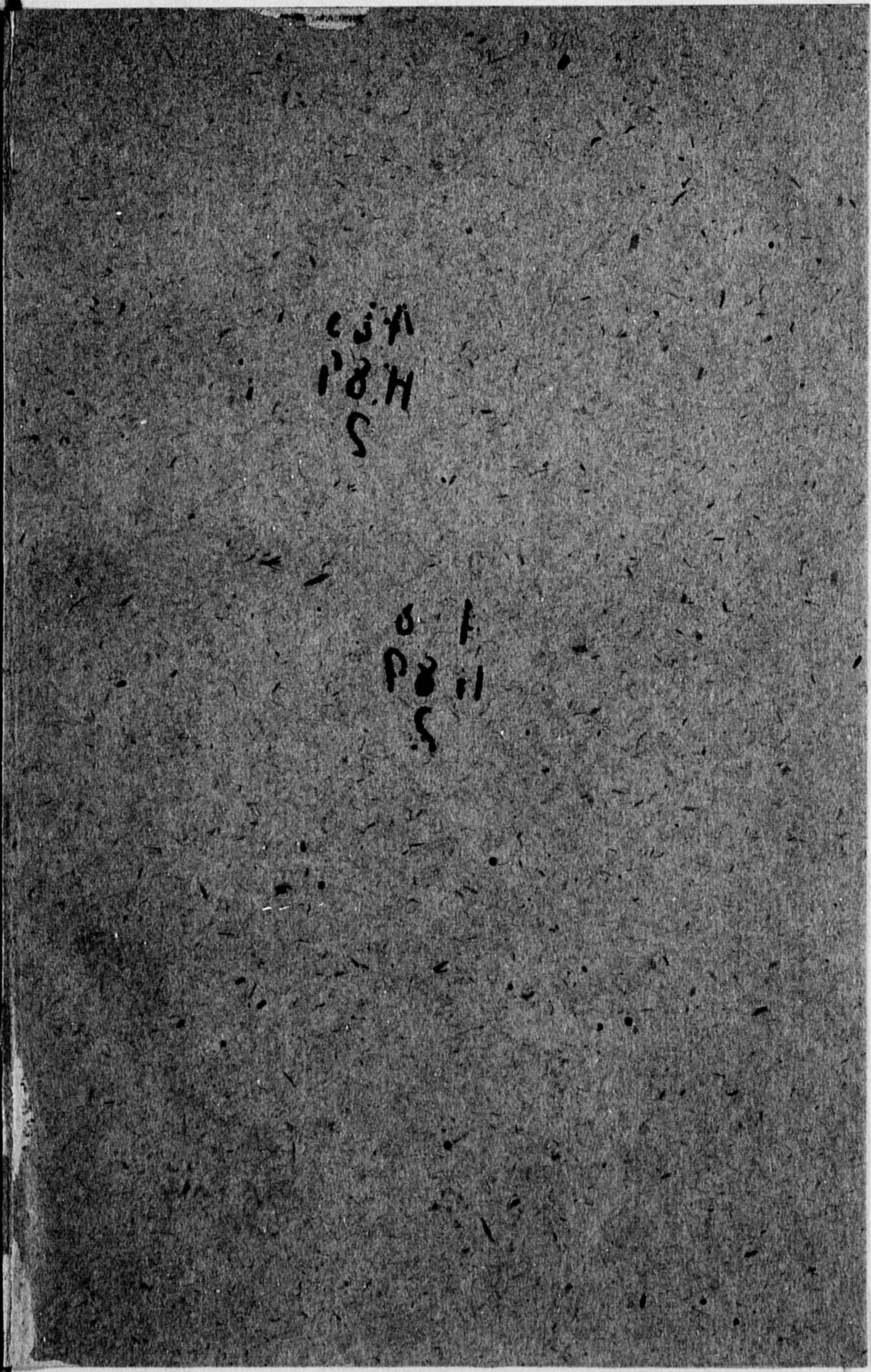
488
H89
2

— 狩獵家の見たる

昭森社版

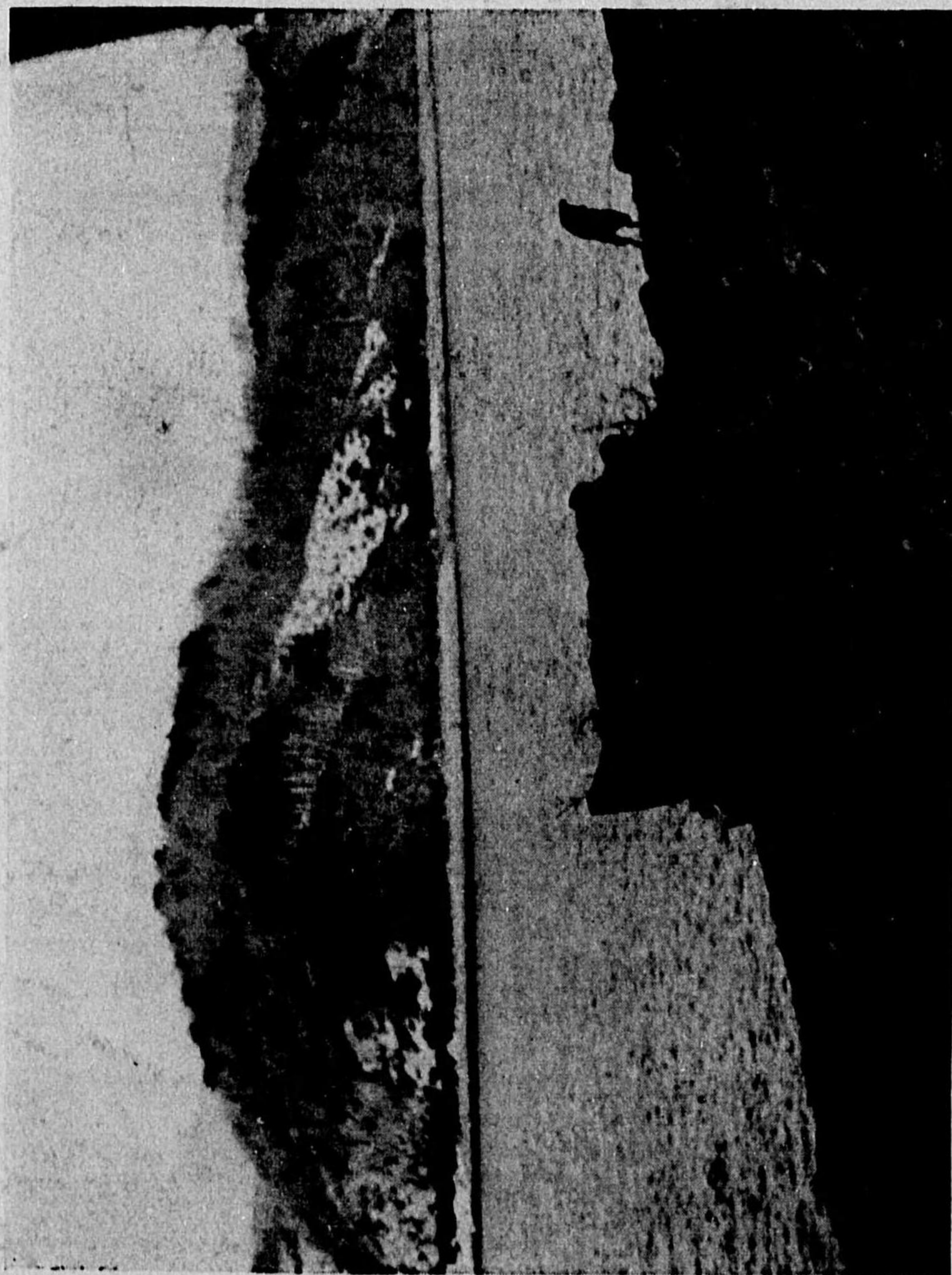


岐阜縣下呂温泉上の茅葺い舎の網の仕掛け





鉤にかかったカルガモとその仕掛け



鳥舎の獵者と活躍中の赤犬



仔兎を抑へつけ御褒美をねだる蒼鷹の表情



秋田縣乳頭山で白兎を捕へた熊鷹

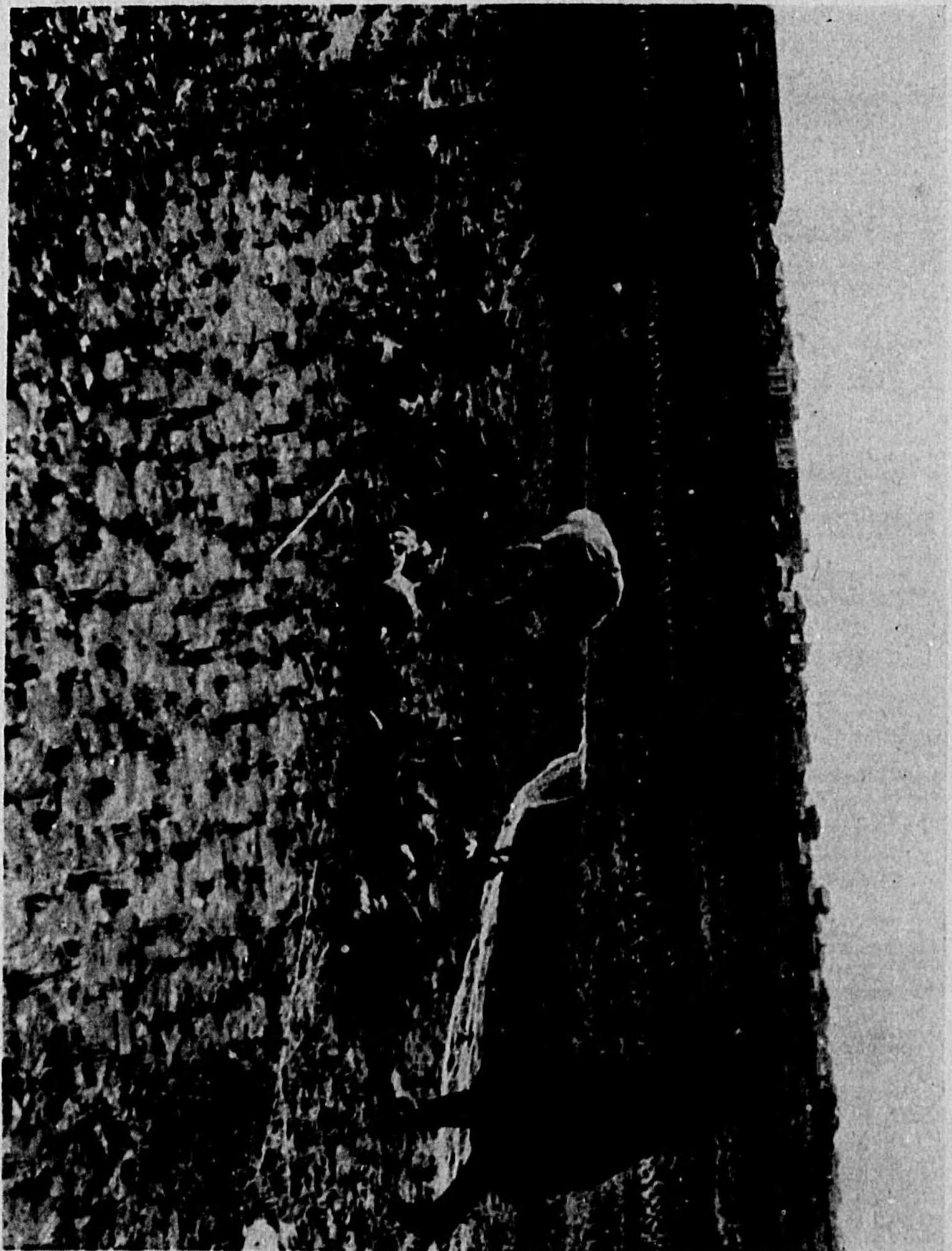


嘴と爪と翼を使つて樹幹を攀ぢるオホミヅナギドリ

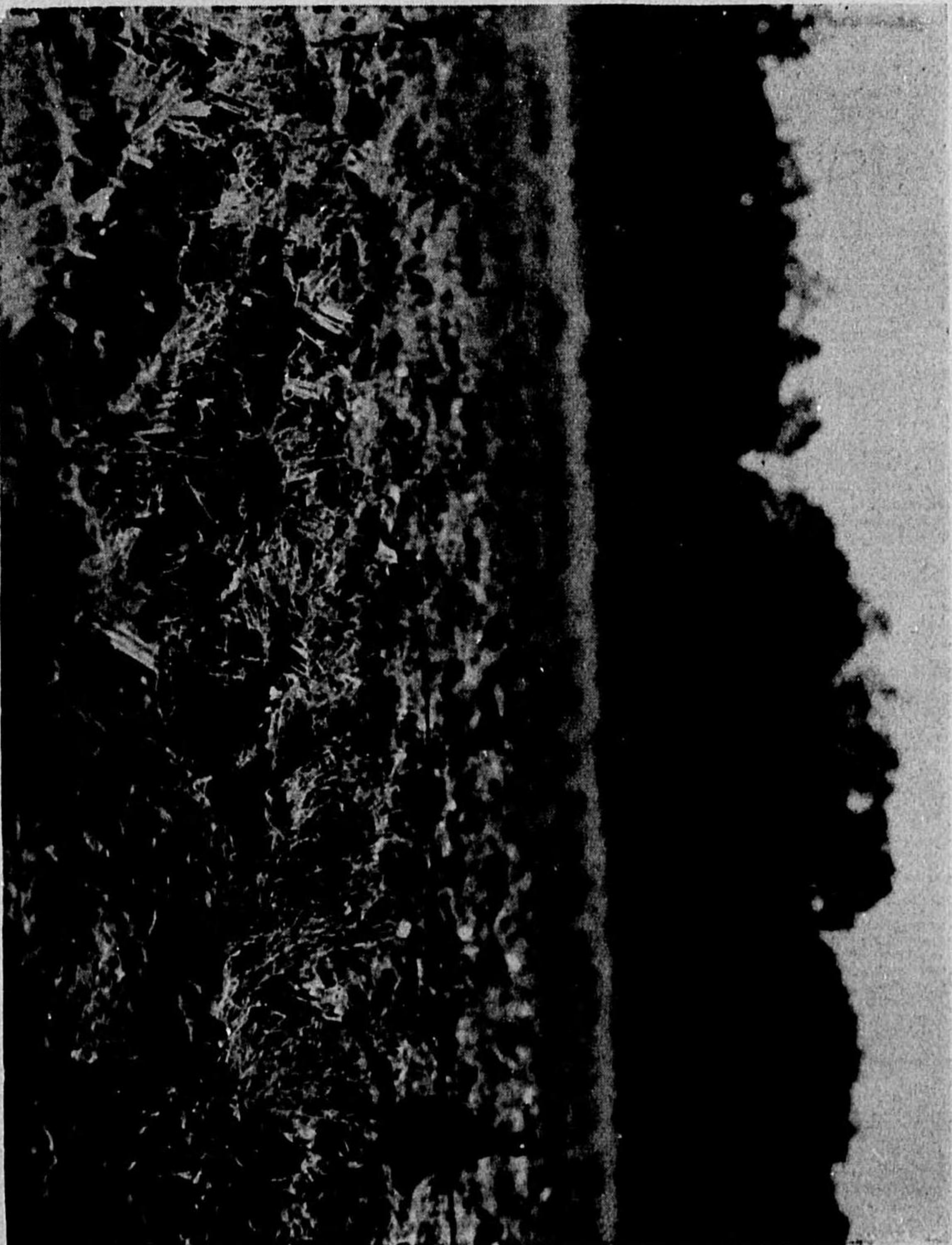


怒れる雄秋鷲が自分で自分の首を締める

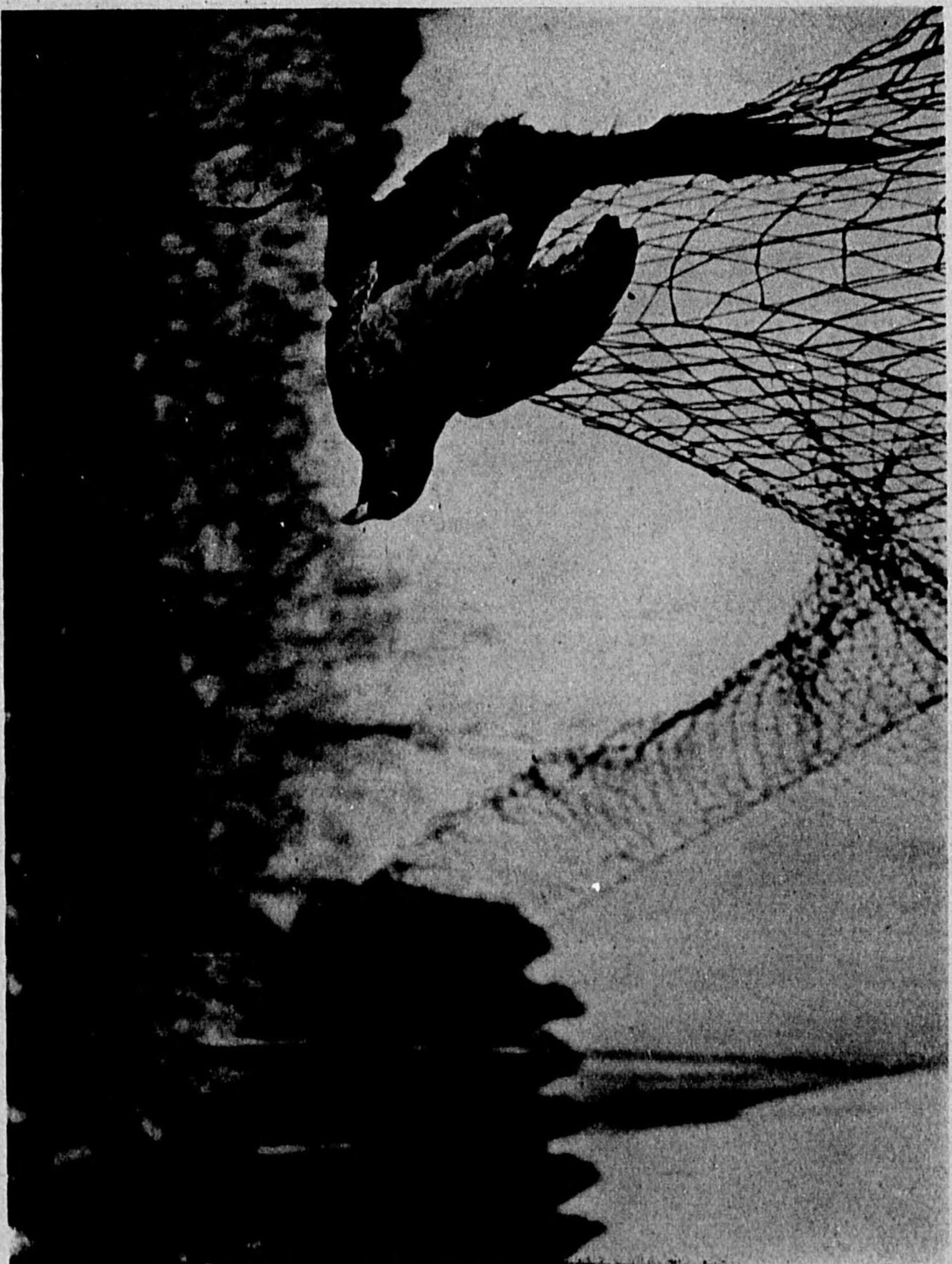
二十六羽の菱喰を一網に納めた光景



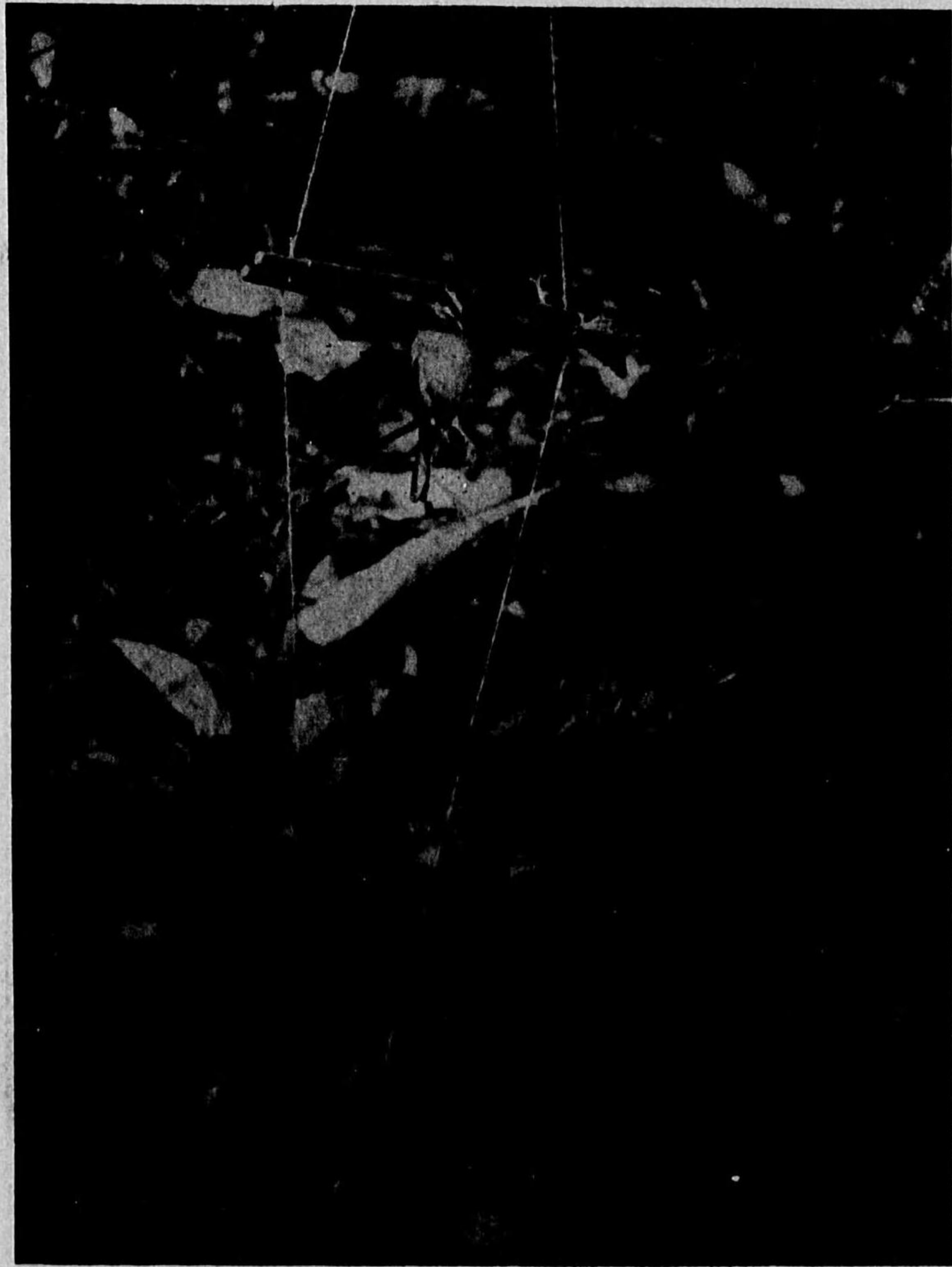
抱卵中のオホミヅナギドリを穴の中から引っぱり出す



罟の一層に憤然として現はれた野雄（先方）。罟との中間に見える紐が巻勢子繩で、繩はこの繩の左端に仕掛けてある。



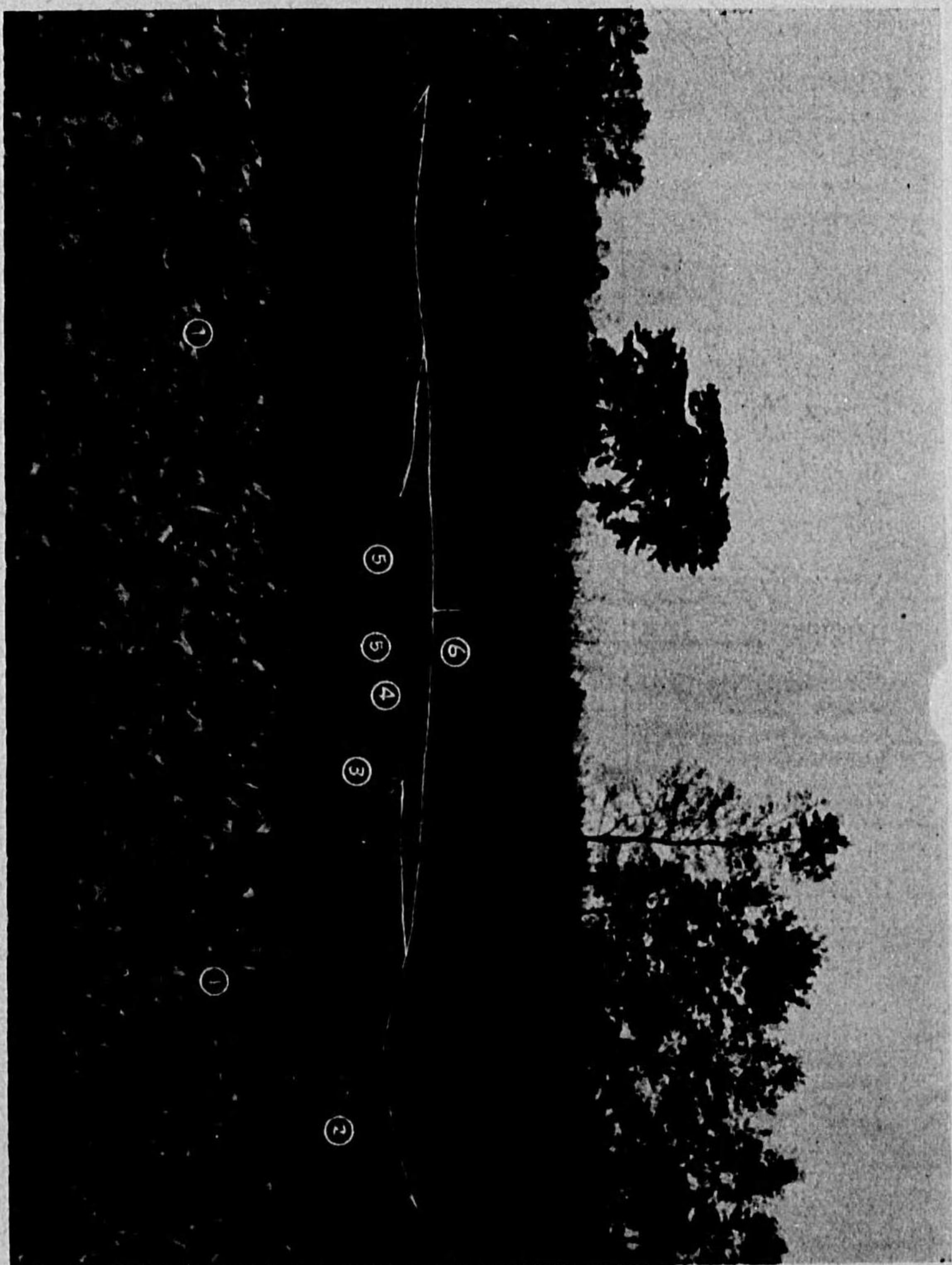
罟にかかった雄雄



小鳥を捕る宙張り



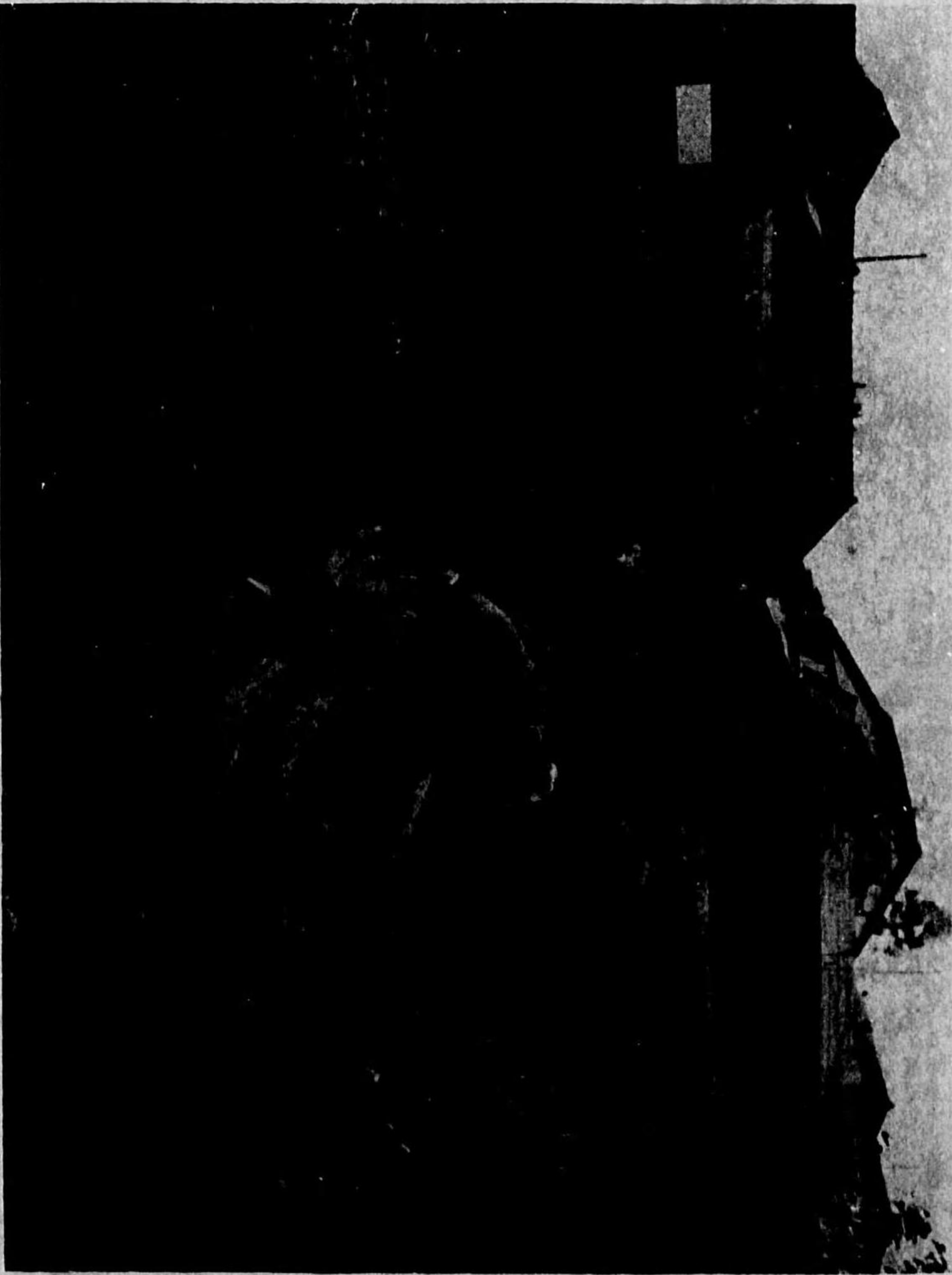
獲物の雌雄を踏んまへた隼



兩羽差双網の仕掛けを示す。①控杭、②網、③⑤四、④盲目四、⑥鳥舎



一弾一殺で雌二羽を撃ち捕つたが最後の雄は半矢となつて悶えてゐる



網場の仕掛けと鳥の囀二羽、網場の中に立てる藁束の上に眼を潰した雀を載せておく



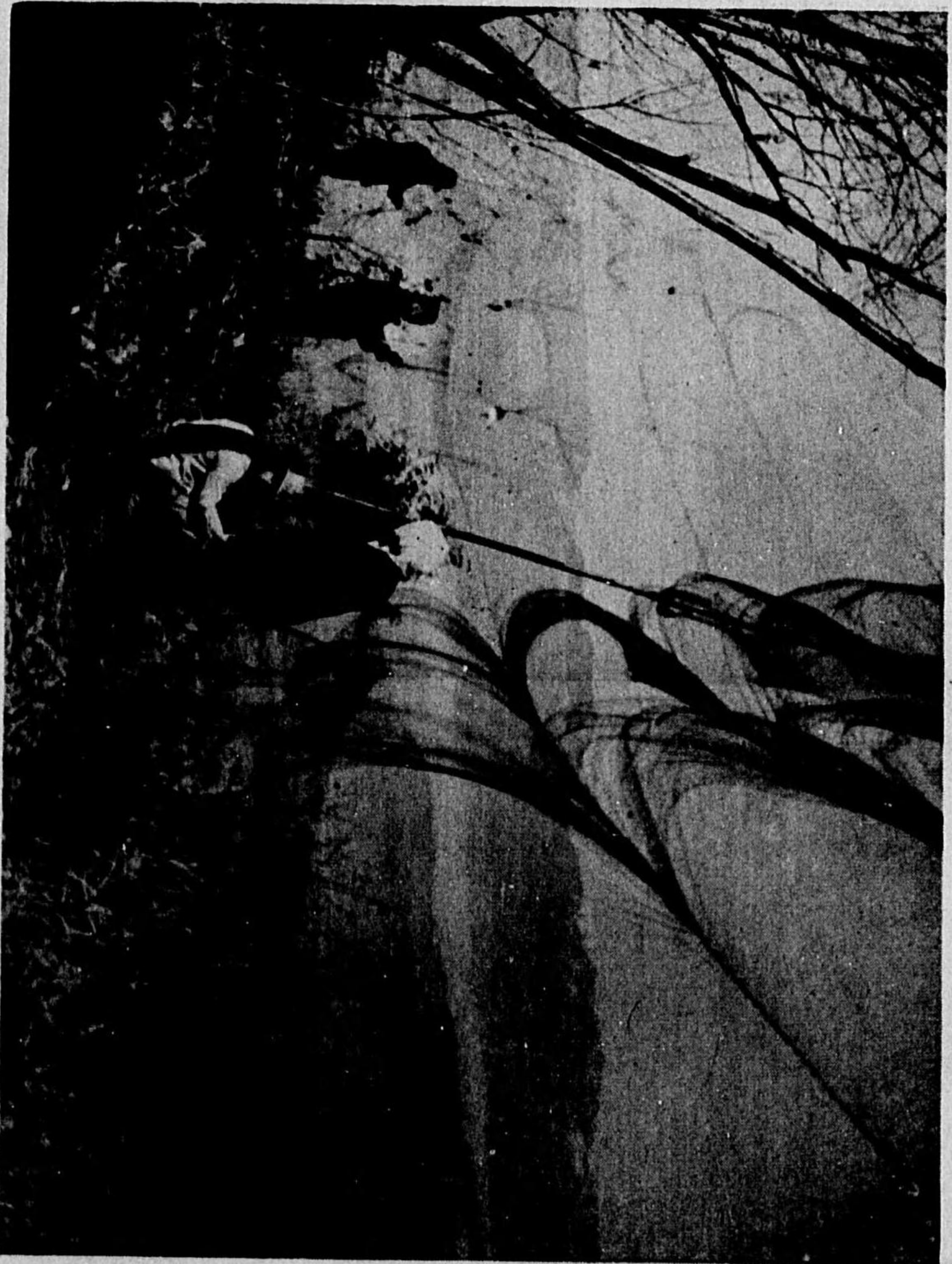
眼を潰された雀の囀



松樹上の高簾と罟，簾には既に九羽の獲物がかかつてゐる



網にかかった入内雀



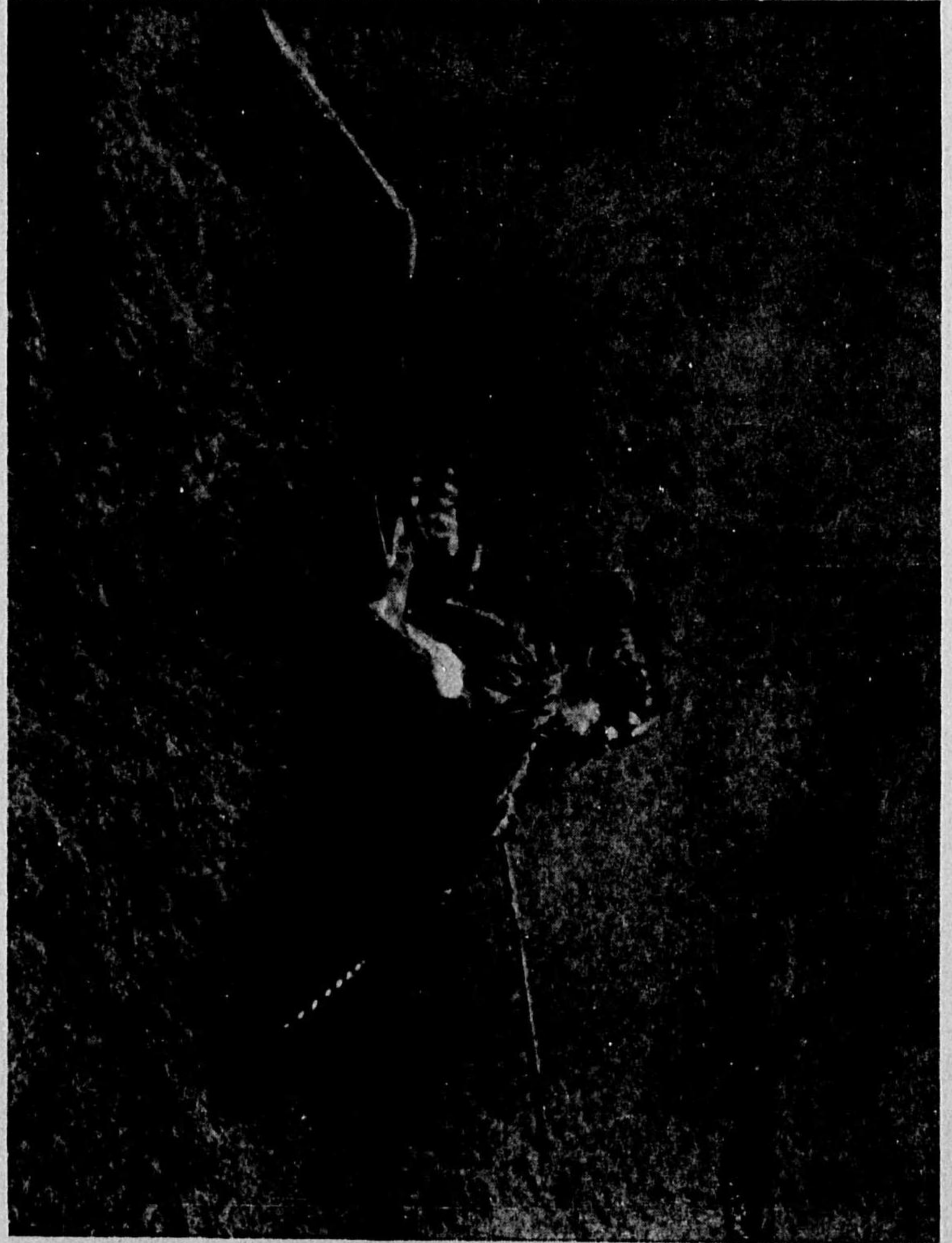
信州淺間温泉上本郷山鳥舎、網を透してアルプス連峰を望む



枯葉を冠った籠の中では岡同志が剣戟相摩してゐる。左方に白い腹を見せるは綱にかかつたアトリ



勢子に追ひ立てられ急坂を本待に向ふ親仔熊



獲を背負った隼の形相

4

942
8

序

堀内讚位君は曩に「日本鳥類狩獵法」を著し我國個有の鳥類狩獵を君の卓越せる寫真により不枯の記録を残されたが、今回は「鳥獸の習性」なる表題の下に狩獵家としての立場より見たる鳥獸の習性に關する書物を執筆せられた。

昔より戰に勝たんとする者は先づ敵を知れと云はれて居るが、狩獵に於ても亦然りて、良く己の狩らんとする鳥獸の習性を辨へて居らねば好結果を得る事は出來ないのである。



富士を背景に樹上から獲物を狙ふ銃手

本書を一覽するに、良く狩獵鳥獸の習性を説明してあるのみならず、其の文章たるや極めて平易にして流暢讀んで飽く所を知らぬ誠に面白い本である。而して又、かゝる習性は鳥獸を研究する學者に對しても参考の資となる所甚だ多く、此の道の人々に對しても良著たる事は疑を容れざる所である。今余は君の第二の名著を得て喜にたへず、敢て不文をかへり見ず此處に請はるゝまゝに其の序を記した次第である。

2

公爵 鷹司 信輔 識

鳥獸の生活 目次

天敵に寄る鴨の奇襲……………三

——赤犬獵から——

赤犬で鴨を寄せる——囹には二種ある——色仕掛の囹もある——天敵利用の囹もある——西洋にも存在——先づ船で目的地へ——晝寝の鴨を追ひ立てる——鴨の群飛來——赤犬の演技開始——停止した瞬間が射撃の機會——何故に赤犬へ寄るか——水中に轉落した朝鮮牛にも寄る——燕が赤犬を襲撃する

1

音響で操られる鴨……………一七

——鴨場の獵から——

盤木の音に寄る鴨——鴨場は鴨の保護施設——囹は人間の廻しもの——囹學校の教育——教育して人意に添はしめる——囹に依存する鴨——鴨の嗅覺は鋭敏

釣鉤で釣れる鴨……………二九

——釣鴨獵から——

啄む鳥は後を濁す——餌には川エビとヤゴを使ふ——鴨は夜間活躍——流れのある所にはよく現れる——羽で水を動かして凍結を防ぐ——川エビにはカルガモがかかる——行動は雌雄連れ添つて——鴨の雌雄関係は蕃殖期に限るか——釣鴨獵から拾ふ数々の習性

人間を釣るカルガモの擬傷………

三九

——鷹狩から——

天賦の雛の守護法——擬傷を行ふ鳥類——カルガモの擬傷——擬傷に鷹まで釣られる——擬傷と怒の皮

棲息分野を確然とする鵞………

四九

——宮内省保存鵞の鷹狩——

似て非なる鵞と大鵞——鵞は稻作を荒らす——鵞獵には蒼鷹を使ふ——飛んで逃げるより歩いて逃げるが得意——鷹は水平な身を垂直にして掴む——棲息の分野が確然としてゐる——鷹に追はれて人家へ飛び込む——萬死に一生の鵞は二度と飛び立たない

物凄い雄秧鶏の闘争精神………

六三

——宮内省保存秧鶏の鷹獵から——

人の心を弾ませる緋秧鶏の鳴聲——雌雄の関係はいつ結ばれる——鴨の闘志は常に満々——緋秧鶏でも怒りつばいのけ捕り易い

水鳥でありながら山中に營巢………

七三

——オホミツナギ鳥の捕獲り獵から——

禁鳥オホミツナギドリを捕る獵——穴を掘つて樹木を枯らす有害鳥——穴を掘つて巢を營む——樹間を攀ち空中滑走で飛び出す——穴を掘つて巢を發く——巢立直前に脂肪消耗期がある

啄むにも眠るにも番鳥を立てる雁………

八五

——宮内省保存雁の無双網獵から——

昔の人の自然を観る眼は科學的——文人墨客の見た習性——雁は晝も夜も活躍する——食物の誘惑には雁として參る——常に番鳥を立てて警戒——雁には數理の觀念があるか——木の葉落して安全地帯へ降下

腕力が物を言ふ雉の社會………

一〇三

——宮内省保存雉獵から——

民間では出来ない雉獵——菜種の花咲く頃が獵期——卵を探つて來て鶏卵に化させる——囿にも入學考査がある——教育は個人教授——囿を訪ねる時には一々ノックする——囿にも狭き門が待つてゐる——腕力に應じて雌を獲得——棲息分野も自己の腕力で——鳴きの張具合で強弱を知る——自由自在に雌を誘導する勢子繩——雄囿は鄭重に雌は粗暴に——

— 鳴くが先かホロが先か — 強い雉は怒りつばい — 後家さんの處分はクロンボの手で — 勢子繩を潜りもせず飛び越しもせず

雉は常に避難所を決めておく…………… 一三三

— 宮内省保存追掛雑獲から —

雉の朝食は早朝の田圃の中で — 一反歩の野地が常設避難所 — 避難所に野地を選ぶ理由 — 飛翔高度はほぼ一定

人威を藉りて鷹の難を避ける雉…………… 一三五

— 宮内省保存上げ鷹獲から —

早朝啄食中の雉を狙ふ — 雉の姿に身を竦ませる雉 — 人威を藉りて鷹の難を避ける — 雉は近視眼にあらず

砂浴しながら餌を啄む山鳥…………… 一四三

— 山鳥の啄み獲獲から —

午前四時にホロを打つ — 秘境秩父の獵 — 陽當りのよい山に啄場が出来る — 鳥舎を築いて山鳥の眼をかすめる — 進んでは立寄り立停つては進む — 金属性の音響は禁物

同僚の屍を掻きのけて水を呑む…………… 一五七

— 山鳥の水場獲獲から —

山鳥のつく水場 — 水を呑むは日没前 — 雉の屍を掻きのけて水を呑む雉

鳩は半圓陣の中央を突破…………… 一六五

— 雑獲の銃獲から —

— 雉の無双網獲から —

鳩を決定しておく雑獲 — 日の暮れ切らない中に鳩へ歸る — 半圓陣の中央を突破する習性 — 啄食の場所も或る程度決る — 眼を縫ふのは撞木の上に静止させるため

鳥に對する雀の依存性…………… 一七九

— 雀の無双網獲から —

雀と人間は同じ棟の下に生活 — 鷗の尻尾と雀の関係 — 鳩の雀は満月前は東へ後は西へ飛ぶ — 鳥のゐる所は絶対安全と心得る — 両手を擴げて網場へ追ひ込む — 雀はまた雉鳩も信頼する

鳩に入る入内雀は三十粒の米を食つてゐる…………… 一九二

— 入内雀の霞網獲から —

入内雀は根つからの害鳥 — 渡來がいかにも科學的である — 稻の乳汁で口端を眞白にしてゐる — 鳩に入った入内雀は三十粒の米を食つてゐる — 就眠前の大騷擾は何のためか — 自分の寝場所を探すための移動か

突出物に密集する眞鷄……………101

——眞鷄の高築壘から——

鳥の止まる位置——高築壘と獲物——獵を行ふ木まで決定する——移動の通路を選ぶ——
獵の仕組み——獵場から見た景觀——囧の活躍——先を争つて鷄につく——午前十時で打
切り——特に突出した個所に止る——何故に松の樹に止まらないか

古から通じてゐる渡り鳥の徑路……………111

——鷄の霞網獵から——

一期の捕獲數——分散の徑路——未決定な渡りの學說——渡りの時期——霞網獵の方法——
霞網獵と囧——形式が生んだ流儀——囧の養成——朝構へと夕構へ——渡りは越冬が目
的

鷄は杜松の實よりミミズがお好き……………117

——釣鷄獵から——

鳥も釣で釣れる——釣れる鳥の種類——杜松の實を慕つて鹿島地方へ集る——最盛期一日
に仲買人の扱ふ數量——ツグミの移動は寧ろ想像以上——鹿島へ姿を現はす時期——釣
方——味覺をそそる杜松の實——仕掛の場所——杜松の實よりミミズがお好き

ひとの喧嘩まで買つて出る花鷄……………117

——アトリの噛み合せ獵から——

徒黨を組んで生活するアトリ——渡鳥の公道——小形渡鳥はどこからくるか——小形渡鳥
の徑路に新考察——嘴と嘴の激闘——打合ふ嘴の音に寄る理由

空腹の隼の圖太……………127

——宮内省保存草の獵場から——

鷹の産地は量的なもの——鹿島海岸は渡の徑路にあたる——寢室と食堂を備へた鹿島獵場
——民間の鷹匠の手に負へない隼——早朝の空腹時を狙つて行はれる——食ひ下つた獲物
はなかなか放さない——強力なムナグロの視力で隼の飛翔を豫知——飼育された隼は獵慾
を喪失する

勢子の一聲で跳び起き最急坂を攀ち登る熊……………133

——熊の卷狩から——

熊の卷狩發見——撮影の連絡成る——獵師部落鹽の淵へ向ふ——鹽の淵部落——笠堀と卷
狩の歴史——前祝ひ——出發——山の神に祈願——熊の好物コブシの花——熊を捕るには
熊になれ——再び熊の好物を見る——望遠鏡で探索——千見谷へ向ふ——熊の爪跡——熊
の活動は日中——熊の足跡——附場の中の附場千見谷——銃器の手入れ——部署に就く——
十五分間の勝負——穴熊獵へ移る——徹夜の陣を布く——仔熊遁走——仔熊の智力——
後祝ひ——熊の食物——行動は敏捷鋭敏な聽覺と嗅覺——鈍感な視覺——巻くといふ意味

太い圖體に繊細な感情……………三二

—熊の啄み撃から—

冬籠り—啄撃獵

熊 狩 後 記……………三三

人聲と笛聲とを聞き分ける兎の耳……………三四

—ガンガラ兎獵から—

長い耳は集聲器—須走村とガンガラ兎獵—十人位が一組になる—射手は樹上で待機

—勢子は地上を—樹上の射手には無關心—不安な氣配で横へ外れる—鷹の襲撃を

も防衛—行動は單獨

兎には一木一草がこれ防峇……………三五

—宮内省保存兎の鷹狩から—

野兎の減少の影響—野兎獵に使ふ鷹—蒼鷹と熊鷹の性能の差異—鷹狩の行へる地理

的條件—蒼鷹による兎狩—開潤な場所へは出たがらない—追ひつめられた兎のとり

態度—樹梢は身を護る唯一の防峇—兎の視力も馬鹿にならない—鷹の視力は千里眼

目次 終

鳥獸の習性

天敵に寄る鴨の奇習

— 赤犬獵から —



赤犬で鴨を寄せる

イギリすでは今でも鴨場の獵に、犬を使つてゐるが、我國にはさういふ鴨場は一つもない。然し赤犬を使つて鴨を寄せ、そして鐵砲で撃つ獵は現在でも残つてゐる。

鴨の獵に赤犬を使ふと云へば、これはてつきり雉や山鳥のやうに犬に搜索させ、追ひ出したものを撃つものぐらゐにしか考へないであらう。然し現存してゐる赤犬獵は、鴨を追ひ出させるのではなくて、撃つものの反對にこれを身近に誘き寄せて撃つ仕組みのものである。同じ犬を使ふ獵でありながら、それとこれとは、その使ふ方法と目的とが全く異つてゐる。赤犬獵では初めから犬を囿として使つてゐるのであつて、これがこの獵の特長と云へるのである。

囿には二種ある

抑々我々が一口に囿と云つてゐるものはこれを二つに分けて考へて見る必要がある。その一は同じ種類のものを使ふ場合、つまり鴨を捕るのに鴨の囿を使ひ、雉を捕るのに雉を使ふといつた類であつて、もう一つの方は種類の異つたものを使ふ場合と、天敵を利用する場合で、赤犬を使ふ方は異種類の囿であつて、ツクビキ獵にフクロフヤミミックを使ふ場合などは正に天敵の關係を利用した囿といふ事が出来る。以上二つの場合どちらが効果的であるかと云へば、どちらにも一長一短はあるにしても概して同種の囿を使用する方に分のあることは確である。ところで鴨場の獵にアヒルを使つたり、雀を捕るのに鳥を使つたりするのは、これは同種とは云へないが、それでも同じ鳥仲間である點に變りはない。同種類乃至は同じ仲間を囿とする際は「仲間があるんだから安全なものだ」といふ依存した安全感を興へるのが主眼であつて、これは恰も人間が人間を囿として、他國の機密を探るのと同じ意味合のもので、人間同志といふところに氣の弛みが生じ、ついでにやられるのと同じやうなものである。しかもその囿が異性である場合、この囿に引つかかる手合は少くはない。

色仕掛けの囿もある

四の中には色仕掛けを利用したものがある。由来色と云ふ奴は、生物界の魔物であつて、一度この魔物にぶつかると、人間でも鳥でも獣でもころりとまいる場合が多い。秋の霞山獵や、春の四雉獵などは、人工的に發情させられた四を使ふことによつて、同種の鳥の弱點につけこみ効果を上げる獵であるのは云ふまでもない。同じ四でも、この色仕掛け利用のものは、この點頗る積極性に富むものと云へる。これに比べると依存性安全感を與へる四の方は、ずつと消極的色彩を帯びてゐると云へよう。

天敵利用の四もある

これ等の四とは別に、全然異つた種類例へば犬や狐や貂を、鴨を捕るのに使つたり、或は同種族ではあつても、天敵の間柄にあるフクロフヤコノハヅクを、四十雀や日雀を捕るのに使ふのは、これは前の場合とは逆をいつたもので、どちらかと云へば「こはもて」乃至は「恐いもの見たさ」の獵奇を利用したもので、赤犬獵やヅクビキ獵がその部類に入る。

さて四には、以上のやうに二つの異つた性質のものあることが判つた。それではこれから四としての赤犬が、どんな方法によつて鴨を誘き寄せるか、それを見ることにしよう。

信濃國の北はづれにある野尻湖へは、冬の初めと春の中頃に、餘り大群ではないが鴨の群が訪れる。この鴨たちを捕るために赤犬獵が傳はつてゐる。この獵法は、日本でも餘り類例がなく、さう云ふ意味からすれば正に天然記念物的性質を持つてゐるものと云へる。文獻の傳へる所によると、抑々この獵發祥の因となつたのは、野性の狐であるとしてある。昔ある鷹匠が、淀川口ではからずも一匹の野狐に向つて殺到する鴨の大群を目撃して、その行動に不審を抱き、再三同じ光景を見るに及んで遂に野狐に代へるに赤犬をもつてして同じ結果を得た。これが赤犬を四として用ひ鴨を誘き寄せる起因となり、それがひいては鷹で捕る獵法の濫觴をなしたと云はれてゐる。これが幾變遷して、今日の鴨場の獵といふ形式を生んだ。ところが野尻湖畔の赤犬獵の動機となつたのは野狐ではなくて、實に一匹の鼬であつたと云はれてゐる。それが赤犬の利用にまで進んだ経緯は文獻の傳へるところに一致してゐる。それに面白いのは野尻湖畔の赤犬獵は、全くこの地で發祥したと云はれてゐることである。何れ銃獵が我が國へ輸入されて以來の事であらうから、歴史的に見てはさう古い事とは思はれない。それよりもずつと昔創案されたこの赤犬利用の方法が、後世に至つて同じ獨創のもとに、しかも飛んでもない地方に發祥したと云ふ事は、偶然の一致といへ面白い現象と思ふ。

西洋にも存在

話は違ふが、明治年間我國へ渡來した一獨逸人が、箱根の蘆の湖畔で、矢張り赤犬を囮として鴨を寄せ、銃獲したことがあるといふことを聞かされた。これがいつ頃のことか、はつきりした年代は判らないが、一は野尻湖畔で、一は蘆の湖畔で、しかも前者は日本人によつて後者は獨逸人によつて行はれてゐたこの二つの同じ赤犬獵に、どんな因縁と關係があるのであらうか。若し何の縁も由りもないとすると、獨逸人の赤犬獵がどこから將來されたかと云ふ事になる。しかし前にも書いたやうにイギリスには、現在でも赤犬を使つて鴨を捕る方法があるところからして、これが西洋文明と共に輸入されたであらうことが想像される。しかるに既に我が國には同じ赤犬利用の獵法が獨自に發達してゐたのである。こゝに於いて判るやうに赤犬を利用する獵法は、洋の東西に亘つて共通の目的のために同じやうに發達してゐたのである。狩獵が人類に共通したものである事が判つて甚だ面白い。

さてこの獵の發祥の詮策はこの位にして、赤犬獵の獵法に移らう。

先づ船て目的地へ

獵の準備としては、先づ赤犬の腹を空かせることから始まる。午後に獵をやるとすると、朝飯と晝飯を食はせずにおく。

私がこの獵に出掛けたのは、昭和十一年四月十四日で、あす一日で獵期の終らうとする間際であつた。南から北へ、越冬地から蕃殖地へ！鴨達にとつてこの季節ほど多忙で楽しみ多い季節も少からう。冬の間、湖面を堅氷で閉ざされてゐた野尻湖も、春風の訪れと共に、いつか小波ゆらぐ生きた湖水となるが、この頃二十羽三十羽の鴨達が、主にカルガモであるが、蕃殖地へ渡る途中の羽休めにこの湖水を訪れる。

私達は晝飯を食べてから船で目的の湖岸に向つた。鐵砲を背負つた獵師が乗り込むと、空腹にされた赤犬も勢ひ込んで飛び込む。雪の赤倉から吹きおろす、冷い風に打たれながら、船は南側の入江を指して進む。一渡り湖面を見廻したが、私の眼の届く所には一羽の鴨の姿も見られない。これで一體鴨が捕れるのかと危惧の念がしきりに起る。この危惧の念を白波に碎いて、船はまつしぐらに入江に突き込んで行く。私が鴨の一群を發見するよりも、時ならぬ湖面

を傳はる發動機の音に、早くも警戒體制をとつた鴨達の、さつと飛び立つ方が早かつた。

晝寝の鴨を追ひ立てる

船は飛び立つた鴨には目もくれず、今が今まで春晝夢を食つてゐた鴨達の夢の渦巻の中へ突つ込んで行くと、間もなく傍らの湖岸に船をつけて全員が上陸する。鴨の姿はもう見えない。獵師連中は或るものは木を伐り、或るものは石を轉ばしなどして、やがて鳥舎を作り上げる。どうも少し變である。鴨がゐたと思つたら、その中へ船を突つ込んでこれを追ひ飛ばし、鴨がゐなくなるとそのあとへ鳥舎を築く。私の知つてゐる獵にはちよつとこんな獵はない。獵師の鳥舎が出来ると、雪を掘つて私にも鳥舎を作つて呉れて、これへ入れと云ふ。私は云ふ通りに入つた。私の入つたのを見ると、獵師連中も鳥舎の中へ入つた。主役の赤犬はと見ると、これも犬使ひの獵師の傍に出番を待つて寝轉んでゐる。今日の主役は俺だといかにも得意満面である。私の手にある寫眞機の前で、活動役者が撮影機の前でするやうなしなを作つてゐるが、私にはそんなものは要はない。湖面の様子はどうかと立ち上つたら、皆が鳥舎に身を隠せといふ。言ふなりに身を祕ませると鳥追ひ獵師が一人、船に乗り込み、エンジンの音も勇ましく今

來た沖の方へと疾走して行く。益々もつて不可解だ。何が何やら判らなくなつて來た。鴨達が風を避けて轉寝をしてゐた位の入江だけあつて、寒い風が吹いてくるではなし、私は雪の鳥舎の中で、春の陽をぬくぬく浴びて少し眠くなつた。たゞ雪の上におるしてゐるお尻だけが冷や冷やする。

鴨の群飛來

うつらうつらといひ氣持になつてゐる私の耳に、キユキユと風を切る音が聴えてきた。來たなと思つて眼をあけて見ると、一群の鴨が飛沫を飛ばしてパシヤツと降りたつ所だつた。首をきつと立ててゐるのはあたりを警戒してゐるのだが「異狀なし」と見ると、一群寄り添つて入江の奥深く泳いで行く。陽光が燦々と降つて雪片のくづれて行く音が微かに聞える。金波銀波の囁きを二筋に掻き分け、颯々として泳ぐ鴨の群！

視線を九十度左に轉廻する。その視線の中を一隻の船がこれ又音もなく近づて來る。今はエンジンも止めて手漕ぎだ。鴨の首が立つ。「危しき船」一群の鴨が進路を入江の奥へ奥へと取る。數十條の小波の線が鴨群の後にもつれる。

赤犬の演技開始

鳥舎の前方百米！ 時こそ到れと大使の手が一片のビスケットを鳥舎の右手へ投げる。犬がさつと跳り出す。投げられたビスケットをパクリと拾ふと、犬は再び元の鳥舎の中へ跳り込む。今度は左方だ。空腹の犬がまたこれを追ふ。拾ふとまた鳥舎の中へ！ 今度は右、次は左、これを交互に繰り返す。鳥舎からびよんと出てびよんと引き込む犬の姿を發見した鴨達は、この鳥舎が銃口を向けた命取りの鳥舎とも知らず、赤犬目掛けてぐつぐつと押し寄せる。それはまるで憑かれたもののやうである。この猛進する鴨の状態を認めると、鳥追ひ船はもう漕ぐのも止めて傍觀の態度をとる。

停止した瞬間が射撃の機會

赤犬を見て氣の狂つた鴨達が、一途に寄せて来て、既に射程距離内に入つたと見るや、大使は今度は一握りのビスケットをパラパラと投げ與へる。今までは一片宛だつたので拾ふのもパクリと一口であつた。然し今度はさう簡單には行かない。犬は立停つてパクリパクリとやつて

ゐる。かういふ事情とは知らない寄手の鴨群は、犬の姿が鳥舎の外に止つたのを見ると、「やつ氣をつけるー」とピタリその場で進行を止め、次に犬がどういふ行動に出るかを凝視する。この時が射撃のチャンスである。全部の獵師が一齊に鳥舎から身を乗り出すとバンバンと矢弾を送る。

これでこの場の獵は終り、運命に見放された鴨だけが、哀れ骸を水面に横たへることになる。この時主役の赤犬は一向この事態に無關心で、残りのビスケットを拾ふに多忙を極める。山口縣下の蟲明灣では、鳥舎の近くへ剝製の鴨を浮べておいて、これに近寄る鴨を撃つてゐる。初めのうちは撃てるが、段々賢くなつてくると撃てなくなる。東京灣の沖撃は船に乗つて近づき、これを撃ち、赤麻沼や利根川あたりでは罟を繋いでおいて、これに近寄る鴨を船の中から撃つてゐる。これ等の獵には、そのどこにも積極的に鴨を誘き寄せせる手段が見受けられない。ところがこの赤犬だけは、鴨の好奇心を利用して、強引に誘き寄せてゐる。これがこの獵の眞の持味と云へば云へる。

何故に赤犬へ寄るか

私達はこの獵で、鴨は何故に赤犬を見ると寄るか、と云ふことに不審を持つ。これは一種の謎である。この謎に對して學者は「それは好奇心からである」と説明してゐる。人間にも好奇心と云ふ奴があり、こはいもの見たさと云ふ變な心理状態があるところから見て、鴨の赤犬に對する場合も、そんなものかも知れないと思ふ。然しこれにはもつともつと深い科學的な理由のあることは間違ひない。我々はこの兩者の關係に就いてもつと納得の行く説明がほしいものである。

鴨と犬、鴨と狐、鴨と鼬、これ等の關係は何れも共に天敵の間柄にあることは、捕はれたが最後食はれて了ふ點からも判る。實に鴨にとつて、これ等の獸類は俱に天を戴くことの出來ない存在でありながら、それでゐて一度かう云ふ獸類の姿を發見すると氣狂のやうになつて寄せる習性は、これは一體何とした事であらう。鴨の持つてゐる習性の中で、これは白眉であり、最も變り映えのしたものと云へる。然しこれは一方が陸上で、他方が水上の場合にのみ見られる現象であつて、これを若し陸上乃至水上において、この兩者を相見えしめたとすれば、果してそこにどんな結果が生ずるだらうか。これは實驗して出來ない問題ではないが、未だ誰も實驗した事を聞かない。やつて見てもこれは恐らく勝負にならないかも知れない。

水中に轉落した朝鮮牛にも寄る

鴨がかうした現象を起す相手は犬や、狐や、鼬のやうな赤色系小獸類のみかと思つてゐたら、滿更さうでもない事實があつた。それは千葉縣下の夏目の鴨場で起つた事件であつたが、偶々池畔に繋がれてゐた一匹の朝鮮牛が、手綱に前足をとられて、もんどり打つて池の中へ轉落した。さうしたら今まで無關心でゐた小鴨の群がワツと押し寄せて来て、水中にもがく朝鮮牛を見守つてゐたと云ふ。かうして見ると必ずしも小獸類に限つた譯でもなく、また捕つて食はれる天敵にばかり限つた譯でもないやうだ。然しそれは牛が水の中へ轉落して初めて起つた現象であるから「これは物見高い」方の習性の現はれと見るべきであらう。

燕が赤犬を襲撃する

話は鴨から外れるが、私は或る年静岡縣下の佐野川へ山女魚釣に行つたがその折、漁師の連れてゐる赤色の日本犬を二羽の燕が、急降下で襲撃するのを目撃した。高空から身を飄へして降りてくるなり、シューツと犬の背を撫でるやうにしてまた上昇してゆく。二羽の燕がこれを

繰り返し繰り返しやる。さうするとその都度犬は首をスツと縮める。犬の先を漁師と友人が歩み、後を私がついて行く。それなのにこれをもともしないで襲撃する燕の氣の強さ、一體これはどうした事柄なのであらうか。山鳥や小壽鷄も赤犬に追はれると木に上り、高い所からこれを凝視する習性を持つてゐる。鴨と云ひ、燕と云ひ、山鳥と云ひ、小壽鷄と云ひ、何れも赤犬に對して特殊な關心を持つてゐる。私達はこれを單に不思議な習性だと放つておいてよいであらうか。これにはもつともつと深い科學的な理由が存在するに違ひない。かう云ふ習性に對しても科學者はより鋭い科學のメスを加へ、自然界の祕事を私達の納得のゆくやうに説明してくれる必要がある。それこそ自然科學者の任務ではなからうか。

音響で操られる鴨

—— 鴨場の獵から ——

盤木の音に寄る鴨

盤木をコンコンと叩くと、野育ちの鴨がワーツと押し寄せる。近いものは泳いで、遠いものは、泳いでなどおられるかとばかり身軽に飛んで来る。これはかう云ふ風に教育を施した鴨の世界だけに見られる風景であつて、未教育の有象無象には通用しない。鶏だと、餌でも見せてトウトウトと呼ぶとアタフタと寄り集つて来るが、ちよつとした事にも吃驚してすぐに飛び立つ空のジブシーは、さう簡単に行くものではない。然し一定の教育を施せば或る程度人意に添はしめる事は出来る。

我國には鴨場の獵と云ふのがあつた。これは千坪から三千坪位の池を掘つて、この周りに堤を築き、これへ竹や笹を植ゑ廻らして、外部からは絶対に内部の様子が窺へないやうにしておく。かう云ふ池から外部へ向つて引掘と稱する溝を十本から十五六本も造つておき、この中へ

野生の鴨を欺して連れ込み、又手網と云つて、一間位の柄の着いた玉網のやうな網で掬ひ捕る仕掛けのものである。日本では随分古い歴史を持つてゐるもので、宮内省で保存してゐる濱離宮の庚申堂鴨場などは、いふうちでも古く徳川時代に作られたもので、山形縣鶴岡市にある酒井伯爵家の鴨場と共に歴史的價値の高い鴨場である。

宮内省にはこの外千葉縣下に新濱鴨場、埼玉縣下に埼玉鴨場の二鴨場がある。民間にもないわけではなく神奈川縣下に石關鴨場があり、山口貯水池には東京市の鴨場、兵庫縣下には山林會鴨場、そして羽田飛行場際には元黒田侯爵家鴨場がある。あるとは云つても實に數へる程で寥々たるものである。この黒田家鴨場も歴史から云へば古く、由緒も却々深いのであるが、數年前に身賣され今では僅かにその形骸を残すのみとなつてゐる。またこの鴨場のすぐ隣りに渡邊の鴨場と云ふのがあつたが、十四年の獵期を最後にこれまた廢止となり、今では埋め立てられて影も形もなくなつて了つた。かうして古い日本文化が一つ宛失はれてゆくのを見てみると、實に残念に思はれてならない。

鴨場は鴨の保護施設

かう云ふ鴨場へは毎年秋になると必ず多数の鴨が押しかけて来るものであつて、来た鴨達は翌春の蕃殖期が訪れるまで、ここを根城として生活をしてゐる。一口に云ふと、鴨場は越冬のために渡つて来る鴨達のために特に作られた貸家のやうなものであるから、家主たるものは當然借家料を取り立てべき権利がある。この取り立ての方法が即ち鴨場の獵といふ物納によるものである事は論を俟たない。そこで家主さんは毎週一回或は二回日を決めてこれが取り立てを行ふのであるが、何しる相手は言葉の通じない羽族達である。尋常一様な方法では一文の家賃も取り立てられるものではない。

囧は人間の廻しもの

ところで我々の先祖は囧と稱する一種の手先を使つて取り立てる方法を殘しておいて呉れた。古くは赤犬、近くはアヒルの囧がそれである。

現在の鴨場ではどの鴨場もアヒルの囧を使つてゐる。イギリスでは今でも同じ鴨場の獵に赤犬を使つてゐるさうであるが、同じ鳥の仲間である點からアヒルを使ふ方が効果的であるに違ひない。我が國の鴨場が何れもアヒルを使つてゐるのも、さう云ふ點からであらうと思はれる。

る。

アヒルは小さい鴨池で百羽、大きいものになると二百四五十羽も使ふ。囧には主に若鳥を選び成長したものは餘り使用しない。それは囧としての訓練を施すのに雛アヒルの方が覚えがよいからであつて、宮内省では雛に訓練を施し、一獵期穢いで貰ふと休職を命ずる。

囧學校の教育

さてそこで囧の訓練であるが、第一は音響による集合の訓練で、次は各引堀への引廻しの訓練である。この二つの訓練の終つたアヒルはもう立派な囧と云へるのである。アヒルの訓練には餌が付きもので餌を使はない訓練は考へられない。これはアヒルに限つた事ではなく、猛獣でも、蟲でも、鳥でも、魚でも凡て餌で仕込まねば馴らすことは出来ない。アヒルに集合を命ずる場合の方法としては、第一に鴨池の内部の様子を見るために設けてある大覗と稱する方一間の小屋の中で、盤木をコンコンと叩く。それと同時に大覗から池面に差し出してある餌樋からヒエ粒を撒き與へる、これを繰り返して行つてゐるうちには、盤木の音がしたら餌樋の下に集まれ！ さうすれば必ず餌が貰へる。かう云ふ觀念がいつの間にかアヒルの頭の中に沁み込

んで了ふ。かうなるともう鷹匠はいつでも必要に應じて池中のアヒルを一堂の下へ集める事が出来る。然しこれだけではまだ一人前の四とは云へない。そこで第二段の訓練である引廻の方法を教へ込まねばならぬ。これが最も大事な訓練である事は、この訓練をうまく施しておかないと、肝腎な時に鴨を引堀の中へ引き込む事が出来ないのでも判る。さうなると家賃にまで影響して来るからこの訓練には力を入れる。

それではその引廻の訓練はどうするかと云へば、先づ大観で盤木を叩き、集合を命じたならば、そこで僅かばかりのヒエを興へ、食べ切らぬうちに今度は第一番の引堀の巴鼻で餌を撒く。さうするとひもじいアヒルはまた餌にありつけるかと踵を返して引堀に近寄ってくる。近寄つて來たら鷹匠は餌を引堀の中へ撒きながら後退する。さうすると餌の後を追つて一番堀へ入ってくる。同じ事を二番堀で行ふ。アヒルはまたそこへ入る。次は三番、四番と同じ方法を行つて、最終の引堀に達したら、今度は逆にもとの一番堀へ引き返す。かう云ふ訓練を何回か行つてゐるうちにはいつかアヒルの方ですつかり要領を會得して、實獵の頃には、大観の盤木の音一つで百羽二百羽のアヒルは、大観の餌樋下から始つて一番、二番、三番と順繰りに引堀を訪れ、最後になると今度は逆に一番に歸へるやうになる。これで四としての訓練は完了し

て、もう押しも押されもしない一羽前の四となつたのである。

教育して人意に添はしめる

私達はここでアヒルのやうな能なしに見える鳥でも、教育すれば立派に人類の手先となつて、我々の意思に服させる事の出来る事實を知つた。それは犬や猫が我々の言語によつて行動するのと似たりよつたりである。犬や猫や鶏は、それ故に一躍家畜や家禽としての領域を飛躍し、一氣に人間の生活圏に突入してゐるものである。従つてかう云ふ種類のものが長い歴史を過程し、人間の言語に感能して行動すると云つても、それは敢へて不思議とするに當らないかも知れないが、アヒルのやうな鈍重な鳥が、人間の意思に添つて行動するといふ事は、些か奇妙な感がないでもない。然し又一面家禽として古い歴史をもつてゐるアヒルにして見れば或はその位の才能は持つてゐるのかも知れない。

四に依存する鴨

ところが根つからの野育ちで、禮儀も作法もちつとも心得てをらぬ小心翼翼たる鴨達まで

が、ある訓練を施せばアヒルと同じやうに人意に添はしめる事が出来る、と云つたら大抵の人はそんな馬鹿な事がと、頭から否定するだらう。さう云ふ人達は一度鴨場へ行つて大観を覗いて見るとさう。

三月十七日（昭和十六年）に私は濱離宮の庚申堂鴨場の見學を許された。その時大観から覗いてゐる私の眼の前で、盤木の音が鳴り渡ると、數百羽の小鴨はノロマのアヒルを追ひ抜け、駆け越しながら餌樋の下へ集つて來たし、數十羽の小鴨は、遠く離れた土止の上の憩の席から一氣に飛び込んで來た。

鴨は音響に對しては實に敏感である。いふうちにも鐵砲の音や、それに類した音は嫌ひだ。銃獵を禁止した區域を作つておくと網や罫で捕られる事はあつてもそれは一向気にしないで、喜んで集つて來るものであるが、これも鐵砲の音の嫌な何よりの證據である。發動機船の音も彼女等を警戒させる。東京灣の沖撃で屢々經驗する事であるが、エンジンの音をさせた船は却寄せつけない。斯様に鴨は何鴨によらず音に對しては甚だ敏感で警戒性が強いが、鴨場の盤木の音に對しては反對な現象を呈する。これは音そのものが丸く穩かで、どこにも陰險な音色が感じられないといふ點もあらうが、それよりも餌がその音に附隨してゐるといふ事の方が、

より重大な原因であらう。

何れにしても盤木の音で、ある一定の個所へ集合する事實は鴨が音響に對し理智的に感能すると云ふ實證にはなると思ふ。然しこれだけに感心してをつたのでは、鴨場の家賃は上らぬ。そこで、この感能性をもう一段と利用する事によつて初期の目的を達しけなければならぬ。つまり大観の餌樋下に集めるだけでなく、個々の引堀へ連れ込み、物納させなければならぬが、その連れ込みの手先となるのが訓練を経た囀のアヒルである。かう云ふといかにもアヒルの囀が、人間の功利的手段を解して、それに協力でもするかやうに思はれるか知れないが、アヒルにして見れば、ただ自己のパンを追求するために引堀へ入るだけの事である。ところが野生の鴨達は茲でも囀のあとに従いて行けば、パンにありつけるといふ事をいつのまにか感得してゐるから、特に手を取つて教育するまでもなく、引堀へ引き込む事が出来るのである。かう云ふ結果が得られるといふのも實は、囀と稱する第五列的存在を發見したためで、これは要するに人類の奸智の勝利と云へるだらう。

私達は先に鴨の音響への理智的感受性を知つた。そして今茲で囀アヒルへの依存性を知つた。鳥類には外にも依存性の強い鳥がある。鳥に對する雀の依存性は中でも白眉であつて、こ

の習性を利用して雀を捕る獵さへある位である。つまり雀は鳥のゐる所を絶対安全と心得る習性をもつてゐる。鴨が囹に對する氣持もこれに類するものであらうと思ふ。引堀のやうな狭くて無氣味な所へ、たとへ餌の誘惑があつたにしろ、囹が入らない限り人意に添つて野育ちの鴨がノコノコと入るやうな事はしない。所が囹は何の恐れる所なく堂々と入つて行くので、鴨もついその後にくつついて入る事になる。さう云ふ點から見ても、鴨が囹のアヒルに依存してゐる事が頷けるだらう。

鴨の嗅覺は鋭敏

私達は鴨場の獵から二つの貴重な鴨の習性を發見した。然しこの獵からはも一つの重要な習性を學ぶ事が出来る。それは鴨の嗅覺が頗る鋭敏であるといふ事であつて、鴨にはこれあるがため、鴨場の獵では風上に立つては絶體に獵を行ふ事が出来ない。そこで鴨場にはどこの鴨場へ行つてもきつと風見の設備が出来てゐて、常に風の方向に氣を遣つてゐる。鴨の獵に月と風は切つても切れない縁を持つてゐるが、云ふうちでも鴨場の獵と風の仲は縁が深い。これといふのも鴨の鼻が人一倍きくからであつて、若しあべこべに鴨の鼻が鈍感のものなら、鴨場と稱

する形式は、當然もつともつと簡單になるべきものである。ところが事實はそれと全く反對なために、東西南北の四方に各々引堀を用意しておいて、何れの風にも即應出来るやうにしてゐる。人間は一口に鴨は臭いと云つてゐるが、反對に鴨に云はせると人間は胡散臭いさうである。こんなに胡散臭い人間が風上に立てば、如何な鴨でも警戒しない譯にはゆくまい。況して引堀などと云ふ陥穿の中へみすみす入つて行けるものではあるまい。以上は鴨の嗅覺論者の説である。説としては大變面白いと思ふが、果してそれが嗅覺の鋭敏によつてゐるものか、或は聽覺の敏感によるものか私は疑問に思つてゐる。風上に立つて獵の出来ないと云ふ事だけでは一概に嗅覺論に賛成は出来兼ねる。然し聽覺論を實證づける爲には尙幾つかの實驗を必要とするだらうが、今のところそれを覆す確とした實證がないから、この説を茲では一應取り上げておく事にし、後日實證を得て聽覺論を紹介する事にしたいと思ふ。

釣鉤で釣れる鴨

— 釣鴨獵から —

啄む鳥は後を濁す

獵師の荒木根之太郎さんは、旭町といふ千葉縣下のちよつとした町の、すぐ裏續きの田圃道を、ぐるぐる廻つてゐる。水の張つてない田圃には眼もくれず、その代り水のある所だと、近くまで寄つて行つて、ちつと水底を調べてゐる。その後を黙つてついて廻つてゐるうちに、これが代見であることを知つた。

代見といふのは、ゆふべ鴨が食をあさつたかどうか、その痕跡を見出すことで、あさつた跡ならば、水底に一抹の濁りを偲ばせてゐるか、さもなければ足跡をまさまさと残してゐるものだ。足跡もなく、また濁りのない所でも、鴨の脱羽のある所は、これは羽繕をした跡で、かういふ所も代の中に加へられる。

餌には川エビとヤゴを使ふ

畦から畦を黙々と傳はり歩いてゐる獵師も、腹の中ではかういふ條件を備へてゐる代を探してゐるのである。かうして探し廻つて、ここぞといふ代を発見すると、用意の仕掛を仕掛けるのである。仕掛といふのは、長さ三間半の道繩に、地繩と稱するメンソ六號位の絲一尺二寸に、魚釣用銀掛新三寸の鉤をつけたものを約二十本、同じ間隔に結着したもので、これを一カクと呼んでゐる。餌としては川エビを用ひてゐるが、トンボの幼蟲のヤゴを使ふところもある。

人通りの激しい道端で、今朝がたまで食を啄んだ、といふいい代を見せて貰つた。水の深さは一尺もあらうか、その水底に浮雲のやうにふはふはした感じの濁りが、すつと一本引かれてゐる。左方から右方へ徐々に濁が濃くなつてゐるが、それは淡い方から濃い方へ進みながら啄食した名残りである。『この代なら先づ間違えねえですがね、人道の傍ぢや、ぐええが悪いからやめときませう!』餘程いい代と見え、ここに一カタ仕掛けられないのが如何にも無念さうであるが、獲物を横取される心配があるので、止めるといふのである。

鴨は夜間活躍

夜とはいへ、こんな道端で、餌を拾ふ鴨は大膽と云へばいへるが、結果から見ると獵師の陥穽から免れる絶好の安全地帯であることが判る。小鳥の中でも、ビンズイやコルリは、下手をすると踏み潰されるやうな道端へ、好んで巢を營むものであるが、これも人間の威をかつて、蛇や鳥のギヤングの害を免がれるためであるといはれてゐる。それならば鴨でも小鳥でも意識的にさういふ手段を取つてゐるのか、或は本能がさうさせるのか、その邊のことはちよつと付度を許されない。

話は違ふが、鴨が十月十五日の狩獵解禁日を實によく心得てゐるには驚く。前日の十四日まで何の屈託もなく、獵區の中へ姿を現はしてゐたものが、十五日の朝となると、さアどこへどう隠れて了つたものか姿を見せない。鴨はこの危険の境界線を感じする能力を確かに持つてゐるが、これは銃獵による長年の同族の犠牲といふ、高價な代償を支拂つて得た本能の進化と云へるかも知れない。

流れのある所にはよく現れる

さう云ふやうに鴨に逆手を使はれると、それが逆手であると知りながらも勢ひ獵師としてはこれ避け、獲物を横取りされる心配のない田圃に、代を探さなければならぬ。「ここへ一カタハクことにしませう！」人道からずつと中へ入つた、とある畦際の、幾つかの田圃の水が集つて、小さな流れを作つてゐるその流れの中へ、一カタ仕掛けようといふのである。見ればせせらぎで、水底に濁りこそ残されてゐないが、蹊のついた足跡が幾つか微に印されてゐる。

『流れのあるところは氷るのが遅いから、どうしても鴨が集まるですねえ』さう説明しながら、脇の下に挟んでゐる篠竹を一本抜きとると、その流れの一端にぶすりと突きさす。これへ仕掛けの一端を結び附けておいて、今度は左手で手籠を抱へ、右手で川エビの着いてゐる鈎を、一本一本種子を播くやうな手つきで仕掛けて行く。仕掛けた後のカタを見ると、一本の道繩が眞直ぐに伸びて、その道繩から一尺二寸の地繩が枝のやうに右と左に出てゐる。そしてその尖端では川エビが腰を丸くして無難作に水底に沈んでゐる。ここが済むとまた代見附けだ。かうして探しては仕掛け、仕掛けては探すこと二十回。二十カタを仕掛け終ると家へ引き上げる。こん

な簡単なことでもなかなか時間をくふ。晝頃から始めて、終るのはどうでも夕方になる。翌朝は早いから夜は早目に寢床へ潜り込む。さうして布団のぬくもりの中で数々の夢が、結ばれては潰え潰えては結ばれる中で、餌拾ひに出掛けた鴨が、川エビの御馳走に飛びつくのである。

羽で水を動かして凍結を防ぐ

朝は拂曉前に跳び起きて現場へ急行する。一月中旬の朝は冷たく凍てついてゐる。鼻から白い二條の熱氣を噴き出しながら畦道を渡つて行くと、盛れ上つた霜柱がさつくさつくと倒れる音がする。水田といふ水田は氷で張り詰められてゐて、夜が明けて陽が少し上つてくると、この氷の面がチカチカと眼を射る。あれ、『あすこに氷の薄いところがあるでせう。あれア鴨が氷をかきながら、餌を拾つた跡ですよ！』さう云はれて見ると、一面に張られた厚氷の一部分に、幅三尺、長さ四間に及ぶ薄氷の部分がある。一見してそれは鴨が飛び去つた後で張り詰めた氷であることがわかる。距離にすれば僅かであるが、この間を既に張つてゐる氷を嘴でかき、かいたあとは氷らせまいと、羽をバタバタさせて水を動かし、さうした困難な作業の中で身を倒にして啄食したそれは努力の痕跡であるが、かう云ふ歴然とした啄食のあとへは、餘り

望のない代の仕掛けを引き上げて来て仕掛けておき、夜のお客の再来を待つことにする。

川エビにはカルガモがかかる

次の仕掛けに向つて進んで行く途中で、早くもその仕掛けに一羽の鴨のかかつてゐるのを見附けた。張り詰めた氷の上に兩羽を擴げ氣味にして竦み、首をぐつと前に突き出してゐる姿が朝陽に映えて何となく痛々しい。急いで近附いて見たが、今はもう飛び騒ぐ氣力も缺いてゐる。道繩がピンと張つてゐて、少しでも暴れると痛むのかも知れない。それはカルガモの雄であつた。

ゴム長靴を穿いた獵師が、氷をバリンバリン踏み碎きながら近寄つて行つて、獲物を手に取り上げた時、カルガモの眼が露を一杯宿してゐた。獵師の渡す獲物を受取つて、私は頭から首の附根へ、静かに静かに探りの手を入れて見た。けれども手に觸れる鉤はどこにもない。それは既にして嚙囊の奥深く呑み込まれてゐるに違ひない。獵師は鴨の口許からぶつりと地繩を断ち切つた。そして感傷とともに背負袋の中へ納めるとまた次の仕掛けを訪ねるのであつた。

行動は雌雄連れ添つて

今度は一カタに二羽の鴨がかかつてゐる。見ると同じカルガモの雌雄である。鈎鴨では一カタに雌雄二羽のかかるのは、さう珍らしいことではないさうだ。このことは鴨が蕃殖期間外の冬であつても、夫婦の關係を持続してゐる何よりの證據である。我々は鳥や獸は、蕃殖期が來ると本能的に夫婦の關係を結び、或る期間が過ぎるとまた元の木阿彌に還元するだらしないもの位に考へてゐる。熊や狐や鹿などを始めとして獸類の多くは確かにこの傾向をもつてゐるが、燕のごときは歴然とした夫婦關係の持續者であることが立證されてゐる。鴨なども燕と同様に一度結んだ夫婦關係は一朝一夕にして捨てるものではないやうだ。これなども燕に於けると同様に標識でも附けて研究すれば、容易にその真相を確かめることが出来るだらう。

鴨が夫婦關係の持續者であることは鈎鴨でも實證されるが、それをもつともつと確證づけられるものは鴨の秋盛りの現象である。これは晩秋から初冬にかけての交尾期をいふのであるが、抑々この現象が既に夫婦關係の再確認である事は云ふまでもない。この季節の交尾は性殖を目的としたものでないことは確である。それは雄の睪丸の肥大しない事でも知れる。雌の卵巢の

無準備でも領れることだ。さうして見るとこれは前にもいふやうに夫婦關係の再確認といふより他はない。それならば配偶のない獨身者はどうかと云へば、この季節に矢張り配偶の獲得戰を演じ、その結果新しい夫婦が出来ることも少くない。秋にして既に確固たる夫婦關係を結ぶ鴨に、その場限りの夫婦があり得よう筈がない。

鴨の雌雄關係は蕃殖期に限るか

斯様にして夫婦關係にある鴨達が、秋盛りを過ぎた後と雖も、飛ぶにも遊ぶにも、はたまた啄むにも仲よく連れ添つてゐる姿は、屢々目撃するところだ。今仕掛にかかつてゐる雌雄の鴨を見ても、それが夫婦鴨であり、仲睦じく餌拾ひに出掛けて來たまではよかつたが、あへなくも共に人類の陷阱に嵌つて了つたのである。

かういふ關係はなにもカルガモに限られた譯ではない。それはマガモにも見られ、オナガガモ、ヨシガモ、コガモにも同じやうに見られるものだ。但し最も秋盛の顯著に現はれるものはマガモである。然し燕のやうに法律の保護を持たない鴨にあつては、狩獵の對象となる機會が多く、それがために夫婦共に乃至は一方が犠牲に供せられる場合が非常に多いから、完全な夫

婦關係を長く持續する機會に恵まれることは甚だ少いであらう。

釣鴨獵から拾ふ數々の習性

この朝の獵獲は都合三羽である。二十カタで三羽は少いやうであるが、抑々この獵は最初から大量を望むものではなくて、昔からお客でもあると、『どれ客人に鴨の御馳走でもしようか』位な軽い氣持で裏の田圃に仕掛ける、云はばさういつた客人接待用の獵であるから三羽捕れば不獵とは云へない。

さてこの釣鴨獵は、我々にどういふ習性を教へたであらうか。先づ第一に我々は鴨の啄食が主として夜間であることを知つた。第二には啄食は水のある水田に限られてゐること、第三には啄む鴨は跡を濁す事實を、第四に一度啄んだ代には連続的に現はれる、第五に氷の張る夜には流れで啄食する、第六に氷をかくと共に羽で水を動かし、氷を張らせない術を心得てゐる、第七に或る時季には人家或は人道の近くに出沒する、第八に夫婦揃つて行動する、第九に餌を嚙下する、第十には川エビの餌には主としてカルガモがかかること（トンボの幼蟲にはヒドリ鴨やヲナガガモがかかる）かう云ふ異なる幾種かの習性を釣鴨獵は我々に教へて呉れた。

人間を釣るカルガモの擬傷

— 鷹狩から —

天賦の雛の守護法

鴨の擬傷について理學博士黒田長禮侯爵は植物及動物誌所載の「雁と鴨」に次のやうに記述してゐる。——「カルガモ、マガモ等の水面に雛を伴へる雌は、人の乗れる舟が接近するや擬傷の風をなし、此處彼處を飛び得ざるが如き狀にて水面を叩き、人がその方に注意をなすひまに、雛は四方へ或は水面を滑走して逃れ、潜水し附近の叢中に入る。然る後雌は飛び去り又人舟なければ、歸り來りて雛を呼ぶ。然るときは四方より雛は再び親の周りに集まる。實に感すべき保護の方法なりと云ふべし——」

擬傷は云ふまでもなく親鳥が雛を守護する最も巧妙なる手段であつて、これは加害者の慾の皮の突つ張りを遺憾なく利用してゐるところに云ひ知れぬ妙味を持つてゐるものと云へる。加害者の慾の皮が突つ張つてをればをる程擬傷の効果は上る。要するに擬傷とは、羽も生え揃は

ぬ雛と、もうれつきとした一人前の親鴨を並べておいて、さアどつちを取るかと咄嗟の間に加害者の慾望の天秤にかけさせる技術であつて、小さいものより大きい方が得だと打算的に考へるところに擬傷の乗ずる餘地がある。

それでは斯様に優秀な種族守護法は、鴨と名のつく程のものは一樣に何鴨でも授かつてゐるかと思へばさうではない。黒田博士は前記誌上に山階侯爵のヨシガモとキンクロハジロの雌親が、如何にして愛雛をその加害者から護るかの觀察を採録してゐる。それによると——「ヨシガモの雌は叫聲を發するや、雛は蜘蛛の仔を散らす如く四方に散じ、非常なる速さにて五メートル位づつ水煙を立てて水面を滑走すること數回、最後に水中に潜入して目を晦ますと云はれ、これに反しキンクロハジロの雌は先頭に立ち雛の及ぶ程度の速さにて逃がれ、雛は一團となりて後を追ふ。故に此の種の雛は採集し易く、ヨシガモの雛は仲々困難なり——」

これでも判るやうにヨシガモやキンクロハジロの雌親の雛を守護する方法は既にして擬傷とは云へない。

擬傷を行ふ鳥類

鳥類の研究家下村兼史氏は、その著書「北の鳥南の鳥」のうち千鳥の項の中で、ヲナガガモの擬傷を観察して次の如く書いてゐる。——「七月中旬、沼の畔を歩く折、鼻先から一羽のヲナガガモが飛び立つた。後に気がかりらしい態度で少し飛んだ。今度は草中で盛に擬傷をやりだした。鶺鴒に比べると中々素晴らしい演技である。突然草を離れて水へ入り、水面をバタバタと両翼でたたいて「バタフライの泳法」といふ形である。雛はと、あたりに気を配つたときは既に遅かつた。私が假巢に見とれてゐる間に、草を潜り抜けて水に入るところであつた。一羽二羽……五羽六羽。一塊りになつて沼を横ぎり向う岸へ游いで行く。此雛たちは孵化後四五日位のものである。——」と、これで我々はヲナガガモも擬傷で、雛を害敵から護る事實を知つた。ところで擬傷はこれ等マガモ、カルガモ、ヲナガガモ達の獨占的手段かと思つると、イカルチドリもバタバタと如何にも苦しげにやるし、その演技は到底今述べた鴨やイカルチドリには及ばないが、ハマシギも行ふ事實を下村氏は述べてゐる。これで鴨以外の鳥にも亦この擬傷法を採用してゐるもののあることを知つた。

カルガモの擬傷

私はこれから鷹狩を通して見たカルガモの巧緻精巧な擬傷について書いて見よう。

昭和十四年六月、私は自作の文化映畫「鷹狩」民間篇を撮影するために、同僚の鷹匠二人とカノラの助手を帶同して、埼玉縣下の蓮田を訪れた。我々の狙ふ獲物はいふまでもなく、春になると南方から渡つて来る赤い水兵帽の粹な鶺鴒である。この日初夏の空はさらりと晴れ上つてゐた。コバルト色の美しい空の下で田圃は緑の波で揺れてゐた。犬の後に従いて我々は田圃道を右に往き左に渡りしてゐた。犬は嗅覺で、鷹は視覺で、絶え間なく獲物を探ねるが一向に姿が見えない。鷹匠の額から大きな玉の汗がポタリと落ちて、その後を爽かな風が吹いて渡つた。田圃を斷念して、とある池畔を歩いてゐる時、ヨシの波を分けて、さつと犬が飛び込んだ。丈なすヨシを二筋に分けて、鋭敏な犬の嗅覺が進むと、繊細な感じのヨシの葉がさらさらと揺れる。足を膝まで泥沼に没しながら犬のあとを追ふ鷹匠。突如！丈なす緑の波の中から黒塊が一つゆらゆらと舞ひ立つ。あつ鶺鴒だ。私の鼻の所でアイモがグウウと鳴つてフィルムを送り出す。阿吽の呼吸が合はなかつたか、鷹匠はついに鷹を放たない。獲物の姿を見てから犬の活動が目だつて勢ひづいて來た。鷹の眼玉も一際精彩を増した。

葦の原を通り抜けると田圃だ。鷹匠の身體が半分その田圃の縁へ現はれるか現はれない時、

稻を揺ぶつて二羽のカモが轉がり出した。それは雌雄のカルガモであつた。突然躍り出した人影に、向うも叱驚したが、こちらも平然ではゐられなかつた。犬がキョトンとした顔で鴨の行方を眺めてゐる。鵜だけを捕るやうに教育されてゐる鷹には、今飛び出した鴨は一向に興味がないらしく眼もくれないが、今鴨が飛び出したその跡に向ひ身を乗出しかかつてゐる。一變だねえ、鵜でもゐるのかな、ええ放して見ろ！」さう云ふなり鷹匠が鷹を放す。足革を風に靡かせて飛んで行く。鷹は矢のやうに稻の中へ突つ込んだ。キユツと聞える悲鳴——その時我々の頭上を旋回してゐた先刻の鴨がグワーと一聲鳴いたが、今の我々の關心がこの二羽の鴨にあらう筈がない。我々はどつと獲物を抑へ込んでゐる鷹に向つて駈け出した。この時「アツ！」といふ助手の叫聲を聞きつけて振り返りざま眺めると、今が今まで悠々と飛んでゐた二羽の鴨が、助手の前方僅かな所で急に腰を抜かして了つた。バタバタと羽で水を叩いて飛沫を上げフラフラヒヨロヒヨロと右に飛び左に跳ねてゐる。それを見て助手がいきなり躍りかかる。稲を倒し、泥を蹴上げて鴨へ突進する。「オヤ」この様子に見惚れてゐた私は僅かに口走つた。私のアイモがジーと廻轉を始める。もう一息だ。助手が正に飛びつかうとすると、またバタバタと水を叩いてフラフラと飛び立つ。また直ぐ眼の前に降りる。助手が駈け寄る。また飛び立

つ。斯くして鴨と助手の姿は段々と遠去かる。「變だな！」さう思つて見てゐる私の視線の中で、二羽の鴨はやがて何事もなかつたかのやうにガラリと態度を變へると、今度は呆然と見送る助手の姿を尻目に颯爽として再び私達の面前に飛來した。いつか鷹匠も、獲物を抑へ込んでゐる鷹を据ゑ上げるのも忘れて、どつとこの様子に見入つてゐたが、ハツと我に歸ると急いで鷹を据ゑ上げた。据ゑ上げて見たら、その獲物はカルガモの雛であつた。

操傷に鷹匠まで釣らる

この時我々の面前で再び親鴨の腰抜けが始つた。バタバタやつては飛び上り、飛び上つたと見るとまた降りる。それはまるで氣でも狂つたやうだ。今度は危く私が飛びださうとした。然しその時私は向から泥まみれになつて戻つて来る助手の姿をチラツと見た。私は危く思ひ止つた。その手に再び乗るものがないと見た鴨の演技は、それから次第に白熱化する。一羽は頭上で、一羽は田圃の中で……。我々は孵化して間もないカルガモの雛を、鷹の手から取り上げると、また鵜の搜索にかかつた。

これを見た親鴨は、残る雛達を犬や鷹を持つてゐる我々害敵から更に避難せしめようと狂ほ

しいばかりの狂態を演じる。その熱演に遂に一人の鷹匠が引つかかつて了つた。氣の進まない鷹を拳に据ゑたまま、腰拔鴨の後を追つて、その姿は段々速くなる。やがて鷹匠の姿が遙か彼方の田圃の中に小さく見える頃、鴨は再び私達の面前に現はれた。そして前と同じ手で私達を誘惑しようとする。がもうその手に乗る我々ではなかつた。二人までがいいやうに翻弄されて、その手並がもうすつかり判つて了つた今となつては親鴨の狂態も用をなさない。

擬傷と慾の皮

この腰拔の狂態を稱して擬傷といふのである。擬傷は親鴨からすれば「子供たちと私とどつちが得か判るでしょ。ホレ早く私をお捕りなさい。この通り私は飛べないんですよ！」かういふ腹でやつてゐるに違ひない。かくの如き狙ひは、その相手が人間である場合効果は百パーセントである。何故かならば人間には生物を捕りたいといふ本能と、小さいものより大きいものに手を出すといふ飽なき慾望が巢食つてゐるからである。かういふものをもつてをればこそ、鴨如きものに大の男が二人までも、いい按梅に引きずり引ん廻される珍現象を呈する。

因に茨城縣鹿島地方では、鴨の擬傷のことを「腰拔になつた」と云つてゐる。この地方では

カルガモの蕃殖するものが多いので、土地の老百姓の中で、この腰抜け鴨に翻弄されるものもなかなか多いさうである。「いい年をした老人までが……」と云つて、若い人が鴨の演技に舌を巻いてゐる。

棲息分野を確然とする鵠

— 宮内省保存鵠の鷹狩から —

似て非なる鵞と大鵞

鵞には大鵞と小鵞の二種がある。形體は大體似たり寄つたりであるが、大鵞の方が小鵞よりはずつと大きい。尤も大きくなければ大鵞と云ふ必要はない譯であるが、この二つの鳥はどう見ても親類か縁者のやうである。所がその實暮し向きの方を見ると、これは全くの赤の他人であることが判る。

小鵞は春になると、生めよ殖せよと、大擧して我が國へ渡つて來て本來の目的をすつかり果すと、また南方へおさらばをする御都合主義者であるが、かう云ふ性の鳥のことを夏鳥と呼んでゐる。これに對し大鵞の方は、秋になると寒さ凌ぎのために我が國へ渡つて來て冬中居候となり、春風が吹き始める頃になると、また生れ故郷の北國へ種族蕃殖のために歸る鳥である。こつちの方の鳥を冬鳥と稱してゐる。さう云つたことの違ひばかりでなく、この二つの鳥は渡

つて來てからの棲み場所が全く異つてゐる。小鵞の方は各地の水田や蓮田の中或は河川、湖沼、池畔の葦原、叢の中を借家とするに對して、大鵞の方は、霞ヶ浦とか、神の池と云つた舞臺の大きい湖沼に、鴨などと共に居を構へてゐる。それからもつと大きな違ひは、食つた時の肉の味である。小鵞は脂が乗つてゐるとろりと美味いが、大鵞の方は脂つ氣がてんでなく味がさつで全然問題にならぬ。結局この二つの鳥は根つからの他人である。

小鵞の渡來地としては東京近傍では埼玉千葉兩縣下の宮内省御獵場内、それから小松川邊りが多い。地方では東北地方と富山縣下が多いと聞いてゐるが、實際に見てゐないので、どの程度に多いか判らない。

鵞は稻作を荒らす

この鳥の渡つて來るのは四月頃からであるが、自分の生れ育つた土地にすつかり落ちつき、巢を作り卵を生み始めるやうになるのは五月へ入つてからである。私は新濱御獵場内では葦原の中へ作つてあるこの鳥の巢を見た。その時この巢の中にはたしか十二個の卵が生んであつた。巢は葦の根元に、葦の莖を寄せ集めて巢臺とし、これに枯葉を敷いて産座としてゐたが、

小松川では田圃の中に、稲を巢臺、産座とした、鶺鴒の巢を見たことがある。葦の方の被害はとるに足りないけれど、稲の方になると、これは全く馬鹿に出来ない。農夫がこの鳥を憎み、巢でも見つけようものなら、滅茶々に壊して了ふその眞情も實は、稲を荒らされる腹いせからである。稲にとつては確かに小鶺鴒は害鳥である。

鶺鴒を捕る獵には鷹狩、銃獵、釣獵など幾つかの獵法がある。その中で銃獵と釣鶺鴒とは四月十五日以前と十月十五日以降の狩獵期間内に限られてゐる。狩獵期間内と云ふと、長く聽えるが、この鳥は前にも云ふやうに、夏鳥である關係上、渡つて來た當座と、歸る前のほんの僅かな狩獵期間に引つかかるだけであるから獵鳥としての價値は十分に持ちながら、それでゐて食糧問題からは全く除外されてゐる形になつてゐる。これは惜しいことであるが止むを得ない。そこへ行くと鷹狩は、やる意思さへ持てばこの鳥のあるうちはどこでも獵が出来る。尤も昨年から大審院の新判例が物を云つて、狩獵期間外は「如何なる手段をもつても鳥獸を捕獲するを得ず」の鐵環を箴められて了つたため、從來は合法的であつた民間の鷹狩も、一切封じ込められて了つて手も足も出ない形になつて了つた。近年やつと民間人の中にも、鷹狩の研究家が出來た矢先、これは確かに大痛事であるが、法の權威の前には如何とも致し方ない。然し有

害鳥驅除の許可を得てやる道が、まだ細々と残つてゐるから、全然望を斷つにも及ぶまい。かう云ふ時に宮内省主獵課の存在は益々意義深くなつて來る。民族の血を織り込んだ日本の鷹狩が、主獵課によつて將來とも健全に保存されると云ふことは、嬉しいことに違ひない。と云ふよりはこれは一つには國家の義務と云ふべきであらう。

鶺鴒には蒼鷹を使う

鶺鴒に使ふ鷹は蒼鷹である。この鷹は熊鷹のやうに鈍重でもなく、さりとて隼のやうに俊敏でもない。見た眼は善し、氣立は優し、その上貫祿も十分あつて、確かに鷹の中の鷹と云つて差支へない。鶺鴒には正に打つてつけたやうな鷹である。同じ宮内省に碌を食む鷹であつてもさう云ふやうな事情で、隼や熊鷹とは比べものにならない位重寶がられてゐる。先づ一通りの訓練が終ると鶺鴒に引つ張り出されて搦ひ洩れの鴨の捕り押へ役を仰せつかり、それが終ると山の中の兎獵がある。これを無事に勤め上げるとその次が鶺鴒となる。上げ鷹獵が終ると直ぐにお暇の出る隼とは、比較にならない多忙さを持つてゐる。

鶺鴒は大抵五月の十二三日の頃から始まる。いつも埼玉御獵場よりは新濱御獵場の方が一足

も二足も早い。兩御獵場は距離的にはいくらも隔つてはゐないけれど、海岸に近い新濱御獵場の方が遙かに渡りが早く居附がよい。さう云ふ點からして新濱御獵場の方が早くなる。

この獵には毎年六据から八据位の鷹が出場するが、これだけでも壯觀な所へもつて来て十人餘りもの勢子加はるから一層壯觀さを増す。場所は御獵場内でも主として海岸寄りの葦原がそれに當てられる。五月中旬ではまだ葦は精々腰切り位しか伸びてゐない。この葦原の中を、鷹匠と勢子が入り交つて一列横隊を作り、端から端まで狩り立てる。

飛んで逃げるより歩いて逃げるが得意

鶺鴒は秧鶏と同じやうに涉禽類であるから、同じやうに羽が短くて、同じやうに脚が長い。首が長くて尻尾の短いので似てゐる。この鳥達の身體の重心は、どちらかと云へばお尻の所へ集中してゐる。かう云ふからだづきの鳥に向つて早く飛べ、と云つてもこれは無理な相談である。飛び方ののろまな事は誰よりも、此の鳥達の方が心得てゐるから、ちよつとやそつと追ひ立てられたのでは、いつかな飛び立つやうなことはしない。さう云ふ性の鳥であるから、勢子が竹竿で葦原を手當り次第に叩いたり、ホーホーと蠻聲を張り上げた位では、なかなかもつて

飛び立たない。歩けるだけは歩いて逃げを張り、どうにもいけなくなると始めてよたよたと飛び出す。小さな羽で勇しく大氣を搏つて、見た眼には甚だ景氣がよいが、どうにもスピードが出ない。氣だけ疾つて身體が追ひ附かないと云つたこの鳥の飛び方は、お世辭にも颯爽なんどとは云へたぎりではない。鶺鴒が出るとその近くの鷹匠が、鷹を羽合せることになつてゐるが、こんな調子だから鷹にかかつては一耐りもない。相手が鶺鴒である限り殆ど百發百中であるのも一に體形が飛ぶことに不利に出來てゐるからである。

一枚の葦原を一列になつて狩り立てて行つて、一番多く飛び出すのは、その葦原が正に盡きんとする部分だ。ここまではその自信ある足にまかせて、ここそと潜行してゐたのに、最早その餘地がないと見て一齊に飛び出す。鶺鴒の眼鷹の眼の鷹が、眼移りするのがこの場で、あとはどうやらぼつりぼつりだ。鷹の飛ぶのを見るとフワリとしてゐて、そんなに早いやうにも見えなない。それでゐて結構先に飛び出した鶺鴒に追ひついて引つ摺まへてしまふ。

鷹は水平な身を垂直にして摺む

鷹が獲物を摺まんとする瞬間にはどんな體勢をとるか。最も想像し易いことは、水平に飛ぶ

鵲を水平になつて追ひ迫る鷹が、その上部を追ひ越しま水平の位置で掴むであらうと云ふ事である。見たところでは掴む瞬間といふものはただ二つの黒塊がもつれ合つただけである。そのはつきりした状態は、獵に對して特別に鋭い眼力をもつてゐる鷹匠にも判つてゐない。それ程に瞬間的である。所が私は偶々五百分の一秒をもつてこの瞬間的狀態を、寫眞に撮影する事に成功した。これで見て初めて、その瞬間的姿勢が、はつきりとして來た。私達の想像してゐた水平の位置における捕捉と云ふことは、これで根つから覆されて了つた。寫眞の示す所にすると、あたふたと逃げを張る鵲に追ひ縋つた鷹は、今までとつてゐた水平な態勢を、咄嗟に立體的な態勢に變へ、同時に二本の脚を出来るだけ前方に突き出して、そして鵲の身體を引つ掴まへる。かう云ふ態勢で捕るといふことが明瞭になつた。この時の尾羽は恰度鳥體と直角をなすやうに後方に開かれてゐるが、これは鳥體の落下を防止する役目をしてゐるかに見られる。かうして獲物を掴へると鷹はすぐにまた元の態勢に戻るのであるが、この動作が抑々早くて全く眼にも止まらない。しかしながら、掴まれた瞬間鵲はキユツと悲鳴を上げるからハハア、掴まれたなと判るが、形の上からは前にも云ふやうに全然判らない。

宮内省の鷹狩は日が限られてゐる上に同じ場所を何度でも繰り返して行ふやうな事がないか

ら、突込んだ鵲の習性を知る上からは多少物足らなさを持つてゐる。そこへ行くと民間の鷹狩は、限られた場所で、殆ど毎日行はれるから否でも應でも、これはと思ふ習性に打突かることが多い。私が民間の鷹狩について行つて自分の眼で見、自分の心で感じた變つた習性だけを、ここでは書くことにする。

棲息の分野が確然としてゐる

私が最も強く感じたのは、棲息分野と云ふことである。これに關しては雉の項でも觸れておいたが、鵲の場合はそれ以上であることが判る。それには、ここぞと思ふ場所に犬を入れて捜索させて見るとよい。それは田圃でもよいし、葦原でもよい。或はまた池畔の雑草の中でもよい。ゐれば必ず二羽宛だ。これが或る距離を隔てて棲んでゐる。廣い範圍の中に三羽も五羽も雜然と棲んでゐるやうな事は少くとも蕃殖期中の鵲には見られない。鷹狩ではかう云ふ棲息場所を見つけては二羽乃至は一羽を捕つて廻る。面白いことには昨日捕つた場所を今日また行つて狩り立てて見る。また二羽ゐる。これを捕つて了つてまた二三日後いつて見るとまたゐる。小松川の少し先の所に端ノ江火葬場といふのがあるが、この近くに實に面白い場所があつた。

その場所と云ふのは西は堤を隔てて川と接し、東は開けて田圃に續いてゐる。さうして北には種犬を飼つてゐる家が接してゐて、南は迂回した川を挟んで部落の屋根が見えてゐる。そこは葦原で面積にして約一反歩ばかり、云つて見れば何のことはない犬屋さんの庭のやうな場所だ。ここへ私達は多い時には三日位たて續けに行つたし少い時でも三日おき位に行つて見た。昨日捕つたから今日はゐないだらうと思つて犬を入れて見る。すると二羽ゐた、これを捕つてまた翌日行つたらまた二羽ゐた。もう駄目だらうと一日おいて行くと今度は一番の秋鷄がゐた。これで見てもこの場所が、いかに鶺鴒や秋鷄の棲息地として絶好であるかが判ると同時に、この時期においても尙氣に入つた蕃殖地を探して廻る鳥の多いことが頷ける。従つてかう云ふ場所は鷹狩をやる人の穴のやうなものになつて了ふ。かう云ふやうに限定された範圍に於て毎日繰り返してゐる中には、鶺鴒が絶好とたのむ棲息場所が、すつかり鷹匠の頭の中に刻み込まれて了ふ。これを順繰りにやつて行けば毎日二十羽や三十羽の獲物にありつかない事はない。これが一人の鷹匠なら話は判るが、二人も三人もの鷹匠がとつかへ、引つかへやつて尙且つそれである。私は人家に圍繞されてゐる小松川方面が、何故にこのやうに蕃殖期の鶺鴒に親まれてゐるのか、その理由を發見するのに苦しむ。文化の進展は日一日と鳥達の棲息地を浸蝕して行

く。狹隘なる面積に、蕃殖といふ本能をかけて多數の鶺鴒が密集するとすれば、少し位の條件のよしあしは構つてゐられない。小松川地方へ押すな押すなで渡つてくる大きな原因は、要するに棲息地の貧困にあると云へる。

鷹に追はれて人家へ飛び込む

次に鷹に追はれる鶺鴒がよく人家へ飛び込むことである。これは小松川での例であつたが、私達は殆ど四方を人家に圍まれた葦原の中に犬を入れて見た。すると一羽の鶺鴒がふはふはと飛び出したので、發矢とばかり鷹を放つた。所が後を追ふ鷹に氣付いた鶺鴒は、葦原のすぐ東側に接してゐる人家の、しかも座敷の中へ一目散に逃げ込んだ。引續いて鷹も飛び込み、あつと眼を障つて驚く主婦の前で難なくこれを抑へ込んだ。恐縮した鷹匠が恐る恐るその家を訪ねると、『まア、これは縁起がいい！』と却つて喜ばれると云ふ仕儀に、鷹匠は面目を施して鷹を獲物ごと据ゑ上げた事があつた。私は同じ方面でまたお寺の庫裡の中へ飛び込んだ鶺鴒も見たし、農家の納屋の中へ飛び込んだのも見た。何故に人家へ飛び込むのであらうか。外に飛び込むべき場所がないのならこれは單なる避難所と見てもよからう。ところがさう云ふ場所を避けて、人

家を選ぶところを見ると、どうもそこには人家を人家と心得ての上のこのやうに思はれる。いくら何でも人家までは追つてきはしまい。さう云ふ意思が多分に含まれてゐるのは、鷹に追はれた雉の場合も亦白鷺の場合も同じことであるやうに思へる。つまりこれは要するに毒を以つて毒を制する類のものと思はれる。然しこの場合毒なる鷹は、人間を毒と思はぬから、鵺のこの計畫は無爲に終る。尤もこれが野生の鷹ならこの意圖は恐らく圖星であらうが、そこには鷹よりもつと恐い人間の慾望が手を擴げて待つてゐるから、どつちみち鵺は被壓迫民族であることが判る。

萬死に一生の鵺は二度と飛び立たない

次には危いところで鷹の難を免れた鵺が、二度と鷹の氣配のある所では飛び出さないことである。かう云ふ體驗を味つた鵺は是が非でも飛び出さうとしない強情さを持つてゐる。鵺が鷹の追跡を免れる最上の道は、鷹にスカを食はせて水中に飛び込むことである。表面では最も理想的であると思はれるこの人家への遁避が、既にしていけないとなれば、残された唯一の道は水中への飛び込みである。この唯一最後の手から免れた鵺が、以後は犬に追はれようが或は竹

竿で叩き廻されようが、頑として飛び立たないで、遂には水中に身體を沈め、嘴だけ出してちつと呼吸をしてゐるが、その氣持はたしかに判る。

こんな時には一服つけて待つてゐれば、いつかすぼつと浮いてくるが、騒ぐとまた沈む。沈んだあたりを注意深く探すと水の上へ出てゐる嘴が見附かる。それが手の届く所ならやつと手摺みにすればよいし、遠い所なら竹竿で狙つて一撃を喰らはせばよい。かう云ふ手摺みの鵺が一日に大抵二羽位ある。これで見ても鵺がいかに自己を完全に護り通す術を缺いてゐるかが判る。かう云ふ鳥であるから犠牲も相當あるものと見てよい。しからばこの犠牲は何によつて補はれるかと云へば、それは逞しい蕃殖力と云へるだらう。

蕃殖期の鵺はちよつとスマートだ。背中あたりはオリブを帯びた褐色で、一見しただけでは眞黒に見える。心持長い首を、グツと反り加減に立て、短い尻尾をピツピツと上下に揺りながら泳ぐとき、白い尾羽が一際目立つて見える。それに額の朱赤色の肉板は水兵帽のやうでしかにも可憐きはまりなう。

物凄い雄秧鶏の闘争精神

— 宮内省保存秧鶏の毘獵から —

人の心を弾ませる群秧鶏の鳴聲

ボンボン・ボンボンと鳴く筒鳥の聲を聴いてみると、ついつつと眠くなってくる。雉鳩のデデポツポウ・デデポツポウも何となく眼蓋を重くする。この二つの鳥ほどではないが、ヒクキナの鳴聲も心の緊張を緩めるに相當役立つ。鳴きの調子はボン・ボン・ボンの連続であつて、最初のボン・ボンは區切りが割合にはつきりしてゐる。それが段々とボンとボンの間がくつついてきて、終りの方になるとポツポツと撥音になる。このボンを多い時には四十音位、少い時でも三十音位をたて続けに鳴く。川を走る一鏡蒸氣船がこれに似た音を立てることがある。筒鳥も雉鳩も鳴き音を聴いてゐて一向に聴く者の血を沸かせるものをもつてゐない。否寧ろ反對に沸いてゐる血をも沈靜させる要素を多分にもつてゐる。同じやうな音色であつても、ヒクキナの聲は威勢がよい。向ふ鉢巻の江戸ツ子のあんちゃんみたいに齒切れのよいところを持

つてゐる。これは勿論聴く環境にもよるところであらう。筒鳥や雉鳩が主として山間部であるのにヒクキナの方は平地、いふうちにも水田が多いが、こんな違もあるかも知れない。

昔の文人雅客といつた人達は、一瓢を携へて態々このヒクキナの聲を聴きに行つたものらしい。今は日本野鳥の會など云つた團體が出来てゐて、時々鳥聲を探る會をやつてゐるが、この會にしてもまだヒクキナの聲を聞きにいつたことはないやうだ。どうもかう云ふ趣味的なことになる。昔の人の方が盛んだつたやうに思はれる。話は違ふが以前仙臺あたりからこの鳥の放送をしたことがあるやうに記憶してゐる。敲くヒクキナと云つて昔から有名だつた鳥であるから、これは放送する價値も十分にあるし、また場合によつては態々聴きに出掛けて行つてもよいものだ。

この鳥は六月から七月へかけて盛に鳴く。どこで聴いても特長があるからすぐに判る。尤もヒクキナが怒つて發するブル、といふ聲の調子は、カイツブリの鳴聲によく似てゐるから間違ひ易い。然し棲んでゐる場所が異つてゐるからこれでもヒクキナかカイツブリかは判る。聲の聴きたい人は宮内省の埼玉御獵場へ出掛けるとよい。御獵場内では鳥を捕ることは勿論いけないけれども、聲を聴いたり姿を見て楽しんだりするのは咎められる憂はない。

私がこのヒクキナを捕る獵を見せて頂いたのは七月の一日であつた。この日は朝から降りみ降らずみの鬱陶しい日であつたが、ヒクキナはよく鳴いた。どうもこの鳥の鳴ばかりは、からつと晴れ上つた暑い太陽の下で聴くよりは、どんよりとした空模様の下の方が気分が出る。この獵は一人の獵者と一人の助手とそして何組かの良と二種類の笛とあれば事は足りる。このくらゐ安直な獵もさう多くはない。私は獵者に従いて廻つてゐるうちに段々この鳥の棲息場所を知るやうになつた。或る時には農家の庭先で捕つたし、又ある時にはお墓のすぐ後の葦の中からも呼び出した。さうかと思ふと小流れの葦の中を縫つてくるヒクキナの姿をも見た。これで見ると同じ涉禽類でも鷗よりは多少陰氣な所を好む風が見受けられる。

雌雄の関係はいつ結ばれる

一體夏鳥の雌雄の関係と云ふものは、蕃殖地へ渡つて來てから後に配偶が決められるものか或は又蕃殖地へ渡つて來る前に、既に配偶が決つてゐるものか、恐らくこれは後者に屬すると見るのが至當であらう。燕などではその實驗は流石に済んでゐる。これによると配偶の片割れに異變のあつた場合に限つて、渡來後配偶の獲得戦が演じられるが、さうでない限り前年の夫

婦は同じ関係の下に渡つて來る。鷗の場合でも常に雌雄一組が連れ立つて行動してゐる。ヒクキナでも同じ結果が見られる。蕃殖期が過ぎると仲良く集合して行動を共にし、また蕃殖期が訪れると雌の奪合ひで血みどろの喧嘩をする雉などは全く譯が違ふ。それは冬鳥でも同じことが云へるだらう。

こんな譯であるから蕃殖地へ渡つて來ても配偶獲得のための闘争は先づ起り得ないと思はれるが、棲息分野の争奪は大いにあり得る。しかしこれとても大體は決つてをると思ふ。恐らく前年棲んだ所へは今年も同じ組が居着くことは想像出来る。また一旦自己の棲息分野と決定した領域へは、他の雄鳥の侵入を絶體に許さない事も判る。どの雄もどの雄も自分の妻と定まり自分の領域として獲得した權益を護るためには、敢えて一戦を交へることを苦にしない。この點は多妻主義者の雉の雄によく似てゐると云へやう。蕃殖期のヒクキナの雄も氣の荒いことゝ鼻つ柱の強いことでは雉の雄にも決して退けをとらない。さればこそかういふ獵法が永遠について廻る譯である。鷗にかうした獵のないのは雄同志にさうした敵意がないためであらう。兎に角ヒクキナの雄と來たら根つからの嫉きもち焼に出來てゐる。

ヒクキナは個體數から見れば、さう多い方ではないやうだ。鷗などのやうに近所隣がさうく

つつき合つてゐる譯でもなく、あつちにぼつり、こつちにぼつりといった工合に暮してゐる。然しある所では約二反歩ばかりの葦原の中に三組の夫婦が暮してゐるのを見たが、こんなことは極く稀な例に屬しよう。この獵も亦下見をしてあそこに何組、此所に何組と云ふやうに調べ上げておく。外の季節の外鳥とは違つて、この頃のこの鳥は、今日こゝにゐたとすれば、明日もそこにゐることは判りきつてゐる。それは巢と云ふのつびきならぬものを彼女等が營んでゐるためだ。これがある限り滅多なことでは引越しは出来ない譯だ。

雄の闘志は常に満々

下見の場所へ行つて見る。ヒクキナがうまく鳴いてゐれば、それで雄の居所が判るから、どこへ引つ張り出したらいかがわかるが、黙つてゐると見當のつけやうがない。その時には呼び出しを掛けて見る。俗にボン／＼と云つてゐる方の笛を吹くのである。ボン・ボン・ボン・ボン・ボン！と。するとこれが終るか終らないうちに應答がある。ボン・ボン・ボン・ボンと、打てば響くといふ奴である。雉の時には雄を鳴かせたが、この獵では丸い細い竹で作つた笛で用が足りる。笛の音を同族の鳴き音と聴くのは、その笛の吹き方が眞に迫つてゐるのか、聴く

方があわてゝゐるのかどつちかであらうが、これはどうも吹き方が妙を得てゐる結果のやうに思はれる。然し一面寄らば斬るぞと待構へてゐる鳥の方に緊張の過ぎてゐることも考へられなくはない。獵師の吹く笛の音を眼を塞いで聴いてゐるとどつちが鳥で、どつちが笛か聴き分け憎いが、落ちついて聴いたら鳥ほどに上手ではなからう。然し群雄割據の蕃殖期にあつてはボンと鳴けばそら敵と思ふほど平常を缺いてゐるから、少し上手な笛にあつては一耐りもない。笛の音に應じるヒクキナの第一聲にはさう云ふあわて方が多分に含まれてゐる。

應答は云はゞ喧嘩を買つた證據なのであるから、この雄たるものちつとしてゐる筈がない。闘入者の聲を目的に叢の中を掻き分け、押し分けて迫つて来る。これで雄の居所が突き止められた。そこで今度は獵者の方からも近づいて行き、頃合をはかつて、その進路へ横にすつと良を仕掛ける。場所によつては四五組、また場所によつては六七組を一直線になるやうに仕掛けておく。良には約十ヶの馬の尻毛で作つた引つ括がぶらさげてあつて、この引つ括に首を突つ込み、前進しやうとすると自分の力で自分の首を締めるやうになつてゐる。さてこの仕掛けが終ると、鳥の位置と良の位置で角度を計り、適度の距離まで後退して二の矢をかける。さうするとまたこれに應答しておいて、すつすと出て来るものと、問答無用とばかり黙つてやつて來

るのがある。應答する方の鳥にはまだどこかに氣分の裕りがあるのに反して、のつけに出てくるやうな奴は、すつかり怒りきつてゐるので、もう餘裕も何もあつたものではない。云はば猪突だ。これだから少し位の障害があつた所で、見境はない。前へ前へと進まうとする。はては良に首を突つ込んだのも知らずに猛進するから耐らない。いつか引つ括しは締つて自分の首をギユウと云ふ程締めつける。それでも進まうとするから呼吸が苦しくなる。苦しくなつて初めてこれは只事でないに氣付く。氣付いたら後へ退がればよささうなものを、尙も前へ前へと暴れ廻る。オリヅ色の羽を搏いて飛び上つて見る。勢をこめて突つ走る。さうかと思ふと兩足を突つ張れるだけ突張つて見る。眼を白黒させてもがくがどうにもならない。先刻の見幕が物凄かつただけに、この狼狽ぶりは些か笑止であり滑稽である。

緋秧鶏でも怒りつばいのは捕り易い

然しヒクキナの雄にはもつともつと短氣者がある。獵者がボンボン笛を吹くと、これに對してブル、と頭から脅かしつけてくる奴がある。これが野の鳥であつたらこれだけで震へ上つて了ふくらの物凄いな息だ。かう云ふ向つ氣の強い鳥に對しては、獵者の方でもちやんと對

策がついてゐる。それはどうするかと云へば、今度はこつちの方からブル、と脅しつけてやる。さアこれで奴さんカン／＼になつて怒りだす。首を心持ち下げ、身體全體を少し乗り出し氣味に、全くの戦闘態勢で出て来るから一も二もない。瞬く間に自分の首を自分で引つ括つて了ふ。人間でも鳥でも怒りつばい奴程馬鹿を見る。

この獵では氣の強い喧嘩つ早い鳥ほど捕り易い。人が喧嘩を賣つてもなか／＼取り合はないやうな鳥は捕るにしたところで手間がかゝる。さうかと思ふと獵者の吹く笛の音に、あつさり出て來ると見せかけ、愛妻をつれてどつかへ姿を秘ませて了ふのがある。こんなのがこの獵では苦手である。

さてかうして一日獵をして廻ると十五羽や二十羽の獲物は樂に捕れる。この獵では雄だけ捕るのでどうしても後家さんが出来る。假に一日に二十羽の雄を捕ると二十羽の後家さんが出来る勘定になる。雉の場合だと男やもめがうる／＼してゐるから割合に樂に後添が得られる。所がこのヒクキナの場合はどうであらうか。どうも雄があれだけ力み返つてゐる所を見ると、矢張り雌を狙ふやもめ共が存在してゐるのではないかと考へられる。さうでなければ、あんなにまで向つ腹を立て、喧嘩にでて來る必要はなからう。またよしんば二度目の旦那が得られな

いにしる、もうこの頃になれば巢も出来てゐやうし。卵も生んであらうから、下手な旦那なんか全く不必要であらう。やもめ共があるとすれば多少それ等に付きまとはれる煩はしさはあらうが、そんな者共には氣をくれないで、やがて解る愛の結晶に希望を繋ぎ、光明を求める方が賢い生き方だ。

水鳥でありながら山中に営巢

——オホミヅナギ鳥の掘捕り獵から——

禁鳥オホミヅナギドリを捕る獵

東京府下の御藏島には穴を掘つて鳥を捕る獵がある。獵と云ふには餘りに風變りであるが、毎年五萬羽もの鳥を捕るとなれば、これを狩獵と云ふも敢えて差支へはないと思ふ。この鳥はオホミヅナギドリといふ名前の鳥で漢字では大水風鳥と書く。この漢字からは荒れてゐる海をも凧にするといふやうな意味がとれるが、實はこの字は内田博士の附違ひで正しくは雍と書くところである。これはつまりこの鳥の飛ぶ時の軀付が、開けた翼の末端で水を雍ぐやうにするのでこの名が附いてゐる。カモメやウミネコと親類の間柄にある海鳥で、本來は捕獲を禁止せられてゐる鳥である。どう云ふ理由でさうなつてゐるかと思ふに、この鳥は魚群を發見して、漁師に知らせる特別な技能を持つてゐる。これが漁業上甚だ有益であると云ふのである。それは恰度カモメや、ウミネコやアビと云つた海鳥達が、同じ理由で禁鳥となつてゐると變りがない。

い。さう云ふ鳥でありながら御藏島ではこれを公然と捕つてゐる。それは又どう云ふ譯であらうか。

御藏島は駱駝の背中へ出来てゐる瘤のやうなもので、どこにも取つかゝりを持つてゐない。これでは大體船の着けやうがない。船の着かない島に魚港を望むことは無理である。かう云ふ譯で、御藏島は四面を海に取り圍まれてをりながら、漁業と云ふものを全く持つてゐない。

一方オホミヅナギドリは毎年二月になると南の方から渡つて来てこの島を占領する。その數たるや一體どの位か想像がつかない。島の中でこの鳥のゐないのは八百五十メートル餘の中央頂上附近だけで、あとは大抵どこへ行つてもゐない所がない。この鳥は何を目的に、こんなに大學してこの島へ渡つてくるのであらうか。それは早く云へば蕃殖の爲である。云はゞ御藏島はオホミヅナギドリに取つてはまたとない蕃殖地と云へるのである。

穴を掘つて樹木を枯らす有害鳥

漁業のない島に漁業上有益な鳥があつてもこれは無駄である。然し無駄であると云ふだけでは五萬羽もの鳥を捕つてよいと云ふ理由にはならない。島民達に取つてこのオホミヅナギドリは

無駄なばかりでなく有害な存在となつてゐる。それはこの鳥の巢を見れば成程と領ける。抑々この鳥は海鳥でありながら巢をば、地面に穴を掘つて作る。それもカモメやウミネコのやうに岩盤上に作るなら文句はないが、林の中を選ぶから島民のために餘り長くもない尻尾を掴まれることになる。『かう木の根を掘られたんぢや、木がたまりやしない』かう云ふ聲が農林當局をして毎年五萬羽の捕獲を許可させることになつた。

然しこれはどうも表面的な理由のやうだ。大體この鳥の人達がこの鳥を捕るやうになつたのは、まだ狩獵制度の確立されない徳川の昔からである。第一この鳥がゐなかつたならこの島には人が住まなかつたかも知れないし、流人も亦この鳥がゐなかつたら食料にどのくらゐ困つたか知れない。この鳥と島民達との間柄は、單に木を枯らすとか枯らさないとか云ふ生優しい問題があるだけではなく、生きるか死ぬかの重大問題があつたのではあるまいか。

御藏島は漁業をもつてゐないばかりでなく農業にも恵まれてゐない。この島には第一平地と云ふものがない。これだから魚も買つて食はねばならぬし、米、味噌、醤油も東京から取り寄せる。今のやうに船の便のある時代ならこれも出来るが、船便の悪かつた昔はどんなに難澁であつたか想像出来やう。かう云ふ土地柄であるから、手つ取り早く、資本いらすに、然もあり餘

る程捕れるこのオホミヅナギドリに手の出なかつた筈はない。斯く見て來ると、この鳥の捕獲の根據は深い。

穴を掘つて巢を營む

前にも云ふやうに、この鳥は二月中旬に渡つて來て、四月頃までには巢を作る。巢は深いものになると三四尺位のものがあつり、一二尺位の浅いものもある。眞直ぐなものがあるかと思ふと途中で曲つてゐるものもある。場所も木の根元があるかと思ふと、岩の下に作つてあるものもある。それが足の踏み場のない程に密集してゐる。島内で最も多いのは南岸の河口ヶ澤の約百五十町歩に亘る原生林の中である。その中でも平清水川を中心にした全山は、これらの鳥の巢窟となつてゐる。この鳥が卵を生むのは七月で、雛の孵へるのは八月である。抱卵は從來雌の受持のやうに思はれて來たが、巢中の鳥を解剖した結果、雄も雌と同じやうに抱卵することが判つた。

この鳥は眞暗なうちに巢を出て、眞暗にならないと歸つて來ない。日中は巢の中で當番の親鳥がちつと卵を温めてゐるが、それこそうんとすんとも聲を立てないから林の中はまるで火

の消えたやうに静まり返つてゐる。所が日が暮れやうものなら一日中海洋で遊び呆けてゐたもう一方の親鳥が歸つて来て、平清水川の上空は亂舞叫喚で耳も聳すばかりだ。歸つて来た鳥から順次自分の巢に入つて了へばこの大騒動は起らなくて済むのに、叫んだり喚いたりしてゐるからたまつたものではない。この状況を島民達は鳥地獄と云つてゐる。かう云ふ騒擾は八時九時までも続く。十時頃になると稍沈静し、それからはいつともなく空の叫聲は消えて了ふが今度は巢の中が賑やかになつてくる。一日中別れて暮らしてゐたその焦慮を、一度に爆發させて陸み合ふ。グワウワウ、グワウワウと嘯き合ふ聲は、十二時が過ぎてても続く。私達の寝てゐる小屋の床下にも巢があつて、一晚中この聲に悩まされた。

歸つて来たオホミヅナギドリは、自分の巢の上空を散々飛び廻り、喚き立てた揚句バサツと落ちてくる。他の鳥のするやうに器用に樹間を潜り抜けて巢へ歸るといふ事は出来ないから、上空と穴の中で呼びかはしておいて大體こゝぞと云ふ所へ一先づ落下し、そこから巢までよたよたと歩いて行く。かうして戻つて来た親鳥が交替して今度はもう一羽の親鳥が出掛けるのであるが、これがまた大仕事である。林の中からさつと飛び出せれば、まことに世話はないが、それが出来ない。そこが陸に上つたカツパの悲しさであらう。

樹幹を攀ち空中滑走して飛び出す

この鳥達は大騒ぎばかりしてゐるから折角の逢瀬がごく短い。抱卵事務の引繼もごくあつさりと済ますと、もう暗黒の中を海洋へ出發する用意だ。ガウワウと別離の言葉も簡単に巢を出た鳥達は、自分の登るやうに定められてゐる大木の方へガサゴソと近づいて行く。眼の力で歩くのか、感の働きで見えるのか兎にかく、目的の木に辿りつく。かうして木の根元についたと思ふと今度は鍵型の嘴と足の爪を樹皮にかけ、羽を小刻みに搏きながらよちよちと樹幹を攀ち上る。私達はこの状況を撮影しやうと午前二時に起きてある樹幹の下に行つた。試に懐中電燈で上方を照らして見ると、もう既に樹の枝に行儀よく並んでゐるオホミヅナギドリの姿が見える。電氣の光を浴びても別に驚く様子も見えない。寫眞機を据ゑつけて待つこと暫し、落葉を踏み鳴らしながら近づいてくる音がする。その音が段々と件の樹幹に近づく氣配が感じられる。頃合をはかつて電氣をパツとつけて見ると、恰度二三尺上り始めた所である。閃光器がパツパツと火を吐く。バサリと物の落ちた音がする。時ならぬ閃光に眼でも眩んだのであらう。どうするかと見てゐると、また元の根元に這ひ寄ると再び同じ恰好で登り始める。また閃光器

が火を吐く。今度はどうやら登りついた様子だ。電燈を照して見ると、如何にも安心した様な顔付で、前からある鳥の傍に並んで腰をかけてゐる。また暗くなる。また音が近づいて来る。時間が経つにつれて、その物音は多くなる。中には寫真機の足を蹴飛ばしながらあわてて通り過ぎるのがある。落ちては登り、登つては落ちるのが二羽や三羽ではない。すると一度で登る名選手は割合に少い。四時になるともう登る鳥はゐない。今はもうみんな目白押しに楽しんで時の至るを待つてゐるばかりだ。

一羽が飛び出すと後から後からと続く。あつちの木からもこつちの木からも、かう云ふ鳥達で一つの流れが出来る。この流れの事を鳥の人達は鳥流れと云つてゐる。

彼女達の飛び去つたあとはひつそりとして火の消えたやうだ。前夜の大騒ぎなどあと方もない。夜が明けて陽が出てきた。その快いぬくもりの中で、全山悉くが深い眠りに落ち込んで了ふ。抱卵してゐる親鳥の寝息がかすかに聴えるやうだ。氣の毒ではあるが私達はこの寝込みを襲撃することにした。

穴を掘つて巢を破く

私達の案内者はこの襲撃には實によく馴れてゐた。彼は穴と見るや片腕をぐつと突つ込む。浅い穴ならこれで十分届く。そしてアツと驚く鳥の首つ玉を掴んですると引つ張り出す。下手をするといやと云ふ程指に食ひつかれる。そこを食ひつかれないやうにして引つ張り出すのがコツである。

彼女を引つ張り出しておいて、一方ではその宮殿を掘り起して見る。こゝいらは岩石が累々としてゐる。鶴嘴で掘るだけでも容易なことではない。かういふ石ころ混りの地面を彼女は何で掘るのであらうか。見たところこれと云つた道具を身につけてゐる譯ではない。これはどうしても鍵型に曲つた嘴と、磨き込まれた足の爪とを考へるより外に道はない。さしづめ嘴は鶴嘴であり、蹠のついてゐる指はしゃべると云つたところである。この二つの道具を使つて掘るにしたところで、これだけの穴を掘るといふことは大した努力だ。

坑道は横にあいてゐて、その廣さは直徑にして五寸位もあらうか。段々掘り進んで、いよいよ宮殿の産室に達する。産室は穴の奥を、ちよつと擴張した程度で、産座には四、五枚の木の葉が申譯ばかりに敷いてある。これは又何と云ふ質素な産室兼育児室であらう。今私達の眼前に曝かれた産室には眞白な卵が一つポツンと置かれてゐる。このたゞ一つの愛の結晶のために

こんな大袈裟な工事をしなければならぬのであろうか。この鳥の世界には餘程勞力が餘つてゐると見える。毎晩のあの大騒動も、この一個の卵のためかと思ふと、少し馬鹿々々しくなる。尤もオホミヅナギドリに見れば、一粒種なればこそかくも後生大事にしてゐるのかも知れない。卵を手にとつて見る。鶏の卵よりはすつと大きい。

この鳥の宮殿にはさつぱり見るものがない。幾つ曝いたところで同じ事だ。それよりも今ここで後生大事に抱卵を續けてゐた親鳥が、雌か雄かの方が問題である。いや全然問題はない筈である。何故かと云へば、今まではそれは雌親の任務といふ事になつてゐたから。私達はその説を眼のあたり見極はめるために、今掘り出した鳥を犠牲にすることにした。これは云はば貴重な學術研究である。この際安價な同情心を寄せる必要はない。解剖してみたらそれは雄であつた。雌説は茲で美事に引つ繰り返されて、雄も抱卵の任務に就くと云ふことが實證された。この結果雌雄の交替抱卵といふ新説が樹立された譯である。

オホミヅナギドリの雛が孵へるのは八月初旬であつて、巢立をするのが十一月の中旬頃であるから、約三ヶ月間穴の中の生活が續くことになる。小鳥などの孵化から巢立するまでの約二週間に比較すると途方もない長期である。これが何のためか明かでないが、一日一回の給餌とは夜間に限られる。

何等かの關係があるやうにも思へる。御蔵島の島民達が獵をするのはこの巢立直前であつて、それは大概十一月の四五日前後である。島民の狙ふ方は親鳥ではなくて雛鳥である。これは雛鳥の方が親鳥よりも利用の範圍が廣いからだ。それに捕るのも雛鳥なら晝間でもよいが、親鳥は夜間に限られる。

巢立直前に脂肪消耗期がある

雛鳥は巢立直前に體內に充滿する脂肪を消耗する時期があるが、これはいよいよ一人前になつて海洋へ乗り出す準備である。何しろ軀が脂肪でグブグブしてゐたのでは飛ぶことも歩く事も出来ない。此の過剰脂肪を片付けるために脂肪消耗期と云ふのがある。この頃の雛鳥は吞まず食はずで三十日間生きてゐる。たゞ生きてゐるだけでなく自己の脂肪を消耗してどんどん成長する。さう云ふ不可思議な生命力をこの鳥の脂肪は持つてゐるが、これは大いに研究の要があらうと思ふ。かうして軀の脂肪がよい程に消耗されて、それこそ身も細く心も軽くなつたところで、のこのこと穴から出て來て、平清水川の流に隨ひ海へ下る。これが大洋へのスタートとなる。

脂肪消耗期に入ると島民達は總出で鳥掘りをする。その指揮には村長が自らこれに當る。腕のよい獵師になると午前中に三百羽四百羽と掘り出す。かうして捕獲された鳥は村へ運ばれてそれぞれ適當に處理される。羽は布團に、肉は鹽藏して冬期の食料に、また内臓は同じく鹽藏されて榮養不良から起る眼病薬にと云ふやうに何一つ捨てる所がない。この雛鳥一羽から三四合の脂が搾れるのを見ても、その蓄積する脂肪の量は想像がつかう。鹽藏された肉をお隣の三宅島へ持つて行つて薩摩芋と物々交換されたのはずつと昔のことであるが、今でもこの風習は残つてゐる。最近は罐詰にして東京へ出すことが計畫されてゐる。斯く見來れば御藏島の島民とオホミツナギドリの間縁は今日や昨日のことではない。

啄むにも眠るにも番鳥を立てる雁

——宮内省保存雁の無双網獵から

昔の人の自然を観る眼は科學的

昔のやうに鳥や獸が多いと、人と鳥獸の生活は壁一重の所で觸れ合つてゐる。さう云ふ時代には否でも應でも、鳥や獸が眼につく。殊に利害關係の多いものほど見る眼が多い譯だ。いくら昔の人達が吞氣で氣がよくつても自分の作つた農作物が荒されてゐるのを黙つてみてゐる程寛大ではなかつたらう。一度が二度、二度が三度と度重なるにつれて、段々憎しみを増し、これをとつちめたい氣持になるのは人情だ。とつちめるのに一番よい方法は捕ることであるが、大體人間には、生きてゐるものを捕りたいといふ本能もあり旁々捕つたものが食料に供せられるといふやうな事から捕ることが生れる。ところが捕ると云つて見ても相手は生きてゐて、しかも自由自在に飛び廻る鳥や獸であつて見れば、さう易々とはいかない。そこでどうしても、その鳥や獸の癖とか短所とかを見抜いて、それにつけこむやうにしなければならぬ。そこに

色々な工夫が起る。かうしてあゝでもなし、かうでもなしと工夫に工夫が加つて、いつか獵法が生れ、獵具が生れるといふ事になる。

鳥の癖は、これを現代の言葉に直して云へば習性であるが、この習性を見る眼を昔の人はよくもつてゐた。それは一つには鳥も多かつたし、また一つには時間的に餘裕があつたから自然とさういふ眼が肥えたのであらう。今の世の人達にはなかなか望めないことだ。さう云ふことが現在残つてゐる獵を見ると、どの獵（銃獵を除く）にも濃厚に窺へる。

雁なども昔は多かつた。明治中葉の頃はまだ上野の不忍池あたりへも相當に降りたといふことである。それが近年では宮城のお濠へどうかすると小さな群が姿を見せる程度、それも最近では全く後を絶つて了つたやうだ。それには色々な原因があらうが、最も大きな原因は、雁のやうな大型鳥類を容れる環境がなくなつて了つた事だ。世の中が開ければ開けるだけさういふ現象は起り得る。昔の人は雁など見るに不自由はなかつた。大體が大型である上に鳴聲や飛び方に特長があつたから人眼にもつき易かつたらうし、印象にも残つたに違ひない。文學や繪畫の上にも勢ひ取り上げられる機會も多かつたと思ふ。兵書の中にまで載つてゐる鳥は雁を除いてまた外にあらうか。都を中心にして尙且つさうであつたとすれば、農村あたりが、どんなに

この鳥と密接な生活をしてゐたか想像がつく。それが證據にはこの鳥に關した傳説など相當に多いし、習性を記述したものなど割合に多いのでも判る。捕ることなどに全く關係のなかつた人達までが、この鳥の習性には随分深い關心を持つてゐたことが窺はれる。

文人墨客の見た習性

雁と云へば月を背景に雁行する様を、まだ實際を見たことのない人までが思ひ浮べるが、これも、昔の文人墨客の影響によるところと云へやう。然しさういふ人達が觀察した習性には、獵人の見た習性ほどの犀利さが無い。それは一方は雁の生活の表面を見る機會が多く、反對に一方は内部にまで突つ込まないと獵が出来ないから、勢ひ同じ觀察の上にもさう云ふ違ひが生じる譯である。前者の見た習性の上に往々修飾的なもののあるのもさういふ點からだと思ふ。

新潟縣の人で鈴木牧之翁なるものが、徳川年間に書いたものゝ中に雁についての記述があるが、これはどうも翁自身の觀察と體驗を書いたものでなく、土地の獵人から聞き書きしたと思はれる節が多い。それだけになかなかよく雁の習性を擷んでゐるから茲に抄録して見よう。

「雁の代見立」の項では——我國雪盛んなる時は、鳥などの食すべきもの一點もなきゆゑ冬は

山野の鳥は稀なり、春にいたり、雪降りやみし頃諸鳥を見る。二月にいたりても野山一面の雲の中に清水ながるれば水氣温なる故雪のすこし消える所もあり、これ水鳥の下りる所なり。雁これを見れば、まず二三羽ここにをりて己まづ求食、さて糞をのこして食ある處の目とす。但言にこれを雁の代見立と云ふ——かう云ふ書き出しで雁の友鳥に對する信義の厚いことや、獵師の目を眩ますために糞に土をかけておくと云ふこと、食のない代では糞はそのまゝ、雁の移動が夕暮や夜半、曉であることなどを書いてゐる。雁が代見をすることは事實であるが、友鳥のために糞を残しておくことと云ふ事は、今の獵人達には判つてゐないことと思ふ。然し耕地へ餌を撒いて飼ひ付けをやつて見ると、段々來る鳥が多くなる所を見ると友を誘ふと云ふことは確かに考へられる。鳥は餌を啄めば多くの場合そこへ糞をするものだ。それは鳥の腸が短かく出來てゐて無駄なものを長く腹の中へ蓄へておく事が出来ないし、またその方が空中を飛翔するのに都合がよいからである。代に糞のあるのを「友の爲め目とす」など云ふのは少しく雁の行爲を美しくする作爲的なものが感じられるが、昔の人の眼にはさう映つたかも知れない。こんな糞などなくても新潟のやうに雪の深い國では、鳥の餌を拾ふ場所が極限されるから、他の鳥も自然そこを訪ねるやうになる。然しかう云ふ理窟を云はないで寧ろそれを美化しやうとす

るところに昔の人の心の美しさが感じられる。雁の移動が夜半とか夕方とか曉に行はれるとも云つてゐるが、これも地方によつては日中盛んに移動するので無双網獵などに引つかゝる雁も大分ある。かうして見ると多少意見と見方を異にする所はあるにしても大體はよく見てゐると云へる。

雁の習性をもう一步突つ込んでゐるのは「雁の總立」の項の方である。——およそ陸鳥は夜中盲となり、水鳥は夜中眼明かなり。ことに雁は夜中物を見る事はなほだ明かなり。他國はしらず我國の雁は、おほくは晝は眠り、夜は飛行く。眠る時は人に遠き所にて貪り眠る。此の時は首を上げて四方を見てゐる雁二羽あり、人これを番鳥といふ。求食くまにもしかなり、飛ぶに列をなすは雁行と兵書にも云へり、人の知る處なり、されど居るにも位列をなして漫まならず。求食時は衆みなあさり、遊ぶ時はみなあそぶ。雁中に一雁ありて所爲衆これに隨ふ。大將と士卒のごとし。人のきたるか又あやしきを見れば、かの番鳥羽たゞきをなす。餘の鳥これを聽き、いかに求食くまともねぶるとも此羽たゞきあやまらず、幾羽も亂れて飛び上り、さて列をなして去る。但言にこれを雁の總立といふ。雁の備へある、軍陣の如し、餘の鳥になき事なり。他國の雁もしかならん。——と記してゐる。短い文章であるが雁の習性の急所には悉く觸れてゐる。

雁は晝も夜も活躍する

陸鳥が夜盲で水鳥が眼明であると云つてゐる所など大ざつぱでよい。それはそれとして、雁の眼が夜もきき晝もきく事はたしかである。我國の雁はおほく晝はねぶり夜は飛行くと云ふのもその通りであらう。たゞ千葉縣下和田沼の雁は、晝も一生懸命餌を拾つてゐるし、鐵砲の危険のない宮内省御獵場や、手賀沼の共同狩獵地へも出稼ぎに行く。しかしこれはさういふ安全地帯が出来てゐるからで、全然さう云ふ所のない地方では、どうしても夜間が多くなるであらう。眠る時には人に遠き所へ集つて眠ること、番鳥がゐて常に警戒の任にあたつてゐることも確である。鈴木翁は番鳥が二羽ゐると書いてゐるが、どうもそれははつきりしない。雁行の事が兵書にも載つてゐると云ふが、それは後三年役で源義家が雁列の亂を見て伏兵のあることを知つたが、それを云つてゐるのかも知れない。位列をなして漫ならず、位列と云へば宮中席次を思ひ出すが、それに似たものがあるかどうか、しかし啄食してゐるのを見ると兎に角列をなしてゐて、雜然としてゐるのを見た事がない。この列をなすことは軀が大きく飛び立つのに多少の滑走が必要であるから、雜然としてゐたのではさアといふ時に打突かり合つてどうにもな

るまい。行列をなすのもかう云ふ風に見ると、體形による心然性と考へられる。どうも行列をなすと見るのは穿ち過ぎてゐると思ふ。雁中に一雁ありて所爲衆これに隨ふ、大將と士卒のごとし。雁列には必ず先頭に立つ鳥がある。これを先鳥と云ふが、この先鳥は編隊飛行で云へば指揮官機であるから後に續くものがこれに従ふのは當然である。今ではないが昔雁の谷切網獵と云ふのがあつた。この獵は雁の通路に網を張り、これに網をぶら下げておき、雁列が通過する際網をぴーんと張ると、その網に雁がぶつかり網にくるまるやうな仕掛になつてゐた。この獵でのこつは先鳥を遣り過して置いて網を張ることであつて、これを過り、先鳥を先に網にかけて了ふと、後續の雁はこれを恐れ避けて了ふので大獵が出来ない。それを反對に先鳥を遣り過して置いて、次の鳥から網にかけると後の鳥は、先鳥の姿を追つて遮二無二そこを飛び抜けやうとするから皆網にかかつて了ふ。これを見ても先鳥の行動がいかに一隊の行動を左右するか判る。それは指揮官機と後續機の關係におけるが如くで、所謂大將と士卒の如しと云ふ言が立派になり立つ。私はある年雁の生態寫眞撮影のため八百ミリの望遠レンズを持つて和田沼へ出掛けたことがある。重い寫眞機を擔いで枯葦の中を這ふやうにして雁群に近づき、三脚を据ゑつけ、寫眞機を固定し、さてそのレンズを雁群に向けた瞬間ドドツと大地を揺がす轟

音が起つて二千羽餘りの雁が總立となつた。人の來たるか又はあやしきを見れば、かの番鳥羽たたきをなす、餘の鳥これをきき、如何に求食るとも、ねぶるとも此羽たたきあやまらず幾羽も亂れて飛び上る。全く雁の備へあること軍陣の如しとある、その通りである。全群の雁が飛び立つたばかりでなく、何萬といふ鴨にまで道連れに飛び立たれ、土地の獵師に見つかりひどく叱り飛ばされた事がある。

雁は飛ぶ時には實に整然とした隊形をとるが、その隊形は飛び立つと同時に、さうなるのであらうか。いやさうはならないで、暫くはごうごうと入り亂れてゐるが、上空を旋廻してゐるうちに、いつかちゃん和隊形を整へるに至る。しかしながら大群になると全群が一隊となるやうなことはない。幾つかの隊に分かれ或るものは飛び去り或るものは再びそこへ舞ひ降りるものだ。

食物の誘惑には雁とて参る

鳥の中では雁が一番利口であるとよく人が云ふ。さういふ點は勿論あるが、それだからと云つて、捕ることの出来ない程利口であるとは云へない。鴨を捕るために張つてある網へ群をな

して引つかかる愚しさをも一面持つてゐる。それだからと云つてこの鳥を馬鹿鳥として了ふことは勿論出来ない。結局は人間が利口過ぎるのである。

雁を捕る獵にも幾つかある。無双網で捕るもの、藪で捕るもの、張り切り網で捕るもの、中で最もふるつてゐるのは、今はないが籐を焚いて穴の中へ落とし込んで捕る方法である。これは四を繋いでおいて野の雁を寄せ、寄つたのを見ると一方で籐を焚く。この籐を見た雁は徐々に後退するから、これを追つて焚火を進めて行く。これを徐々にやつてゐるうちに、雁は豫て掘つておいた穴へ足を踏み外して落ち込む。穴の大きさは羽を開いた雁の兩端が穴の兩縁にかゝる程度にしておき、深さは雁の足の底に着かない位。この獵は結局穴の中へ追ひ落とし、雁の軀を宙ぶらんにして捕へる方法である。實際かう云ふ事が出来るかどうか、今この獵法がなくなつて了つてゐるので實驗出来ないが、昔の本に記録のある所を見るとたしかにあつたものに違ひない。かう云ふのんびりした獵のあつた昔が何となく懐かしい氣がする。

現在行はれてゐる獵は雁無双と、雁窠の二つで、兩方とも宮内省の主獵課に保存されてゐるが、雁無双の方は民間でも僅かに千葉縣下と岐阜縣下で行はれてゐる。この外に捕る意思はそれ程ないがかかれれば捕ると云ふ消極的なものに張り切り、網獵がある。これは雁の渡來地和田沼

で鴨を捕るために張る網にかゝる雁のことで、こんなのは稀な例だが捕れる時には一晩に百羽位かゝり獵師共をホクホクさせることがある。雁窠の方は雁の飛來する田圃に型罟を立て、その周圍に藪の着いた籐を立て、おき、夜間啄食に出て來た雁を捕る方法である。

雁獵の中で最も頭を使ひ腕に振をかけるのは、雁無双である。私は宮内省で行ふこの獵を二度見る機會を得た。それは二度とも埼玉御獵場の中で行はれたもので、まだ千葉縣下の新濱御獵場内のは見てゐない。これは場所の違ひと獵者の違ひだけで、あとは全く同じものである。抑々雁の渡來地と云へば、今では千葉縣下の和田沼共同狩獵地と、岐阜縣下の下池共同狩獵地の二箇所が有名である。兩所とも二三千羽の雁は毎年飛來する。種類は主としてヒシクヒとマガン、それに多少のサカツラガンが混る程度である。二三年前ハクガンが一羽渡來したがこれはマガンの白化したもので珍らしかつたが何れかで捕獲されたと見え昨年は遂に姿が見られなかつた。この他我國へ渡來する雁にはコクガンがある。これは千葉縣下の干潟で二年續けて鴨の干本窠で捕獲された。昔は四十雀雁も來たさうであるが、今では全く後を絶つたやうである。

扱て宮内省の雁無双獵は、毎年十二月と一月の間に何回か行はれる。この獵には先づ飼ひつ

けと云ふ技術が必要で、これは云ひかへれば人工の代である。その方法としてはよく馴れたマガンの囀を四羽ほど繋ぎ、その近くへ茹でた糲に泥をまぶしたものを呼び餌、床餌として撒布してをく、かうしておくのと野の雁は、囀を友鳥と見てそこへ降りる。降りるとそこには糲が豊富に落ちこぼれてゐる。その日はそれを十分に拾つて歸るが、翌日になると今度は友を引き連れてやつてき、その日も亦腹一杯餌を詰め込んで歸る。ここに人間の奸策が秘むとは知らず翌日も亦同志を誘つてくる。獵師はこれを遠くの方でちつと見てゐて、數も三十羽近くなるといよいよ獵の準備をする。囀を繋ぐ時には最初から網をどこへ張るか決つてゐる、と云ふよりは網は大抵の場合、田の畦を利用することになつてゐるから、その畦の線の前面十五間位の所へ囀の位置が決る。

網は長さが六間半、幅一間半、これを一條にまとめて田の畦の裏側に隠して仕掛け、この上に草を細く切つた所謂カクシ草を振りかけ雁の眼につかぬやうにしておく。この網には百間の手繩がついてゐて、網はこんなに離れた遠い所から、手繩を引張られて起きるやうになつてゐる。これだけの準備なら普通の無双網と少しも變りはない。頭を使つてゐるのは、この網から囀に向つて引かれた三本の呼び餌の線と、網の冠さる範圍内に撒かれてゐる床餌である。呼び餌

といふのは、囀の近くに降りた雁を、網の中へ呼び込むと云ふよりは誘導する餌の線で、その線の長さは四十間から五十間に及んでゐる。三本の線の中では中間のものが一番短く床餌と囀の間で約十間から十五間になつてゐる。

雁はこの線上に撒かれてゐる餌を拾ひ拾ひしてゐる間に、段々と床餌に向つて進むことになる。呼び餌は細い線になつてゐるからこれを拾ふ雁も勢ひ縦列をなす。かう云ふ一列縦隊で床餌に達すると、今度は床餌の幅が三尺もあるのです、その中へ個々に擴がることになる。かうして三本の呼び餌で誘導された雁が、床餌について十分に擴がつた時、獵師は千鳥寄せで約九十間に接近して手繩を引つ張り網を起し、間髪、冠せて了ふのである。

常に番鳥を立てて警戒

かう書くと實にたわいないが、元々警戒性の強い鳥であるから囀がゐた位で氣をゆるすやうなこともなく、常に見張りを立て、四圍を注視してゐる。獵師の足跡があつてもなか／＼呼び餌につかない。どうやら呼び餌についたと思つても床餌として撒いてある糲に泥のまぶし方が少いと、それでも餌あてして床餌につかない。私の見た二度目の獵では、雁が代に降りたのが午

前六時半頃で、網を起したのが十二時ちよつと前位であつた。この時なども十分呼餌についてをりながら、どう云ふものか床餌を嫌つて寄りつかず、網の背後に廻つて様子を見ると云ふ用心深さ。それでも約二十五羽の雁のうち五羽は、どうやら床餌についたが、番鳥の警戒が強くそれ以上床餌につく可能性がないばかりか、ついた雁さへ離れやうとする悪條件に、堪りかねて網を起し、それでも五羽を捕獲した。が兎に角この獵は氣短では出來ない。

私は此の獵で雁の氣の遣ひ方が非常に繊細であることを知つたが、その反面では人間の奸智が底抜なものであることも知つた。呼び餌や床餌の工夫から餌の作り方にまで、どんなに頭を絞つたか、それがよく判る。どうせ一人や二人、一代や二代で出來上つた事ではないが、今それに改良を加へる餘地のないまでに完成されてゐるのを見ると、我等の祖先のねばり強さに頭が下る。

雁には數理の觀念があるか

それは別として雁に數理の念があるのではなからうかと思はせる節がある。それは網を起す時に接近する千鳥寄せの方法に見られる。その方法と云ふのは、手繩を中心に斜ジグザグ状を

描きながら徐々に接近するのであるが、この時二人の獵者は常に軀を重ね合せ、雁の方からはただの一大の如く見せかけねばならない。大體無双網は、網が大きい上に、九十間もの遠方から手繩を引かなければならない關係から、二人の獵者を必要とするものである。この二人の獵者が番鳥を立て警戒しながら啄食してゐる雁群に對し、眞向から、向つて行つたらもの五間も接近出来るものではない。茲において、二人の獵者は手繩を中心に歩調をとりながら一體となつて斜ジグザグを描き、見て見ぬ振りをしてながら寄るやうにする。かうして寄ると十間、うまくすると十五間位は接近することが出来る。二體を一體に見せることによつて雁の警戒に緩みが生じると云ふことは兎に角數に對する觀念が多少ともあるもののやうに思へる。雁の群へ接近する方法には尙幾つかの方法がある。やから寄せ、擬馬寄せなどがそれであるが、最も普通なのは、身を農夫にやつし、肥桶を擔いで寄る方法である。又近年は、自轉車に乗つて近く方法も行はれてゐる。

木の葉落して安全地帯へ降下

それから雁が伶俐な鳥であると云ふ實證をこの春三月、手賀沼においてまざまざと見せつけ

られた。前にも云ふやうに和田沼へ渡つて來た雁群は日中宮内省の御獵場や、手賀沼、印幡沼などに出稼ぎに廻る。私は偶々手賀沼の獵師に所用あつて歸るさ、渡船に乗つて千間堤を渡つてゐる時、遙か西方に雁のケオーケオーと鳴渡る聲を聴きつけた。見ると觀兵式に参加の飛行機の編隊のやうに後から後から三十羽位の群が雁列を作つて飛んで來る。爺さんの手漕ぎの渡船がいくらか進まないうちに先の群はもう私の頭の上を大どかに羽搏いて通り過ぎる。澄み切つた碧空にクエオークエオーの聲が一段と冴えて聽える。私の頭上を約百米の高さで通過するので、私はこの手賀沼へは降りずに印幡沼の方へでも飛んで行くのかと思つて見てゐた。私の乗つてゐる渡船は手賀沼の上沼と下沼の中程を通つてゐるのであるから、下沼へ降りるのには上沼から下舵をとつてよい筈なのである。それなのに、私の頭上を百米の高さで飛び去るのを見るところでも下沼へ降りるとは思はれない。ところがどうしたと云ふのであらう。先の一隊が下沼の中心に達したと思つたその時、先鳥の一羽が搏翔運動を忽然として變へ、ヒラヒラと木の葉落しで落下し始めた。と見ると他の雁も全部これになつて木の葉落しに移つた。ヒラツと羽裏が返つた時午後三時のかつと照る陽光が、きらつと反射する。何のことはない秋風に誘はれて散る紅葉のきらびやかさである。一隊のあとに一隊が續き、二群の後に一群が續く。

これがみな誘ふ風もないのに云ひ合せたやうに下沼の湖面にかるやかに散り敷くのである。その数はざつと六百羽。私はその奇妙な雁の行動がいつ頃から始つたものか船頭に聞いて見た。その結果は矢張り私の思つた通り銃獵の脅威を免れる爲めに、近世になつて雁が發案した安全地帯への着水法であつた。大體、手賀沼は上沼と下沼の二つの沼からなる細長い沼で、下沼の湖面が共同狩獵地で、周圍が銃獵禁止區域となつてゐるに反し上沼は自由に鐵砲が撃てる。従つてこの湖面もその周圍も狩獵鳥類にとつては安全地帯ではない。この危険の境界線を雁達は實によく心得てゐるから上沼では射程距離外の上空を飛び、安全地帯の下沼へは木の葉落しの急降下が必要となつてくる譯である。それでは下沼へ降りて何故上沼へは降りないのであらうか。それは下沼は沿岸町村の獵師で組合を作り、獵期中は川止めと稱して限られた獵日の外は船を絶體に入れさせないから全くの安全地帯であり、靜寂境なのである。これに反して上沼は前述の如く銃獵を許可してゐる上に、魚捕りの船が多く出るので、上沼を避けて下沼を選ぶやうになるのである。雁はさう云ふ所をもちやんと心得てゐる。かう云ふ雁達の行動を見ても、自己を防衛するためには、持つて生れた習性の上に時代々々の危険に適應して訂正を加へて行くことが判る。勿論これとても一朝一夕で行へる筈のものでなく、數多い同族の犠牲と、

長い體驗が基礎となつてゐることはよく領ける。

腕力が物を云ふ雉の社會

—宮内省保存囿雉獵から—

民間では出来ない四雉獵

宮内省主獵課で保存してある獵の中で雉を捕獲するものは三つある。その一は、一月下旬行はれる上げ鷹獵で、その二は五月中旬の四雉獵、その三は十二月末の追掛雉獵である。御多分に洩れずこの獵も亦それ〴〵雉の習性を心憎いまで取り入れてゐるが、その中でも四雉獵はその最も尤たるものである。この獵法も今では僅かに宮内省主獵課によつて保存せられてゐるに過ぎない状態であるが、古くは一般民間においても相當に行はれてゐたものではないかと思ふ。この獵は否でも應でも五月中旬でないといへないから、我國の狩獵法規の上からしても、到底民間で行ふ事の許されない特殊の獵であると云へる。

菜種の花咲く頃が獵期

四雉獵は埼玉縣の越ヶ谷町を中心とした、宮内省江戸川筋御獵場内だけで行はれるもので、時期は五月中旬と定まつてゐる。恰度麥の穂が出盛り、菜種の花が盛りを過ぎた頃である。御獵場は早く云へば養雉場であるからして、雉はまるで鶏のやうに多く、鶏のやうに人の目につく。麥畑の緑の波の中から、黒紫綠色に輝く長い首をヌツと突き出して、通り掛りの人をポカンとして眺めてゐる風趣など、今の我國ではさうさらに見ることは出来ない。

そもそも雉が春の讚歌を奏で始めるのは三月下旬頃からの事で、お釋迦様の四月八日の聲を聞くやうになると、もう可成頻繁に鳴くやうになる。この頃山間地方では山吹が黄金の花を咲かし始める。それが五月中旬となるとあつちでケンケンこつちでケンケン鳴き立てる。狭い御獵場の中は、それこそ文字通りケンケン轟々として耳を聳するばかりである。かう云ふ時期を待ち構へてゐて、この獵は行はれるのである。

卵を採つて来て鶏に孵化させる

此の獵は名稱を四雉獵といつてゐるのでも判るやうに、雄の四を使ふのもつて特長としてゐるから、獵期の來るまでには何は措いても、四だけはちゃんと養成しておかなければならな

い。この囀の養成が、なかなかの仕事である。囀にする雉は、抱卵中の雌を襲つて、一巢の卵を一個残らず掠奪して來、これを鶏の假母に托して抱卵孵化させる。かうして生れて來た雄の雛だけを囀の卵として手鹽にかけることになる。これに携はる獵師の云ふところでは、どうかすると、この一巢の卵全部が雄である事と雌であることがあるさうだ。しかし何れにしたところで、囀として必要なのは雄であるから、雌には係つておられない。さりとてこれを捨て去る譯にも行かない。何となれば後日なくてはならない存在になるのであるから——斯くして生れた雛共はその年は床下に作つてある鳥小舎の中へ抛り込んでおく。親はなくとも仔は育つ例へで、人の興へる餌を攝つて、いつとはなくやんちや坊主となり終せる。この頃になると根が鬭争精神の旺盛した雉の子供達であるから、暇にまかせて突つつき合をやる。獵師はかういふ状態をぢつと觀察してゐるが、これは要するに囀學校への第一考查をやつてゐる時であることは云ふまでもない。此の考查にパスしたもののだけが囀學校へ入學を許され翌年三月十四、五日の頃から教育を授けられる事になる。氣持のよいのはこの考查には、人間の社會のやうなインチキもなければ情實も伴はない事である。實力だけが物を云つてゐるのであるから、受ける方も氣易く、また考查する方も金權の前に節を屈する必要がなくなる。

囀にも入學考查がある

考查の第一要件は強いといふ事である。どいつへ打突つて行つても、相手をへこます、さういつた腕つ節の強い奴程、パスの可能性は多い。かう云ふ強い奴から順次に引つと抜いて三羽位をパスさせる。教育は最初から個人教授である。教室は一羽／＼獨立したものを興へられるが、しかもその教室は周圍をすつかり圍つて、注意力の散漫を防ぐやうになつてゐる。かうして精神の統一を計る一方では榮養食の給與が始まる。米とトウモロコシとエゴマを、卵の黄身にまぶしたもので、これは雉の社會ではもう飛び切り上等の御馳走なのである。獵師によつては、卵の黄身の代りに鰻の粉を使ふこともある。

教育は個人教授

外部との交渉を一切遮断されて世の雜念から解放される一方では、かうした御馳走を三度三度振舞はれて、身は日一日と充實するばかりである。この頃になるともうどこにも、子供ばいところは消え失せて、押しも押されもしない青年となる。羽色も艶を増して見るからに立派で

あるし、頬の肉垂れも漸く膨れ出し、その色彩も日増しに赤さを加へてゆく。既にして青年四の体内には變異が起りつゝあるのだ。この状態を見てとつた獵師は、今度は、自分が仲介人となつて新妻をめあはす段取りとなる。この時のために雌雉を少くとも三四羽は用意しておかねばならない。一方この頃の野雉はと云へば、雄といふ雉は一羽残らず雌の獲得戦でうき身をやつしてゐる最中であるが、今この四は、さう云ふ猛闘もなく苦闘もなく、自己の慾望の對象をしかも獵師の介添で得てゐる。しかも一日三回、その都度々々變つた對象を授つてすつかり悦に入つてゐる。この雄四は、それこそ天下の色男となつて誰恐るゝものがなくなる。かう云ふ所はちようど金持の息子と同じで、實力はなくても向ふ氣だけは人一倍強くなる。

四を訪ねる時には一々ノツクする

腕白坊主共を、かうまで色氣づける獵師の氣苦勞はそれこそ大變なものだ。鳥舎の入口の戸が、パタンと云つても飛び上つて驚くといふやうに、この仕込み中の四は動じ易く、感じ易い。獵師の着物の色が變つても、もう落着を失ふ。まして世話を焼く獵師の顔が變らうものなら、てんで傍へも寄りつかない。こんな譯で四の仕込みが始まると獵師は訓練中は勿論、いよ

いよ仕立上つて、實際に獵を行ふまでの一切を一人で受持たねばならない。しかも同じ色の着物を着てゐる。これだけの注意ではまだ十分とは云へない、いつも同じ着物を着て、いつも同じ顔の獵師が入つて行くのだから、いちいちノツクしたのではないかにも他人行儀のやうに我我は思ふのであるが、尊大ぶつてゐる四にとっては、それでは氣に食はぬらしい。そこで獵師は、御氣嫌を損ふのを恐れて、四の宮殿を訪ねる時には一應門前に立つて、これから入つて行く、と云ふ合圖をする。それには獵師は雌笛を使ふ。人間の社會なら扉をコツコツとやるところを獵師は笛を口に唾へて、チイヨチイヨチイヨイとやる。これは雌雉の鳴聲であるから雄四に見れば、何で憎からう管がない。身をすり寄せて待つてゐる。かうして四に心の準備をさせておいて入つて来る獵師から、初のうちは御馳走が貰へたが、少し色氣がついて來ると御馳走の外に情慾の對象が得られる。この際雌がその四を好まうと好むまいと、それは全然問題ではない。獵師の介添へで強制的に雄四の意に従ふことになる。かうなるともう四はケンケーンと鳴き、ポロ／＼とホロを搏つやうになる。四の養成となると獵師も全く汗をかいて了ふ。

四にも狭き門が待つてゐる

これで一應四としての教育は終了したことになるが、これをもつて一人前の四といふ事は出来ない。もう一つこれらの四達に大きなせまき門が横つてゐる。それは宮内省の採用試験であつて、この試験にパスしたもののだけが、初めて四としての辭令を拜受する段取りとなる。この試験は毎年五月初め行はれるものであつて、その方法は原野に出で、野の雉に喧嘩を賣らせて見たり、出て来た野雉に網を冠ぶせて見たりして、その喧嘩の賣方や度胸振りで採點し、その平均點のよいものを採用する、と云つた徹底した實力考査である。

かう云ふやうに實力考査をして見ると、鳥舎の中では一廉の名四であつたものが、一度野雉の一聲にあふと、それこそ尻尾を巻いて縮み上り、ケンと一聲も鳴かないやうなものもあるし、また堂々と鳴き渡つて野雉を誘ひ出しはしたが肝腎の網を引かれて膽を潰すやうなものも出る。かう云ふ膽つ玉の小さい四は何れも落第であつて、反對に強い野雉に向つて一向ひるむ氣配も示さず堂々の陣を張り、その上網を引かれてもビクともしない度胸骨の据つたのがゐる。かう云ふのこそ四として役に立つ鳥である。

腕力に應じて雌を獲得

さて四雉獵は、かうして養成され、藝能試験にパスした四を主役にして行はれる獵であつて、主獵官立會の上で執行される。五月中旬と云へば野の雉は、とうに各自の腕つ節に應じて、勢力のある雄は五羽も六羽も、ないものでも二羽位の雌は獲得して、それぞれ棲息に必要な領土を占據してゐる。この棲息分野と云ふものは、生きとし生けるものには缺くことの出来ない生命圏である。鳥類殊に蕃殖期の鳥類、しかも同族の鳥達の間には、これが實に確然としてゐる。雉には雉で個々の棲息分野があり、クヒナはクヒナでそれを持ち、鶺鴒は鶺鴒でそれを守つてゐる。これは一定の面積の中では各々生活の限度があり、この限度を超えれば、それは共倒れになる危険性があるからである。かういふやうに棲息分野の確保と云ふ事は、自己の生活を全ふする唯一の手段であるから、これを確保するためには當然血の闘争が演じられなければならない。今雉の棲息分野に就いて云へば、一雄二雌位なれば一反歩の菜畑或は麥畑に、二反歩或は三反歩位の耕地を合せたものと見てよろしい。(尤もこれは御獵場の如き多數雉の棲息してゐる所での話であつて、雉の少い土地にあつては勿論これはあてはまらない。)この場合菜畑或は麥畑は、身を潜匿せしむる場所であり、耕地はその啄食場となつてゐる傾向が多い。然しこれは一雄二雌位の場合であつて一雄五六雌の場合は、當然この分野は

擴大されるものと見ねばならない。

棲息分野も自己の腕力で

かくて自己の勢力に應じて雌の数は決り、棲息の分野が確定すると雄は自らその王國の主權者をもつて任じ、雌と領土の保全に全力を傾倒する。ケンケンと鳴きポロポロと羽搦いて我が威を示し、萬一この縄張りを犯すものがある時は、忽ちにして鬭争を挑み、これを撃退せんとする。かう云ふ強氣の雉達の鳴合で、早朝の御獵場内はそれこそ殺氣立つてゐる。雉の鳴聲を聽いて『ああのどかだ!』などゝ感ずる人があつたとすれば、その人は蕃殖期の雉の生活を知らない人であつて、一度その内情を知らうものなら、絶體にのどかなどとは思へない。何となればそれは飽きでも喧嘩ごしであるからだ。事實それは全く喧嘩の一步手前である。といふのは囀雉といふ獵法の存在が、何よりも雄辯にそれを物語つてゐる。

鳴きの張具合で強弱を知る

この獵を行ふ時には前もつて、下見といふことをする。これは早く云へば氣の強い雉、喧嘩

早い雉の居所を突き止めておくことである。しかもそれは何によつて知るかと云へば、鳴きの張り具合で大抵見當がつく。だから當日はこれを片端から捕つて行けばよい。

獵は午前四時半頃から行はれる。四時半と云へばやつと夜が明けたばかりで、道も屋根も夜露でしつとりとしめつてゐる。初夏の朝の、ひんやりとした風が、出揃つた麥の穂をリレーで渡つてゆくと、そこにはほのぼのとした緑の旋律が巻き起る。これに雉がケンケン、ポロポロと主題歌を導入する。かくして田園交響樂が靜かにしかも力強く奏で始められる。

下見の場所へ着く。昨日鳴いてゐた雄雉が鳴く。張り具合で強い雉といふ事が判る。その鳴聲を前にして網の張場の評定が始まる。そのひそひそ話の獵師の肩には囀の籠と雌の籠が、無双網の手竹で振り分けに擔がれてゐる。やがて張り場とそこへ誰が網を張るかが定まる。受持の獵師が囀籠を擔いだまゝ、決められた網場へ向ふ。

自由自在に雉を誘導する勢子繩

當の野雉は麥畑二枚を隔てた菜種畑で鳴いてゐる。その畑の左側は掘り起した田圃で、その右手は馬鈴薯畑に續いてゐる。今網を張らうといふのはこの馬鈴薯畑である。長さ二間半、幅

七尺の無双網が型の如くスラスラと張られる。網が張り終へると次には勢子繩を張り廻す。勢子繩には本勢子、巻勢子、手前勢子の三種があつて巻勢子繩が最も長く、手前勢子繩が最も短い。本勢子繩は網の先方から真直ぐに延び、巻勢子繩は、網の手前段から右方へ直角に延び、それが再び右方に屈折して鳥舎の近くまで延びてゐる。手前勢子繩は巻勢子繩と同じやうに、網の手前段から手繩に添つて延びてゐる。これらの勢子繩は何れも高さ六寸位、弛みのないやうピンと張られる。この繩の役目は野雉がどこから出て來やうと、それを長さ二間半、幅七尺の網場へ誘導するところにある。

雄囚は鄭重に雌は粗暴に

これだけの用意が整ふと、今度は獵師と執行官の潜む鳥舎を立てる。鳥舎と云つても極く簡單なもので、二枚の蓐蔭を塀風のやうに立て廻しただけのものである。この鳥舎の中には獵師が潜むだけでなく、網を起す肝腎な手繩が引き込んである。手繩の長さは約五六間であるから鳥舎は網の前方五六間の近くにある勘定である。

さて捕獲の準備は成つた。いよいよこれから囚と野雉の渡り合ひが始まる。執行官が鳥舎の

中に入ると、獵師は囚の入つた籠と雌の入つた籠を靜かにぶら下げて網場に進む。こゝで主役が登場する。位置は巻勢子繩と手前勢子繩が結ぶ直角の中、網から約二間を隔つてゐる。囚籠の方は鄭重に、雌籠の方はどすんと投げ出される。先づ雌籠の蓋が取り除かれて、一羽の雌が吊し出された。そしてこの雌は無雑作に金突カナツクでその場に繋がれる。次は囚の番である。籠の蓋が取り拂はれる前に、獵師の口から雌の鳴き聲が洩れる。懇ろに蓋が拂はれる。籠が傾く。中からハゲイトウのやうに眞赤な肉垂れが窺く。その眞赤な地色を眞黒く染めだした小斑點がぼつぼつとあからさまに眼に映る。耳羽が後方へぴんとそっくり返つてゐる。ちよつと見ると角の生えた雉みたいだ。嘴だけがいやに生白く光つてゐる。顔全體の感じはお多福風で兩頬を腫れ上らせた病人のやうだ。むくんだやうに膨れ上つてゐる肉垂が、顔の調和をだいなしにしてゐる。どう見ても雉のお化と云つた感じである。眞赤に熟れた顔が出ると次には紫黒色に冴えた首が出てきて、あとから青灰色の背部が続いて出て來た、と見ると、全身がびよこんと跳び出す。跳び出した所は恰度花道から出て來た辨慶のやうで、見應へはするが、この辨慶には尻尾がない。狭い籠の中では長い尻尾は邪魔とあつて切り取られたものだ。従つてその姿は颯爽とは云ひ兼ねるが、威風はあたりを拂つてゐる。

獵師の手が雌を抑へて囧の鼻先に突き出すと、張り切つた囧が、片羽を半開きにして頭を下げ、鶏の雄がするやうな姿態ですり寄つて行く。頃合をはかつて一氣に雌を興へる。それが済むと獵師は無感覺に雌を元の籠の中へ吊し込む。莫産の間隙から此の状態を見てゐる我我の額から汗がポタリと落ちる。囧の空籠と雌の籠を下げた獵師が鳥舎に戻る。

鳴が先かホロが先か

籠から出されて、そしてたつた今獵師依存の情慾を満した囧は、初夏の陽を浴びて武者振ひを一つ、ぐつとあたりを睥睨しておいてケンケン・ポロロと羽搏く。羽搏に餘り力が入り過ぎて身體が宙に浮き上る。會て雉は鳴く時に、ホロが先か、鳴が先か、と云ふ事が問題になつた事がある。今眼の前で鳴いた囧雉は、バタバタと先に羽を搏つて、ケンケンと鳴き、その後を引續いてポロロとホロを搏つた。これで見ると先のホロは小さく後のホロは大きい。これを野外で聴く時には先のホロは聞き取れないで後のホロだけが聞えるから、ホロは鳴の後だと思ひ込む人が多い。然し同じ囧雉でも先にホロを搏たないで後だけホロを搏つのがゐる。これは雉の個體に依つて違ふものと見てよからう。けれども先にだけホロを搏ち、鳴いた後ホロを搏

たない雉は先づゐないやうだ。それは野生の雉も同じ事である。

さて囧は鳴いた。野雉や如何？ と固唾を呑む。ポロ／＼・ケンケン・ポロロ！ 野雉が受けた。云つて見れば賣つた喧嘩が買はれたやうなものだ。野雉の受けを聽いて囧が首を突き上げて、四邊を覗き込むやうにする。囧が鳴く。今度は野雉が受けない。何となくあたりが殺氣立つて来る。

強い雉は怒りっぽい

野雉にして見れば自分の領土は既に侵略されてゐるのだ。最早一撃あるのみだ。此の期に及んで問答は無用なのであらう。一分、二分、三分、「來た／＼！」獵師から傳令が飛ぶ。見ると赤い頬と白い嘴と黒く見える首から胸を、菜畑の中から突き出して、ちつと囧を睨み据ゑてゐる。こゝで三度囧が鳴く。「怒つた／＼！」と獵師の聲。怒が心頭に達したかその形相は物凄しい。頭を地面に擦りつけんばかりに垂れて、だつだつと駈け出す。囧の戦闘態勢も整つてゐる。然しまだ囧には餘裕がある。「ココココ」と雌を呼んでゐる。これを聽いて野雉が躍りかからんと突進する。囧の前方一間、猪突の眼の前には一本の細繩が張られてゐる。これを巻勢

子繩と知るや知らずや、野雉は「チエツ」と舌打するとこの繩に沿つて右方へ迂回せんと急ぐ。これはこの繩の尖端を迂回して一撃を加へん作戦。鳥舎の中では執行官の手が既に手繩に掛つてゐる。私の心臓はゴットン／＼と手荒く血のポンプを押してゐる。「それ！」と獵師の號令！執行官の身體が後方へ引つくり返へり、網が土煙を上げてはね返る。野雉が反射的にふつ飛ぶ。何も彼も一瞬だ。四が「どんなものだ」と首を長くする。

野雉が網を冠つた瞬間、獵師は「ウウン・ウン」と大きく咳拂ひをする。これは四に對して「勝負あつた、ヨシ／＼、今行くぞ」と云ふ合圖、これを聽いて四がもう一度見得を切る。正に大統領といつた感がする。

大きく咳拂をしてゐて、獵師はまた空箱と雌籠を持つて四に近づく。また雌が吊し出される。手柄を立てた四が云ひ寄る。目的を達すると雌はまた元の籠の中へ、そしてこれが済むと今度は四の番である。出す時には腫れ物にでも障るやうに鄭重であつたが、一役済ませた今は背中の褌をもつてぐいと吊し込まれる。「人間といふ奴、何て勝手に出來ていやアがる」四雉はさう思つてゐるだらう。

しびれる足を引きすつて鳥舎から出ると、今は完全に戦ひ破れ、捕虜となつてゐる野雉に見

參、先刻の凄じい形相は全く地を拂ひ、肉垂れは萎縮して、徒に黄色つばい眼玉をくり／＼させ、身をぶる／＼と震はせてゐる姿はひとしほ哀れである。

これで一回の獵は終つた。第二回第三回がこんなうまく行くとは限らない。それは野雉と四との呵呷の呼吸があつて初めてかう云ふ輝かしい結果が得られるのであつて、若し野雉が、四の第一聲を聽いただけで早くも雌を引連れ金持喧嘩せずと、どん／＼遠ざかるか、或は野雉の一聲に四の方が震へ上つて沈黙して了ふやうな場合は初めから喧嘩にならない。喧嘩ばかりは賣るものだけあつても、買ふものがなくては喧嘩にも何にもなつたものではない。然し野雉が強過ぎて、四の方で恐れをなす場合といふのは極く稀であるから、強い鳥ほど喧嘩の相手としては歓迎するところである。

後家さんの處分はクロンボの手で

此の獵では、このやうに強い雄から捕獲するから、幾年か続けるうちには柔弱なものばかり残つて了ふのではないかと思はれるが、事實は何年経つても、四の賣る喧嘩を買ふ奴のゐるのを見ると、強者が斃れ／＼ば、またそれに代る強者が現れることがわかる。

たゞ我々が心配に思ふのは、かうして勢力のある雄を捕る關係上、後家さんが増えて了ひはしないかと云ふことである。假りに一羽の雄が平均四羽の雌を持つてゐるとすると、これを五十羽捕ると、二百羽の後家さんが出来る勘定になる。しかしこれはあまり氣を病む必要はない。何故かなれば、蕃殖の前記において雌の獲得戦に意氣地なくも破れ去つた男やもめがうよよとしてゐるからで、今一羽の強力な雄が人間の陥穽に落ち何羽かの未亡人が出来ると、常にその周圍をうろくしてゐたやもめ同志で勝負を争ひ、その腕節に應じて何羽か宛の未亡鳥を獲得することになる。従つて一羽の強い雄が斃されると、それによつて何羽かの弱勢の男やもめに春がめぐり來ることになる。所が何時になつても芽の出ない男やもめのことを獵師仲間ではクロンボと呼んでゐる。これは要するに敗殘者なのであつて、かういふ敗殘者は、種族保全と云ふ大使命を課せられた蕃殖期にも、雌が得られず従つて生殖行爲が出来ないため、頬の肉垂れも萎縮して黒變する。かういふやうに頬が赤くならないで黒くなるのでクロンボと綽名されてゐるのである。しかしながらこれらクロンボと雖も根つから生殖作用を喪失して了つてゐるのではないから、敗殘者となつた後でも、常に優勢な雄に率ゐられてゐる雌の尻を追ひ廻してゐる。そして運よくその支配者が捕られでもするとやつとのことで人生の春にありつけるや

うになる。不思議なことにはかうして生殖作用を營むやうになると、今まで萎縮し、黒變してゐた肉垂れが生々と赤さを増し、ぶうつと膨らんで來ることである。そればかりではなく、鳴聲もキイと悲鳴しか上げ得られなかつたものが、ケンケンと張るやうになる。これでやつと人並？ になれたのであるが、中には一春をクロンボで終るのもある。意氣地なしは人間でも雉でも女性には縁が遠い。

勢子繩を潜りもせず飛び越しもせず

それからこの獵で、我々は勢子繩の存在を知つた。前にも云ふやうにこれは細紐を高さ六寸ばかりに張つただけのものであるが、この三本の勢子繩で、どこから出て來る野雉をも、自由自在に網場へ誘導することが出来る。それといふのもこれは一に雉といふ鳥が、自分の進路に一定の高さに横はる紐或は樹枝の列を發見した時、絶対にこれを飛び越えもしないし又潜り抜けることもしない特別な習性を持つてゐるからに過ぎない。この習性を持つてゐる限り、雉は一本の紐乃至は柵によつて意のままに繰られる可能性がある。雉の多い地方では農作物に對する被害をやかましく云ふ。かう云ふ被害に對しては雉の持つかう云ふ特別な習性を利用して勢

子繩を使つて見るべきである。この簡単な紐の展張によつて雉の被害を避け得られるとしたら、こんな結構なことはなからう。

雉は常に避難所を決めておく

— 宮内省保存追掛雉獵から —

雉の朝食は早朝の田圃の中で

十二月二十三日、それは寒い朝だった。私達が増林の獵場へ着かうとする時、やつとしらじらと夜が明けて来た。空は碧く晴れて今日の上天気を約束してゐた。田圃中の道を獵具を積んだ大八車が通ると、凍つた道がガタゴトと鈍重な響をたてる。

車の後を黙々として行く見廻役が、フト立ち停つた。片手を額に翳して遙か左方の田圃を凝視する。「いくつかあるやうだねえ！」誰へともなくさう云ふ。私も立ち停つて見たが何も見えない。遠く離れて餌を拾つてゐる雉を識別する視力を私は持つてゐないのだ。獵人の眼といふものは鋭いものだ、さういつも思つてゐることを、今朝も亦私は感じた。それにしても雉達の朝食は早い。

掘り起された田圃の土塊の下で、僅かな水気が白く氷つてゐる。私は歩きながらそれを見

た。こんなに氷つてゐる田圃の中で一體雉は何を拾つてゐるのであらうか。田圃道の突き當りは學校で、道はその前を鍵の手に右へ折れてゐる。車をおつとり圍んだ一團の獵人は黙つて右に折れる。これでは雉のゐる方とは反對だ。ひよつとすると先刻見届けたあの雉を捕るのではなからうと思ふ。

學校の前を通り過ぎて間もない所に梅林があつた。その梅林の中で車がガタンと停つた。獵人達が寄つてたかつて獵具をおろす。四間もある物干竿のやうな丸竹を、獵師が擔いだらあつちへ打突かりこつちへ打突かりした。

梅林の向ふ側は林で、林との間に挟まれた田圃が東の方へずつと長く延びてゐる。さつき見廻役が見届けた雉のゐる田圃は、この田圃の東外れに當つてゐることが判つた。この梅林と、向ふ側の林の間の田圃に五反の網が二重に張り渡された。この網の左方つまり田圃の西端は、杉林と雜木林に狭められ、その前面に約一反歩ばかりの野地がうすくまつてゐる。網は今この野地の前面に立ちはだかるやうにして張られた。

一反歩の野地が常設避難所

網が張り終つたら『あなた方はあの木の根つこで……』と云はれた。私と赤間さんとは田圃を踏み越えて林の上に入り、指示の大木の根元へどすんと腰をおろした。此所へ上つて見ると東西に延びた細長い耕地がずつと東の外れの方まで眺められた。そして西の端である野地は今私の眼の前におかれてゐる。一條の網は、私のゐる位置と並行に梅林まで續いてゐる。観客席としては絶好な位置だ。

私達をここへ捨て去つて八人の獵人は手ぶらで、今來た道をさつさと引き返して行く。あたりはまた元の荒涼とした姿に戻る。急に心に空虚が出来る。私達の直ぐ背にあたる所には農家が一軒ポツンと立つてゐる。ねぼけ眼をこすり／＼少年が出て來ると、いゝ氣持さうに小便をたれてまた引つ込む。すると今度は白色レグホンが現れて、迂散臭さうに私達を覗き見する。變な眞似をしやアがる鶏だと思つた。退屈まぎれに、大木の幹から身體を乗り出した。はからずも私の視線は白雪の富士に打突かつた。今しも眼覺めた富士が金色の朝陽で顔を洗つてゐるところだつた。寒いけれども風がない。網が死んだやうに垂れ下つてゐる。光線が段々と明るく力強くなつて來た。

『アツ來ましたよ！』獵人達が姿を消してから二十分も経つたと思つた時、隣の木蔭にゐる

赤間さんが囁いた。私は幹に顔を押しつけたまま、右眼だけでそつと南の方を見た。來た／＼清澄な大氣の中を音もなく滑つて一羽の雉が。兩羽を擴げられるだけ擴げ、長い尻尾に反りを打たせ、首を思ひきり前方に伸ばしてスツて來る。その姿が金色を鏤めた富士の白雪に浮彫されたとき、私はアツと叫んだ。餘りの美しさに私は壓倒されたのだつた。

この原野の伊達者が、待ち設けてゐる網に打突かつたのは、それから五秒の後だつた。その激突の猛烈さに、網は一瞬突き抜かれたかと思ふばかりに前方へ突き上げられた。しかし次の瞬間にはスル／＼と網を這つて袋の中に落ち込む。面喰つた雉が全力を傾けてもがくと、網の目からニョッキリと長い黒い首が飛び出した。その時肉垂れが赤く光つた。今度は足が二本、網の下へ抜けて出た。どの指もみんな開いてゐる。それでも羽をバサ／＼すると、今度は網がハンモックの様にぶらん／＼揺れる。

『また來ましたよ！』赤間さんが囁く。前と同じやうにして見ると、前と同じ田圃の上を、前と同じ高度で、前とそつくりの姿の雄雉が、前と同じやうな恰好で滑つて來て、また前と同じやうにして網に打突り、袋の中へ轉り込んで了ふ。來始めると、あとからあとからと續く。そして今眼の前で九羽の雄雉、雌雉が揺り籠の中で揺られてゐる。何といふたわいなさであら

う。十羽飛んで来た中でたつた一羽の雌雉が、網の上二尺の所を乗り越えて野地の中へ飛び込んだ。

「もうこんなもんでせうよ！」と赤間さんが云ふ。その聲に安心して身體を乗り出すと、雉の姿は見えないで、一列縦隊の勢子が見えた。近くなるに従つて段々と「ウン／＼」といふ軽い咳拂の聲が聴え始めた。まだ追ひ立てるつもりらしい。同じ勢子でも兎のガンガラ獵では喚き立てる上に鉞力のガンガラを叩き廻り、熊の卷狩では一人ではあつても喚鳴る聲は全山に響くといふ風である。所が追掛雉獵の勢子はウン／＼と軽く咳拂ひするだけだ。此所には何か理由がなくてはなるまい。これでこの場の獵は終つた。私は大木の蔭から飛び出して行つて、網の目から出てゐる雉の頭を撫でた。その時黄色い眼玉がパチリと閉ざされた。

雉が早朝と夕方耕地へ出るのは啄食のためだ。云つて見れば耕地は雉の世界の食堂である。追掛雉獵はこの習性を利用して早朝と夕方とは耕地から追ひ出して網にかけ、日中は反對に野地や林から追ひたてる。これも雉は日中樹蔭や野地の中に秘む習性を持つてゐるからであるのは云ふ迄もない。

避難所に野地を選ぶ理由

雉が早朝と夕刻啄食のために耕地に出る習性も亦、日中樹蔭、野地に秘む習性も、こんな事は誰知らぬものはなからう。また蕃殖期以外主として群棲する習性も亦一般的である。世には雉元來の習性としては孤獨を愛するものであると云つてゐる人もあるが、それは雉の少い地方の事で、多くは三羽、四羽、五羽と群棲してゐる場合が多い。然しそれはそれとしておいて、この獵の教へる重大な習性の一つは、啄食中であつても或は潜匿中であつても一度危難に遭へば、必ずどこへ逃げ込むべきか或は何れへ向つて避難すべきか、豫めその避難場所を決定しておくといふことである。少くとも御獵場内の雉にはこの習性が顯著である。若し萬が一にも、かう云ふ習性を雉が持つてゐないとすれば、元々この獵は發祥しなかつた筈である。それが古く發祥して現今に及んでゐると云ふ事實は抑々何を物語るかと云へば、それは古から雉がこの習性を持つてゐたといふ事の外ない。私はこの事實を今眼のあたり見届けたのである。今の場合啄食中の雉と、野地との間は約千米以上も離れてゐるが、それでゐて、勢子に追ひ立てられれば、南端から北端の野地まで一氣に飛翔して來たのである。若し追ひ出さればどこへでも

構はず、行き當りばつたり避難すると云ふ性質を持つてゐるとするならば、何を好んでこの野地に突つ込む必要があらう。さしづめ田圃の兩側に立ち並んでゐる山の中へでも逃げ込めばよかりさうなものだ。それなのにそれをしないで態々野地を選ぶと云ふ事は、そこに何か生活上の約束があるからに違ひない。これは丈なす葦の野地が、雉の身體を潜匿するに最も都合がよいのはわかつてゐる。一度この中に潜まんか、人間の眼からも或は鷹類の強力な視線からも安全に身を守ることが出来るばかりでなく、天氣のよい日の野地は、他の場所に比べて最も理想的な保温地であることが判る。かう云ふ點からして日中の野地が避難所として特に選ばれてゐるものと見える。

飛翔高度はほぼ一定

それからもう一つ顯著な習性として擧げたいのは、平地上を飛翔する雉の高度である。これは網の高さが約二十尺である所から見て、大體二十尺以内と見るのが至當であらう。十羽のうち九羽までがこの高度で突込んで來て網にかゝり、一羽だけが網の上二尺の所を飛び越えたが、これでも二十尺以内と云ふ事が略々判る。一體雉は地面から飛び上る時は強烈に羽搏き或

る高度に達するとあとは帆翔に移る。かう云ふ飛翔法のために、高度が一定するものと思はれる。よく雉は或る高度まで飛び上り、そこで行先を決定してから飛び去ると云はれてゐる。然し或る高さまで飛び上つておいて、さてそれから徐に自分の行先を決める、これは何たるのんびりした話であらう。一體こんな感じの鈍い事ではついて廻る天敵の中での生活も覺束なからう。愈々危難が身邊に迫り、さて飛び出すと云ふ時には、早くもその避難すべき方角は決つてゐると見るべきだ。それが證據には或る高度に達した雉が、右すべきか左すべきかを考慮する餘地のない事や、さう云ふ魔誤ついた態度の見えないのでも判る。若し銃獵家の云ふ様に、そこに多少共時間的に餘裕があるとすれば、それは恐らく搏翔から帆翔に移る時の餘裕であるかも知れない。何れにしる雉の帆翔といふ飛行法は銃獵家に狙はれ易い。

また雉は急激な旋回運動が出來ないために、よく電線に打突かつたり、疾走中の電車に衝突したりすると云はれてゐる。これは果して雉に急旋回の技能がないためから起る現象であらうか。私は追掛雉獵で、網の前六尺の所で遽かに網の存在を知つた雌雉が、鮮かに身を翻へして飛び去る現場を寫眞に撮つた。これで見ても飛翔の前方において危険を認めれば、これを避ける術を持つてゐることが判る。これは要するに飛び立つ時の動機と、その場の地理的環境によ

つて左右されれると思ふ。例へば汽車に打突かる場合にしても、遠方から飛んで来て打突かると云ふよりは、寧ろ電車の沿線で遊んでゐる時、或は路線を横切らんとするやうな時、突如疾走して来る電車に、吃驚して不用意に飛び立つが如き場合に起る現象と私は見てゐる。話は違ふが富士の山中湖へ行くとき夏の夜道によく夜鷹が出てゐる。身體は見えないが眼がギラ／＼と物凄く光つてゐるのでそれと判る。意地の悪い自動車の運轉手が、この光る眼玉を狙つてフルスピードで驀進する。さうすると泡を喰つて飛び立つた夜鷹は大抵、自動車の前の方の硝子に打突かる。これは自動車による狩獵法違反であるが、この夜鷹は汽車にもよく打突る。これも夜間この鳥が鐵道線路で餌を拾ふことが多く、それに少し間が抜けてゐる鳥だから、汽車が近づくまでは平氣でゐて、いよ／＼接近して飛び立つた時は既に遅く、機關車に衝突して敢えない最後を遂げる。雉の場合も餘りに近い距離から泡を喰つて飛びだした時、さう云ふ不慮の災厄に遭ふのだと思ふ。電線の場合でも同じ事が云へる。追掛雉獵の勢子は軽くウン／＼と咳拂ひする程度で、これを不意に追ひ立てることをしない。これは要するに雉に對して避難の心構へと用意とを興へるためと私は考へる。だからかう云ふ注意を拂つて追ひたてられた雉は、間違ひなく豫め決定してある野地に飛び込まんとする。尤も雉が物を避ける技能を缺いてをるとし

たら、雉はあつちへ行つて打突かり、こつちへ来ては打突かりといふやうに八ツ當りばかりしてゐなければならぬ。

人威を藉りて鷹の難を避ける雉

— 宮内省保存上げ鷹獵から —

早朝啄食中の雉を狙ふ

上げ鷹獵ばかりは廣い耕地でないと出来ないが、これは一つには鷹を使ふ關係からである。鷹といつても玆でいふ鷹は隼をいつてゐるのであるが、兎に角鷹狩の中で最も至難の技術を要するのはこの上げ鷹獵である。これは字義の通り鷹を空中に飛翔させておいて雉を捕らせる方法であつて、同じ鷹狩とはいつても蒼鷹を使ふものとは抑々その訓練からして違ふ。鷹の訓練に就いては別の機會で述べるところでは、既に訓練された隼を使つて雉を捕る方法と、この獵を通じて見た雉の習性にだけついて述べることにする。

上げ鷹獵の行はれるのは大體一月下旬である。この獵も亦朝は早い。早くないと雉が朝飯を済ませて、野地や樹蔭に潜んで了ふからまだ啄食中の雉を狙つて行ふやうにする。

蒼鷹には頭巾を冠せるやうなことはしないが、隼には冠せる。頭巾は云はゞ目隠しである。

隼の注意力の散漫になるのを慮れて、これを冠せるのであるから、愈々獵にかゝるまでは、これを取り去るやうなことはない。

耕地で一生懸命餌を拾つてゐる雉を見つけると、あれを捕らうと云ふことになる。そこでわざと或る程度後退して、隼にスタートを切らせる。隼にスタートさせると云つても、拳の上の隼をたゞおつ放すだけではない。そこにはちゃんと一つの法式が出来てゐる。それには先づ隼を据ゑた鷹匠と、振り鳩（生きた鳩に繩をつけたもの）を持つた助手とが、約十間の間隔をおいて向ひ合ふ。此所で初めて隼の頭巾が取り去られる。これを見て相手の助手がピリ／＼と笛を吹き鳴らしながら鳩を振る。隼がキツと身構へる。呼吸をはかつて放つ。さつと躍りかかる隼を認めて、助手が咄嗟の間に振り鳩を小脇に隠す。目標を失つた隼が鳩を捜して助手の頭上を舞ふ。かうしてスタートした隼を今度は鷹匠が引き取つて旋回させる。ピリ／＼とと笛が鳴る。一笛毎に高度を増して約三十尺に達した時、鷹匠が雉へ向つて駈け出す。これをきつかけに他の鷹匠も勢子も一緒になつて走る。旋回してゐた隼が鷹匠の笛の後を追ふ。

隼の姿に身を竦ませる雉

一方耕地の雉は、頭巾を冠つて獵匠の拳に据ゑられてゐる隼を見たゞけでは、平然と啄食を續けてゐたものが、一度スタートを切つて空中を旋回してゐる隼の姿を發見するや、こそこそと土塊の蔭に潜み、息を殺して小さくなつてゐる。

いつか飛翔中の隼が、居竦んでゐる雉を見つけてこれに挑みかゝらん氣配を示す。この氣配を見てとつた鷹匠がだつと雉に迫る。勢子があとに續く。隼を恐れて竦んでゐた雉も、人間に迫られてはゐたゞまれない。チョケーンと一聲鳴いて飛び上るを、得たりや賢しと眼にも止まらぬ早さでこれに食ひ下り、あはやと云ふまに一撃を食はせれば、雉は忽ち飛翔力を失つて落下する。これを早くも身を翻へした隼が追つて、第二の襲撃を加へたのは雉の身體がまだ地上に達しない前である。的確なキツクを二度まで喰つて、今や全く力盡きた雉は、間もなく地上において隼の鋭爪にむんずとばかり組み敷かれる。

獵としての山はこの上げ鷹獵もあつけないものゝ一つだ。然しこの獵の面白さは鳥を使つて鳥を捕るところにある。この獵では隼の變つた習性も判るが、これは隼を捕る獵の中で述べるとしよう。それはさておいて、雉がこの獵で示す最も顯著な習性は、空中の隼を認めたら、直ぐその後、土塊の影に身を潜めてぢつと動かないことである。頭巾を冠つた隼を認めたら、直ぐその

場で飛び去れば、無事に脱れられるものを、身をすつかり隠し終せた氣で動かないでゐるか、その間に悠々と隼をスタートさせることが出来る。尤も雉にして見れば、頭巾で目隠をさせられてゐる隼が何であるか判らないのかも知れない。空中へ舞ひ上つたのを見て初めてそれと氣がついたがその時は既に飛び立つ機會ではなかつたのであらう。でなければ自己の潜匿術に自信を持つてゐてこれで安全と思つてゐるのかも判らない。或はまた恐くて腰が抜けたのかも知れない。所が鷹狩の隼には奸智にたけた人間がついてゐて、いゝ頃合を見計ひ、無理に追ひ立てるから叶はない。鷹を見つけた雉が土塊の蔭にかくれてぢつと動かないのは、どうも腰が抜け、足が竦んだために違ひない。それは蛇に睨み据ゑられた蛙以上かも知れない。それは隼の先に立つて走つて行く勢子が、二間の近距離に達しても尙且つ空中の隼を恐れて飛び出さうとしないのでも判る。雉に向つて人間と鷹とではどつちが恐いか訊ねて見るがよい。雉は必ず鷹と答へるであらう。

人威を藉りて鷹の難を避ける

隼に追はれた雉が人家に飛び込む例は少くない。これは咄嗟の場合の避難所として飛び込む

のか或は人間の威を藉りて、鷹の危難から脱れようとしてのことか。恐らく私は後者と考へる。白鷺に鷹を羽合せると、白鷺は遂には鷹匠の眼の前に降りる。これが野の鷹なら人間の姿を見て驚いて逃げ去るから思ふ壺であつても鷹狩の鷹ではさうはいかない。折角の白鷺の計畫はみす／＼水泡に歸する。然しこの白鷺の行爲の中には、確かに人間の威を藉りる意思が、十分に含まれてゐると見るべきであらう。また鷹に追はれた鶴が、窓を明け放ちお裁縫をしてゐる主婦の眼の前へ飛び込むことがある。これなどもたしかに、人の威を藉りて、鷹の難を避けやうとする意思で行はれたものと思へる。雉が人家へ飛び込むのもそれと見て先づ間違ひな

雉はまたある一部の人達からは近視眼と見られてゐる。この人達はどの範圍までを近視眼に入れてゐるか知らないが、この獵では雉は相當の距離から隼の姿を認めて居竦んで了つた。これを見た私には、どうしても雉が近視眼であるとは思へない。事實またこの位の視力を持たない事には、たとへ鋭敏な聽覺を持つてゐるとしても、雉の命は幾つあつても足りないのではないからうか。自分の頭の上へ鷹や隼が飛來しても、のほ／＼んに構へてゐたらそれこそ命はない。況して廣い明けつ放しの耕地を啄食場としてゐる雉にあつては尙更の事である。こゝにおいて

雉には身邊に迫る危難を未然に防ぐ何等かの技能が授つてゐなければならぬ筈である。その技能の有力な一つが鋭敏な聽覺であり、もう一つが視力であることは先づ領れる。それに次いで潜匿の術であらうが、然しこれは聽力と視力が相俟つて初めてその効果が得られるのであつて、單なる潜匿は意味をなさない。云ふところの聽覺の鋭敏も興つて大いに力があるに違ひないが、遠距離からする猛禽の襲撃を逸早く知るに役立つかどうかは疑問とするところだ。それとも雉には、鷹の羽音を空氣の震動か何かで感得する特殊な機能でも持つてゐると云ふのであらうか。若しさうであるとすれば、鷹や隼は到底生のいゝ獲物の御馳走には預れない筈であるのに、事實は鷹や隼の犠牲となる雉の數は馬鹿にならない。

雉は近視眼にあらず

獵の中には鷹の羽音の擬音を利用して、雀や兎を捕るのがある。鷹の羽音の擬音が最も効果を上げるのは雀の獵で、これには竦み笛をかけるのと、鷹風術雀獵と云つて、紙片を小石につけびゆつと抛るのがある。兎の場合だと一尺程の木片を抛る。これをバイガケと云つてゐるが、この羽音の擬音が抑々鷹や隼の飛翔中のものではない。これは矢張り獲物を狙つて急降下

する時の空を截る音である。かう見て來ると、雉が鷹や隼を警戒する最善の方法としては矢張り視力が第一條件と思ふ。どうも雉を近視眼とする説はあたらないと私は考へる。

砂浴しながら餌を啄む山鳥

——山鳥の啄み撃獵から——

午前四時にホロを打つ

午前二時に獵師の家を出て、山の神の祀つてある山にかゝつたのは午前三時半であつた。川の流れに沿つた林道からこの山にかゝると、あたり一面は雪崩で埋まり、道らしい道もなかつたが、私は熊狩獵師のあとへくつゝいて喘ぎ喘ぎ急坂を上つた。いゝ加減行くと雪崩もなくなり山道らしい道が細々といつてゐた。こゝから暫く上つた所に一本松があつて、その傍に山の神様が心ばかり祀られてゐた。獵師達は茲へ着くと、着てゐる襷を脱ぎ、背負つてゐる荷物も下し、冠つてゐる帽子から、首に巻いてゐる手拭まで取つて恭々しく頭を垂れ、パン／＼拍手を打つた。去年も私はこの道を上り、この山の神に祈願する獵師達の敬虔な態度に心を打たれたが、その時は夜も全く明け放たれた午前七時頃であつた。ところが今度は眞暗闇の中で獵師達の拍手を聞いた。前年の時にも増して敬虔なる寮圍氣に包まれた。私も今日の行動が恙がな

かれと心で祈りつゝ、前年上つた道を一人トボ／＼先へ進んで行つた。このあたりは山と云つても申譯ばかりの矮樹が、所々に若芽の香を漂はせてゐる云はゞ禿山に近いものである。細く急激な山道を、右に曲り左にくねつて上つて行く私の左側で、突如ホロ／＼／＼と異様な音が起つた。私は立ち止つて耳を聳てた。音はそれで止んで後は聽えない。私は更に上りにかゝる。すると間もなく今度は右手で前と同じ音がした。私はこの時これはひよつとすると山鳥のホロ打の音かも知れぬと思つた。この音なら確かに少年の頃聽いたことのある音だ。然しそれにしては時間がいやに早いと時計を見ると午前四時だつた。四時ならそろ／＼夜が白む頃と、東の空を望むと、漆黒の空がほの／＼と白みかゝつてゐる。

さうかうしてゐるうちに、あつちでもホロ／＼／＼、こつちでもホロ／＼／＼と連続して起る。そのホロ打から推してみると、今私の上つて行く禿山の斜面には、少くとも七、八羽の山鳥があるらしい。暫くすると獵師連中が私に追ひついて來たので『この山に山鳥がゐますか』と聽いて見ると、『ハアありますさあ』と云ふ返事に、それなら今のあの音は山鳥のホロ打に違ひないと思つた。これは四月廿八日の朝のことであるから、時期から見てもホロ打の酬なのは當然である。

私は絶えて久しい山鳥のホロ打の音で、少年時代の夢をゆくりなくも呼び覺まされた。

秘境奥秩父の獵

私が少年時代を過ごした埼玉縣秩父郡大瀧村は、狩獵鳥獸の多いのでは有名な土地だった。獵が好きで都會から段々奥地入りをした父について、私達の家族も段々と山の中へ移住して行った。栃本と云へば、大瀧村でもどん詰りの部落で、秋になると川一つ隔てた向山で、鹿の鳴く聲の聽かれた程の秘境であつた。私達はこの部落で三、四年を過し、その後引移つた鶉平では六、七年を暮した。

栃本にゐる間私の父は鹿撃にも行つたし、熊狩にも行つた。山鳥撃もしたし雉撃にも盛に出掛けた。茲に住んでゐる間は、私は一度として父の獵のお供を仰せつかつた事がない。然し私は、この土地で私の先輩達から色々な獵法を學んだ。一番最初に覺えたのは宙張りである。これは竹或は生木を折り曲げ、紐で弾きの仕掛けを作り、小鳥達の咽喉を絞め上げるやうにしたものである。この仕掛けではカケスやホホジロ、ツグミなどが捕れた。同じ仕掛けでも附けておく餌によつて、それがトウモロコシならばカケスがかゝり、粟乃至稗の穂ならばホホジロがか

かり、また野バラの赤い實ならツグミがかゝつた。

その次には山鳥のオツツ獵を學んだ。これは山にまだ雪があつて、山鳥の食物が缺乏してゐる時を見計ひ、ホヤ（寄生木）の實を餌にして、山鳥を壓殺する仕掛けである。この仕掛けは何れ寫眞に撮つて御紹介するとして、今茲でその仕掛けを文字でもつて説明する煩は省くことにする。かう云ふ仕掛けを山鳥の多くゐる山のあつちこつちへ何箇所も作つておき、翌日これを順次に廻つて見る。仕掛けが外れて、長い節のある尾羽が仕掛けの外に出てゐるのを發見した時、私の小さな心臓は、喜びのためにわく／＼と震へ上る程であつた。かうして捕つた山鳥はきつとお正月の神棚に捧げられた。

鶉平へ移つてから私は屢々父の獵のお供を仰せ付かつた。最も多かつたのは山鳥の啄場へ出るのと、水飲みに出るのを撃つ獵であつた。雉を笛で寄せて撃つ獵にもよく行つたものだった。しかし、今では違反になるかも知れないが、以前は山鳥のホヤ撃といふがあつた。これは日没直前に樹上のホヤ（寄生木）へ上つて、このホヤの實を食ふ所を、その近くへ鳥舎を作つておき、この中に隠れてゐて打つ獵である。

私達の住んだ大瀧村は地理的關係から云つても雉より山鳥の方が多かつたから、勢ひ山鳥と

接觸する機會が多かつた。

秩父盆地から隆起した所謂秩父山塊は、北へ北へと峰を高め溪を深めて行つた。荒川はこの溪を最も深くえぐつて流れる大川で、中津川はこれに續き、落合で荒川と合流してゐる。栃木はこの荒川の上流に位し、鶉平は中津川の流に沿つてゐた。私は幼き頃の最も夢多い日を、この鶉平で送ることが出来た。狩獵の興味を根つから私に植まつけたのも實はこの鶉平の自然境である。

荒川の本流は、荒い山々の水を集めて、性急に流れてゐた。これに引き代へて、中津川は、溫和な山から水源を發して、溫和な溪を溫和な姿で流れてゐた。中津川の沿岸でも鶉平は云ふうちにも靜かであつた。鶉平はその名の示すやうに山峽に展けた僅かばかりの平地で、私の住んでゐた家は、山の裾に連なつてゐた。家の背後に急傾斜の畑があつて、この畑に麥の植つてゐる早春の頃、父が家の窓から顔を出して、雉笛をチイヨ／＼と吹くと、畑續の山の中からよく雉が出て來たものだつた。かう云ふ環境の中で私は育つた。

陽當りのよい山に啄場が出来る

山鳥の啄み撃は十一月から十二月へかけて行はれた。山々の紅葉が山嶺から溪へ向つて錦繡を流すやうに、木の葉が散り敷くのも峰から始つて溪につきた。落葉に埋れた山肌が秋の陽にぢつくり照らされると、そこにはほの／＼とした溫もりが漂ふのであつた。この頃になると、あつちの山でも、こつちの山でも山鳥の啄みが始つたが、それと時を同じくして家では銃の手入れや装彈が秘かに行はれるのであつた。

啄みは食物を攝ること、啄み場はそれを攝る場所である。そして山鳥の啄み撃は、山鳥が食物のある場所をみつけ、そこへ時間を決めて食ひに出て來るのを待つてゐて撃つ獵である。山また山の中で、この啄み場を探し出すことは經驗のない人達には至難の技と云へるかも知れない。それは恰度知らぬ山の中へ行つて、熊の穴を探し出すのとちつとも變らない。然し古い獵師が、それを一種の資産として秘藏してゐるやうに、山鳥の啄場も古い土地の獵師になると幾つも持つてゐる。あの山ではあのヒラ、この山ではこつちのヒラと云ふやうに、大體決つてゐるのであるからして、これを發見するにしてもさう困難なことではない。それは山鳥の持つ習性と、山の色々な條件が一致して、初めて啄み場と云ふ結果が生ずるのであつて、さう云ふ場所は、どこへ行つてもあると云ふ譯にはいかない。たゞその年の木の實などの關係で多少の

移動はあつても、ある山の山鳥が他の山へ全部移動してしまふと云ふやうな事は極く稀である。さうであるからして、今年それを探す時には、前年の場所を中心とし、それでいけない場合には前々年の場所を中心として探せば、大抵探し出すことが出来る。

今此所で云ふ啄み場は、單なる啄食場だけではない。それは雉鳩における啄食場とは異つて山鳥の場合は、啄食場兼砂浴場である。抑々これは一種の生理的欲求による現象であるからして、時期が来れば、必ずさう云ふ現象が限られた山の中で嚴肅に行はなければならないものなのだ。

啄み場となる山は概して南西面の山が多い。それは砂浴が大抵午後一時頃から始つて、三時頃に終るので、その間強烈な日光の直射を必要とするからである。それであるからして、食物が豊富で、日當りがよくて、それでゐる山の静謐を犯すものゝない山ほど、啄み場の條件は好い。それではこれが山鳥の啄み場であるといふことは何によつて判るかと言へば、それは落葉が一面に掻き立てられてゐて、そしてその場の地面が、丸く掘りおこされてゐる所は先づそれと見てよい。私も父のあとに跟いて廻つて幾度か、その探索に當つてみたが、経験もあり、場數も多く踏んでゐる父の方が矢張り発見の率は多かつた。

鳥舎を築いて山鳥の眼をかすめる

かうして啄み場を発見すると、その射程距離内の適當な場所を撰擇して、鳥舎を築くのであるが、それには大抵樅や梅の枝を切り集めて作る。鳥舎の廣さは、父と私が潜み、そうして銃を自由に操作出来るやうな餘裕をとつて、その廻りへぐるりと青い葉のついた樅や梅の枝を立て廻し、外部からは内部の模様が見えないやうにして置く。中は枯葉を綺麗に掻き取り、中央に爐を切つて寒い日のために用意しておくと言ふやうに、割合に念入りしてある。これはいよゝ山鳥が出て来た時に、落葉の音を立てて徒らに山鳥に警戒心を起させたり、或はマツチをする代りに樺火を作つておくための用意であつた。

父と私は午前十一時と云ふと早晝飯を済ませて、啄み場の山へ上つて行く。私の住んでゐた家の右隣の家の傍を、一本の小澤が流れてゐた。私達はこの澤に沿つてひた上りに上つて行く。いくら山家育で、山へ登ることに慣れてゐるとは云つても、溪谷の部落から山の頂近くまで上るには、時間もかゝり、汗も十分に流さなければならぬ。

一旦鳥舎の中に入ると、山鳥が出て来て片のつくまでは出ることを許されない。煙草の好き

な父はよく煙管を唾へて、うまさうに紫の煙を吐き出したが、私はそれをボカンと眺めてゐるに過ぎない。それでは手持無沙汰かと云ふと、私はちつとも退屈しなかつた。樅や梅の枝を立て廻して作つた鳥舎は、云はゞ一種のブラインドで、然もそれが天然のものであつたから、山の放浪者達は何の屈托もなく私達の近くまで接近して來た。ジュルリ〜と云ふ涼しい鳴聲が聽えて來て、間もなく三十羽程のマツムシ(エナガ)の群が近寄つてくる。木の枝から枝を飛んで克明に小蟲を探してゐる。これ等の群が通り過ぎてあたりが前にも増して静かになつたと思ふと、遙か離れた山の斜面からコツ〜といふ物を叩くやうな音が聽えて來る。これはアラゲラが、あのよく弾むハムマーで、樹間から蟲を叩き出す音であつた。この位人間の生活から離れた高山では、音響と云へば、鳥の鳴聲か、羽音か、或はハムマーの音か、さもなくば一陣の風の渡る音ぐらゐのものだ。散り残りの枯葉に風が渡るとかさこそと鳴つた。この音を何度山鳥の足音に聽違へたか知れなかつたが、それは雉鳩の兩羽類双網獵で、鳥舎の前面をスイ〜と飛ぶアキアカネを雉鳩と見紛ふのと同じ類のものであつた。かうして私は手でこそする何の仕事も持たなかつたが眼と耳は常に楽しい多忙に追はれてゐた。

進んでは立降り立停つては進む

さうかうしてゐるうちに、尾根の向ヒラからガサ〜と落葉を踏みならす音が聽えて來る。「來た!」とたゞ一言父が云ふ。音のする方へ耳を傾ける。ガサ〜と續いてまた絶える。暫く絶えてゐて、またガサ〜と續く。ガサ〜と落葉を鳴らすのは歩いてゐる時で、それが絶えた時は、立停つて首を立て四邊を警戒してゐる時だ。遠い間はこれを繰り返してゐるが、啄場近くなつて來ると、もう遠慮がない。一氣に目的の場所へ突進する。長い尾羽をピンと張つてガサゴソと落葉を掻き鳴らす雄山鳥を見ると、その場で一發撃ち掛けたくなる。

父は銃をさつきから啄み場の一點につけてゐて放さない。私はすすと進んでゆく山鳥を見守つてゐる。鳥舎の中で黒い線がツート動いたゞけでも山鳥は後退する。それを知つてゐる私は身動き一つしない。蕃殖期の小鳥達は、他の如何なる時期よりも大膽になる。それは蕃殖の本能に目覺めてゐるためであるが殊に育雛中の親鳥はそれが激しい。抱卵中或は孵化後間もない雛を抱擁してゐる親鳥は、人が近づいてもなかく飛び立たないが、いよゝ危険が迫つた

と思ふと己むを得ず飛び去る。然しこの場合遠くへ飛び去るやうな事は稀で、きつと近くからこれを警戒してゐる。そして人がその巢から遠去かるのを見ると、すぐに飛び戻つて抱卵乃至哺育を続ける。が若し人が巢の傍に立つてゐて離れないやうな場合は近くまで来て様子を窺ひ、なか／＼巢に戻らない。ところが思ひ切つて歸つてそれで危険がないと見ると、今度は平然として人の見てゐる前で、抱卵もすれば餌運びもする。これは卵や雛を護る強い本能から行ふのであつて、若しかう云ふ本能の目標を持たない鳥は、一旦危険から遠去かれれば再び戻つてくるやうなことはしない。今砂浴といふ生理的本能と食性本能の二つに驅られて姿を現はした山鳥も、自分が發見した理想的な啄み場へ一歩足を踏み込めば、誰に氣兼ねするでなく、誰に遠慮をする必要もないから、地面に腹を擦りつけ、羽を半ば開き、脚を無雑作に投げ出し、羽と脚を同時に動かし、バサ／＼と土を掻き立て、跳ね飛ばしながら土を浴び、首を伸してドングリなどを拾つて食ふ。

金属性の音響は禁物

砂浴に調子づいた山鳥を撃つものには、周章てゝはいけなない。然もそれが二羽であり、三羽で

ある時は尙更である。正確な狙ひで一發一殺主義でいかなないと、來た鳥を全部撃ち捕ることは六ヶ敷い。最初の二羽を半矢にしてバタ／＼暴れさせたら後の鳥は一度に飛んで了ふ。反對に最初の鳥をコロリと即死させれば、爾餘の鳥は一時はキツト首を擡げるが、銃聲が筋となつて山峽に吸ひ込まれて了ふ頃は、再び啄みを始める。そこでまた一發コロリとやる。かう云ふやうにコロリ／＼とやれば、何羽ゐても撃てる。所が村田銃のやうな鐵砲では遊挺を起したり倒したりする時に、どうしてもカチンといふ音が起り勝だ。この金属と金属のかち合ふ音が絶対に禁物である。一發でコロリと即死させても、この音をさせたら正に百日の鐵砲で、後の鳥を一度に飛ばして了ふ。父も村田銃を使つてゐたから、この遊挺の上げ下しには並々ならぬ苦心をした。その苦心の表情が今でも私の眼の前に浮ぶ。それでも段々馴れて、それからと云ふものこの金属音で山鳥を飛ばすことはなくなつた。私が父に跟いて行つて同じ啄み場で撃つた山鳥は三羽が一番多かつたが、水場では一回に八羽の記録を持つてゐて、鐵砲の自慢話が出るとよくこの話を持ち出したものだつた。

かうして出て來た鳥を撃捕り、あともう來ないとなると初めて鳥舎を出て獲物を收め、日暮れの山を部落まで驅け降りるのであるが、その時の心の豊かさは、今想ひ出してもワク／＼す

る。幸ひ蕎麥を打つことの得意な母が、こんな時氣を利かせて新蕎麥でも打つておいて呉れば、父の撃つた山鳥で、差し當りシツボク蕎麥と云ふ所である。これは山家の生活にして初めて味へる俳味ではあるまいか。

獵が飯よりも好きだつた父國助も、蕎麥打ちに鼻高々だつた母の田鶴も、今は共に此の世にはない。然し私に獵の味を心底味はせて呉れた奥秩父の山々は、今も尙健在だし、父に撃たれた山鳥の子孫もいよ／＼益々榮えてゐる。そして春が巡り來るとホロ打の愛の囁きは、一際熱を帯びることであらう。そして秋ともなれば、三十年の昔の啄み場へ、今も尙山鳥達がつくとであらう。しかもこの現象は山鳥が地球上から影を没び去らない以上、永劫に續くたちものだ。私は近いうちに再びこれを訪れたいと思つてゐる。

同僚の屍を搔きのけて水を呑む

—— 山鳥の水場獵から ——

山鳥のつく水場

晴れた日が幾日か續くと、落葉の山は乾きあがる。山鳥の喉が無性に渴を覺えるのもこの頃だ。この鳥が水につくのは、季節的には啄みの頃と一致する。啄みを狙ふか、水を狙ふか思ひ惑ふのもそれが爲である。また啄みと水とは地形的にいつても同じやうな場所が多い。

啄み撃の項でも云つてゐるやうに、啄み場は同時に砂浴場をも兼ねてゐる。鱈腹餌を拾ひ、思ひのたけ砂浴をし、さて水を飲んで、一日の夢を結ぶとなると、啄み場と水場が餘りに離れてゐるのでは好適な条件とは云へない。

私達は、前の啄み場から二三丁離れた同じ地續きの山合で、点滴の水場を探し出して、啄み場の時と同じ鳥舎を築いた。この水場では前年も三羽撃つてゐる。

雪が降つて食糧難になると、山鳥は段々山を降るが、雪の降らないうちは、山嶺に近い所で

生活してゐる。この頃の山々はよく照り込む。照り込めば照り込むだけ水場は繁昌する。私達が水場と決めた場所は、落葉の下から僅かな水が泌み出してゐて、それが岩を傳つてポツンポツンと滴り落つるといつた儚ないものであつた。この点滴の水が朽葉にせかれて、そこに心細い程の水溜を作つてゐた。私が父に連れられて來た時、この水溜の上へ覆ひ冠さつてゐた新しい落葉は、邪慳に掻きのけられて、古い朽葉が顔を出してゐた。そしてゴクンと飲めば一度で飲み干して了へさうな水が、僅かに輝しい空の希望を映してゐた。眞新しい糞が、立派な證據物件として残してある。これは紛れもない山鳥の今年度の水場である。私達はこの水場の右手約五間程の所に、とある岩を楯に鳥舎を築いた。この岩の上へ銃を載せると、いい按梅に水場が狙へたし、この岩で身體の大半は隠すことが出來た。鳥舎としてまことに申分のない條件に恵まれてゐた。

水を呑むのは日没前

山鳥が水につくのは、四時前後に限られる。私達は遅くも二時頃までには鳥舎に潜れるやうに家を出なければならぬ。鳥舎へ入つて、何時出て來るか判らない鳥を待つのは、ゐるかゝ

ないか判らない水中へ絲を垂れて、今か今かとあたりを待つ太公望の心境と似てゐる。この心境がまた何とも云へない楽しみなのである。

鳥舎に潜んでゐる間に、段々陽が傾いて、眞赤な夕陽が、落葉をあかねに染める頃、どこからともなく吹いて來た風が、殘葉の鈴を振つて通ると、何となく深い淵へでも引込まれるやうな淋しさが襲ふが、この淋しさがまた何とも云へない。あたりが静かなだけ、落葉が一枚動いてもそれが途方もない音に響く。

乾き切つた落葉を掻き鳴らしながら、近寄つてくる山鳥の足音は、遠く離れてゐても、それと判る。足音によつて、それが一羽であるか二羽であるか、或は三羽であるかも判る。足音が聞えてくると、父は唾へてゐた煙管を取つて、地面におき、肺の中の煙を一息にフーと吐き出す。紫の煙が、常緑樹の鳥舎の中をたゆたふ。装弾された銃が靜かに水場に向けられる。歩いては止り、止つては歩きながら近づいて來る足音が、一音毎に擴大される。もうすぐその尾根の向う側へ迫つて來た。鳥舎撃には私も大分馴れて來た。一々父からの注意を受けないでも、父の意思に背くやうなことはしなくなつた。初めのうちは足音がすると、逸早くその姿を見たいばかりに身體を右に向け、左に捻つたものであつたが、今ではもうさう云ふことはし

ない。此所へ現れるだらうと見當をつけたら、そこだけを凝視してゐてちつと動かない。それであるから、どうかすると見當を過つて、生きた山鳥の姿を見ないで終ることもある。

雄の屍を掻きのけて水を呑む雌

水場へ出てくる山鳥は、啄み場へ出る時よりも數の多いのが通例である。それだけに狙は飽くまでも正確を期さなければ多獲は望まれない。今私達の待つ水場へは三羽の山鳥がいそいと立ち現はれた。雌が一羽でそれに二羽の雌が続いてゐる。時間はもう四時に近い。私は岩に身を凭せ、眼玉をぐるりと廻せば、水場が視角に入る位置に身をおいた。尾根に姿を現はした三羽の山鳥は、一直線に水場に急ぐ。先頭の雌が先づ点滴の甘露に喉を潤はす。二口三口、嘴を下げて水を含み、そのまま頭をグーと擡げたその瞬間、私の頭の上で轟然銃聲が起り、アツと云ふ間に雌鳥はパタリと斃れた。雌鳥が頭を上げ、キツとなつてあたりを警戒する。先の雄鳥は即死だ。鳥舎の中にはまだ煙硝の香が漂つてゐる。あたりはまた元の靜寂に歸る。二羽の雌が水場へ寄る。即死の雄の頭が水溜の上を塞いでゐる。先に近づいた雌が、この邪魔ものを脚蹴にする。僅かに水溜が現はれたやうだ。この間に父は第二弾を例の六ヶ敷い表情で装填し